
まじょがりっ！

ハク アキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まじよがりっ！

【Nコード】

N6899X

【作者名】

ハク アキ

【あらすじ】

魔女。病名、心欠落障害。それはサバトと呼ばれる何者かに心臓を奪い取られ、命をつなぐ為に超能力を与えられ、そして生きているものを食べなければ生きてはいけない少女たちのことを指し示す。その社会に弊害をもたらす魔女たちを捕獲し、元の人へと戻すべく、政府は心欠落障害捜査機関を設立し、機関の捕獲員たちは罪なき魔女たちを強制的に捕まえていった。これはそんな強くて弱い彼女たちの物語――。色々やりたい事を、混ぜに混ぜこんでいったら、ぶっ飛んでるものができました。右も左も知らない

で突き進んでいる若輩が書いたものなので、当然、設定に無理があります。矛盾だらけ穴だらけです。読む時は、どうか非常に温かい目で、ありえねえ、とつつこみながら読んでやってください。それから、グロいです。エロいです。比率的には7..3くらいです。苦手な方はご注意を。

あんぐらっ！ K a z u r a A n g l e (前書き)

※グロテスク、性的描写が多数（特にグロ）ありますので注意してお読みください。

頑張れば毎日更新予定ですが、たぶん、無理っばいです。
誤字脱字などありましたら指摘お願いします。

あんぐらっ！ K a z u r a A n g l e

この世界は腐っている。

君はそんなことを一度は考えたことはない？

こんな常套句なんて、主食のごはんやパンように毎日食べ飽きる訳でもなく、寧ろ好んで食べるみたいにそんな若者受けの良い言葉だよ。

大人たちは、そんなのマンネリだとか、如何にも偉そうにいうんだろう。どこからそう言う自信がくるのか検討もつかないけどね。そりゃそうだ。大人たちも随分前の青春時代にそう考え、悩み、どうしようもないから諦めた。そんな苦い過去を通り過ぎているのだから、無意味なんだなと悟ったように貶すことは当たり前だし、間違いじゃない。

しかし、君たちはその道を通り過ぎるところか、まだ入り口の目の前にいる。まだ人生で一度も出会ってすらいない。それなのにマンネリだと、あたかもそれが正しいかのように罵るのはおかしいじゃないか。というかフェアじゃない。

大人たちが先に知っていたとしても、君がまだ知らなければ、それは君にとっては新しい物であり、マンネリじゃないし、罵ってもいけない。同じように苦しむ権利もあるんだ。

大人たちにも分かりやすいいうなら、百年前に書かれた小説を読んで、斬新だと感じたのに、その小説を十年も前に読んだ人に、感性が古いと呆れられる感じ、とでも言えば分かりやすいかな？ 古い物に新しさを感じるのは、なんか矛盾していて面白いよね。

つまり、言いたいことは、新しいってのは、知らなかったって事で、ただ、己の人生で一度も出会ってなかったこと。だから世界は腐っているって思うことは、それは正しい感性だし、ダサくもないんだよ。

そんな、腐ってまどろっこしい世界なんぞ、見たくも聞きたくも

ないのに、知らなければ、社会に捨てられて、挙げ句の果て殺さずに自ら消えさせる。と思うのも間違いじゃないし、君がキチガイでもない。

そう、何も知らない君の場合はね。

狂わずに世界を生きている大人たちは、その上、応用の域にたどり着いているから、どうせ何とも成らないんだから考えるだけ時間の無駄、くだらない、と人生の道端に吐き捨てるんだよ。こちらとしては、その台詞もマンネリで、飽き飽きするんだけど、気づかないのかな？ まあいいや、どっちもどっち、って言うことにしておこう。

その応用って何なのか？ 答えは単純。君たちの中にもたどり着いているかも人もいるかもね。なんせ機械的なことなんだから。

じゃあ、意味もない、ぐだぐだな前置きはここまでにして、唐突だけど、物語を始めるとしようか。

腐りきった物語を。

アンダーグラウンドな

世界が目を背けた物語を。

それから、一応さっきの答えを言っておくね。

「考えるだけの時間がもったいない。さっさと自己、時間、名誉、意地、怒意、命を捨てて、社会の為に使えなくなるまで働け」

この世界に生きるには、まず第一に、人生を諦めなければいけないんだよ。

残念ながら、大体の人はね。

あんぐらっ！ Banira Angle 9／16（前書き）

誤字脱字などありましたら指摘お願いします。

急に雨が降り出した。

蒼天を覆い尽くすほどの灰色の雲から、涙のような雨粒が空から落ち、ポツポツと乾ききったアスファルトを斑模様濡らして、最後にはある一カ所を除き、同じ色に塗りつぶした。

その雨は洗い流すかのように周りに立ちこめていた、生臭い鉄の臭いを消してゆく。

そんな温もりも何も感じられない硬いアスファルトの上に、ぺたりと座っていた魔女は、ぼーっと、どんよりとした灰色の雲を見上げて呆けていた。口元についた血や脂は雨ごときでは落ちてはくれない。何一つ洗い流してはくれない。

ここにいても、意味はない。

早くしないと捕まってしまう。

魔女はその場から立ち上がった。ここから逃げだすために、だ。

このまま血の付いた顔で行動したら目立ってしまう。袖で口元についた血や脂を拭き取ろうとしたが、袖もしっかりと血に染まりこれでは拭いてもさらに酷くなる一方だと感じた。

他の汚れていない部分を探し、拭こうとしたが、着ている服の自分の目が届く範囲は全体的にべったりと血が付着し赤く染まっている。思いの外、どす黒くはない。雨で少し薄くなったのだろうか。服に血がついている方が顔よりも目立つのだが、顔はなんというか、直接皮膚について気になるので拭きたい。

仕方がないので、服に飛び散った小さな肉片を摘んで取いて拭いた。顔に雨と血で重く湿った服がべったり付くが、気にせずごしご

しと拭いていく。ふき取れるというよりはさらに汚してしまったような気がする。でも何となく落ちたような気もする。どっちなんだろう？

自分の顔にこびり付いた汚れをふき取れたのか、確かめられる鏡のようなものはないから確認できない。

だが、今自分がどんな表情して生きているのはわかっていた。

誰よりも、気持ち悪くて、そして、誰よりも、おぞましい、と。

もういいや、このまま逃げよう。

人目に付かないように魔女は、路地裏の奥に向かって逃げるように歩き出した。どこに逃げても、逃げきれないことには変わらないが、ここにいるよりは幾分、長く逃亡生活が続けられるだろう。そう感じた。

歩きながら魔女は、これで何人目だっけと頭の片隅で考えていたが思い出せないでいた。

その代わりなのだろうか、あることは思い出した。些細なことだがやらないといけない気がしたのだ。

魔女はくるっと向きをさっきまで食べていたモノ——食べ残しが落ちている方、自分がぼーと呆けていた場所に向け、両手を合わせて祈りを込めて言った。

「ごちそうさまでした」

その落ちているモノは何も答えず、濁った目を見開き、口をあんぐりとあけてたまま体をぱっくり開かれ、中に詰まっていた何かを食い散らかされて鎮座していた。周りには長くて少し湾曲している白い棒や、肌色や白、赤や黒の混じった柔らかそうな破片など、その体を囲むようある赤く染まった水たまりに何かの風情のように存

在していた。

それは沢山の水とタンパク質と脂肪、カルシウムなどを材料として出来た、動いていた塊だった。

中身をばらばらに引き千切られた塊だった。

それにしても、なんというのか、お行儀が悪い、散らかし方だった。

魔女は後悔するというよりはどこか高級レストランで床にスープをこぼしてしまったように申し訳なさそうにその場から立ち去っていった。

雨は絶え間なく、降っている。

魔女はもう、そこにはいなかった。

午後になると雨は止み、厚い雲の切れ間から、さんさんと太陽の光の筋が赤く濡れたアスファルトを照らしていた。

しばらくすると、魔女から見れば――（偏見だが）とても美味しそうに肉を拵えている二人の女子高生がその路地の前を通りかろうとしていた。

その内の一人が、ふと横に目をやり、その塊を見てしまった。

その塊を世間一般的には、

「きゃあああああああああああああああああああああああ
あああああああああああっ!!」

モノではなく、人の死体というらしい。

あんぐらっ！ Masaki Angle 9／18 10∴29（前書き）

誤字脱字などありましたら指摘お願いします。

魔女。

病名、心欠落障害。

サバドと名乗る、正体不明の何者かに心臓を奪われてしまった少女たちのことを差す。

心臓が奪われたからといっても死ぬわけではなく、どうしてか心臓が欠落したまま、生命を維持することでき、平然と生きていられるのだ。

回復能力が高く、腕を切り落とされても、頭を吹き飛ばされても再生し、心でも生き返ることもできるらしい。

だが、ここまでだったら、ただの怪奇超上現象として受け止められ、哀れみの対象か、もしくは羨ましがられる存在に成り得ただろう。

だが、神様は試練を与えるというのだろうか。とある罰を与えた。心臓が無いのに生きていられる対価に、魔女は生きていた物を食べなければ生きていけない。

生きていた物、つまり、生物の生肉だ。

魔女はそのままの調理されなてない、魚類、両性類、爬虫類、鳥類、哺乳類の生肉しか、体が受け付けなくなる。それ以外は食べてもすぐに戻してしまう体質に作り替えられてしまう。食べないと命ある物と同じ摂理で、当たり前前に死んでしまう。だが、ある一定の時間、食べない期間が続くと、飢えによって理性を失い、見境無く生きている物を襲って食べようとする。獲物が見つかるまで、もしくは命がつきるまで徘徊するのだ。

対外、腐るほど、そこら中にいる人間という生き物が襲われてしまうのだが。

それだけでは魔女とは呼ばれることはない。それだけならもつと他の代名詞、ゾンビとか呼ばれたはずだ。

この人喰いが魔女と呼ばれる由縁は、文字通り、魔法——超能力が使えるようになるからだ。

政府機関である、心欠落障害捜査機関の捕獲員のような先天的な能力者も実際にいる。国、世界でも、超能力を持つ人間がいることを公式に認めたため、にわかに信じ難いが、そういうあり得もしないことをやれてしまう、起こせてしまう者がこの世界にいるのだ。

それなら捕獲員などの能力者と魔女は本質的には、ほとんど同じで、捕獲員がただ政府公認というラベルが張られているだけであり、魔女には牛や豚、鳥のような不要になった家畜を食わせて飼い慣らせば、捕獲員とほとんど変わりなく、物騒で揶揄的な名称をつけなくてもいいじゃないか？　と思うところだが、捕獲員、先天性の能力者のほとんどの能力は、治癒や回復、搜索——大ざっぱに言えば攻撃系ではない能力、要するに、非攻撃型の能力を持つ能力者しか確認されていない。それに対して、魔女が持つ能力は、攻撃特化の、殺傷能力特大の桁外れの能力を持つのだ。

ゆえに魔女。

時に鬼とも言われるのだが、こちらの名称はあまり使われていない。たぶん差別的に聞こえるからなのだろうか。どちらにせよ変わらないように聞こえるのだが。

研究者の推論では、先天性の能力者の能力が治癒系が多いのは、単に己を守るためで特化したのであると言われ、魔女が物騒な能力を持つのは、楽に獲物である生物を狩れるために進化したようなもので、いわば蛇や蜘蛛や蠍が毒を持つと同じ理由だといわれている。

そういわれ続けているのにも関わらず、魔女Ⅱキチガイのレッテルは張られたままで、それが剥がされたことはない。兵器や武器が自分たちを守るべき道具ではなく、人を殺すための道具でしかない

と、忌み嫌われているように、世間一般では、魔女は人を殺す超能力が使える人喰いの狂った女の子と思われて恐れられている。

そんな魔女たちは、ほとんどが十代の青春のど真ん中を生きる生き物だ。異性と恋したり、友情を確かめ合ったり、夢を叶えるために努力したり、世界を知ったりする。そんな人間形成と社会を生き抜くための大切な期間を生きている女の子たちだ。

そして、魔女にされた彼女たちは、人生の中でも重要な大部分の青春を謳歌できずに、社会のルール、秩序の為に食い殺されてしまふ、か弱い存在でもあったのだった。

「9月18日 10時29分」

「雅樹マツキっ！ 聞いたっ！？ こくら辺で魔女がまた出て、人を襲って食べたんだってっ！ これで五人目だよっ！」

僕が戸を開けると、青い空と七階から一望できる街並をバックに、幼なじみの熊崎珠奈くまざきたまながいた。服装は平日にも関わらず、いつもの制服ではなく、チェックのチュニックに赤いカーディガン、ブラウンのショートパンツの下に黒いタイツを御召しになっていやがる。肩からは最近買ったと言っていた灰色のショルダーバッグがあった。それに対して、僕は長袖の黒のTシャツにジーパンというラフな格好だった。そして開けるや否や、今日のトップニュースを知っているのか訊いてきた。

「ああ、聞いた聞いた。昨日、帰ってきてからすぐに回覧版回っていたし」

僕は素っ気なく答える。

人が殺されたっていうのに、こうも流行の推理小説や、昨日放送していた連続ドラマを見たか？ みたいに言って、うんうん、みたみた、おもしろかった、つまんなかったとか、声を弾ませて返すのはおかしいじゃないかと、思う。

確かに、人との会話で、相手の話に乗って会話を弾ませることは重要だと、日々の日常で痛感する。だが、このような暗い、しかもノンフィクションの話題で、ブラックジョークのように盛り上がるのは、なんだか、死んだ人を見せ物にして楽しんでいるみたいで、どうも僕はそういう野次馬気分にはなれない。なりたいとは一切思わないが。

「ていうか珠奈、今日は魔女がこの近くいるからって流石に生徒の安全のために自宅学習になってたんじゃなかったっけ？」

僕と珠奈が通っている高校は、今日は生徒の安全のため臨時休校になっている。この周辺の小中高校も臨時休校に同じ理由でなっているはずだ。本当の理由は、魔女に関しての個人情報すべて規制されているはずにも関わらず、マスコミ関係が舐潰しに、この周辺の学校に押し寄せ、引きこもっているような生徒がいなか直接聞いたり、学校周辺に居座り、直接生徒から情報を引き出して手に入れようとするモラルに欠けた記者への対応に、学校職員全員が忙殺されるからだ。

「うん。そうだよ」

珠奈は笑顔で返事を返した。

分かっているなら、真面目に自宅学習しろよ。試験まで一ヶ月くらいあるけど、お前はいつも赤点ギリギリなんだから、早めに対策しろっていつも言っているじゃないか。

まあ、心の叫びはここまでとして、僕は頭を抱えそうになった。

「……何で、僕の家に来たの？」

「おとーさんは会社、おかーさんはパートに、いつも通り働きに行つて家にいないから、暇だから来ちゃいました」

珠奈は追撃するようにいった。相對するように僕はあきれかえった。

ここ周辺には食事を終えた魔女が彷徨っていて、それを政府機関（詳しい名称は忘れた）の捕獲員やらその魔女を捕らえるべく、この町に集まってくる。つまり、世界で一番平和とうたわれているこ

の国の中で、この町が一番危険な場所になるということだ。

実際、魔女は食事を終えたばかりだから、すぐには人を襲わない可能性が高いので、今は安全なのかもしれない。だが、捕獲員の魔女捕獲のとぼっちりを食らう可能性も少なからずある。警察も魔女捕獲のために拳銃を発砲して（そうしないと逆にやられる）対応するのだ。

前に、警察が今にも人を襲いそうな魔女に向けて発砲（威嚇射撃は魔女に対して全く効果はないため）して、見事に襲われそうになった人に当たった（しかも、当たってしまった人は残念ながら魔女に連れ去られ、のちに無惨な姿で発見された）こともあったり、自衛隊を出陣させたが、たった一人の魔女に壊滅させられるという、お国にとってとても痛い事件もあったりと、魔女に対しての黒歴史がたくさんある。

そんな何が起こるか分からない、何が起こってもおかしくない状態である。だから、今が絶対に安全とは言いい切れない。

この状態での一番の安全策は、家に引きこもっていることで、少なくとも、外にいるよりは魔女に襲われず確率は少ない。魔女が家の中に入ってまで襲って来た事例は少ないからだ。

それは、家の中にいる人という生き物より、外にいる生き物の方が圧倒的に多いからで、魔女が出た地域では、まず先に飼い犬や野良猫、カラスの動物が食い殺されることがよくある。田舎だと熊、猪、鹿、狸などの大型の野生動物が多いから、そちらが先に食べられる為なのか、人への被害は少ないらしい。

それでも襲われるの人は、逆に立ち向かう人（捕獲員、警察、自衛隊）と、魔女がここ周辺にいるにも関わらずにこうやって人の家に遊びに来るような、己の安全管理に無頓着な奴だ。ちなみに一番多いのは魔女の身内だ。理由は匿う際に近くににいるから。

そんな身の安全よりも暇をつぶすことを最優先する命知らずは僕の目の前でへらへらと笑っていた。

「と、言うわけで、雅樹のお宅拝見と行きますか」

「どう言うわけだよ。そもそも何回も来てるだろ」

僕は闖入者、もといい、命知らず——じゃなかった、珠奈の進入を拒んだ。

「むむ、さては、朝からえっちな本 or AVでお楽しみ中で、まだ片づけていないのかな？ ………………っ！？ そそそそそそ

それ、じゃあ、雅樹の、このっ、このっ、の手は、雅樹の_AA、_AA、_レを、もしや、せ——汚ないっ！ 触らないでよっ！ この変態っ！」

「……………」

ボタンッ。ガチャッ。

「うああっ！ ジョークだってばあっ！ 拗ねないでよおっ！ 閉め出さないでえっ！ お願いだからあっ！」

そんな思春期真っ最中、脳内桃色の女子高生の声に耳を傾けることなく、僕はいそいそと、部屋に向かい、テレビの下の棚の上においてある写真を絶対に見つからないところに隠した。断じて、その手の写真ではない。

見せたくない物を隠したところで、問題の女子高生をどうにかしなければならぬ。部屋の前で朝から騒がれていても困る。隣近所に変な誤解をされたくないからだ。仕方がなく玄関の方へと向かった。僕だって女の子を閉め出すほど鬼畜では——、

「……………まさか……、本当に……、やってたの……？ あ。

あたし、ちょっと用事を思い出したから——」

よし、さっさと部屋の中に入れよう。

珠奈は、変な臭いがするところには入りたくない、騒ぎ、駄々こねて逃げようとしていたが、僕は、無理矢理、自分の無実を証明するために、珠奈を部屋の中に連れ込んだのだった。

本当に、隣近所に誤解されそう……。

あんぐらっ！ **M a s a k i A n g l e 9／18 10∴37 (前書き)**

誤字脱字などありましたら指摘お願いします。

ちなみに僕は高校生のくせに一人暮らしを満喫している。

元々は別のマンションで叔父さんと叔母さん、その二人の息子の従兄と、四人で暮らしていたのだが、叔父さんが地方へ転勤、その息子の従兄もこれまた同じ地方の大学へ入学、叔母さんもそれについて行った。そのため、僕ひとり、ここに残し、前のマンションよりも、狭い一人暮らし用の部屋を借り、ここに住むことになったのだ。僕としては、トイレと風呂場が別であれば、なんでも良かったので、最近出来たばかりのきれいなこの部屋は、かなり満足している。

なんて都合の良い設定？

違う。

この部屋は、檻のない牢屋だ。

どう考えても、あの家族には、僕という異端者キチガイは邪魔だったのだ。だから、一人、ここに、残したのだ。

もう人生の最後まで、僕に、出会わないために。

〔10時37分〕

「はあ、雅樹の家に来てもつままないな。なんでゲームとか、パソコンとか、トランプとか、人生ゲームとか、操り人形とか、マンガとか、えっちな本とか、ないのかな」

僕と珠奈は部屋にある数少ない娯楽道具のテレビを見ていた。

珠奈は部屋に上がるなりベッドにダイブ（年頃の女の子として、その行動はいいのか？）して、一悶着あったが、それにも飽きたのか、今の彼女の興味は僕がつけたテレビへと移っている。

「なんで、エロ本を遊び道具としてとらえているんだよ？ それと

操り人形を二人でやるのは辛いよ」

操り人形は確かに面白い。しかし、ある程度人数がそろわないと面白くない。ていうかその前に持ってない。

「え？ 男友達の部屋に入ったら、えっちな本の搜索するは、よくある展開でしょ？ あゝそうか、雅樹はアニメとかも見ないもんね」
エロ本を見つけて目読、みたいな展開はあるかもしれないけど、遊びのジャンルとして確立してねーよ。……その辺、疎いからわからないけど。

珠奈はテレビから、部屋にある数少ない娯楽——『手軽で、美味い、弁当のおかず』というタイトルの料理本を読みはじめた。
うん、友達の部屋でやることなくなった人の末期症状だな。

僕は、珠奈からテレビの画面に視線を向けた。テレビの中では、ひっきりなしに魔女について、評論家たちが熱いディベートを意味もなく、繰り返していた。チャンネルを変えても、他の局もそんな感じの討論番組で、僕好みではなく、ちっとも面白くない。そりゃ昼だもんな。若者の感性にはちよつとばかり無理がある。

だから生放送で評論家がダブルブッキングしてないかなーと、見るくらい、超強引な楽しみ方で暇をつぶす。要するに、全く面白くない。

こういう評論家たちは偉そうに言っているだけで、特に何にもしないで、ただ出演料もらってんだよな。何のために討論やってんだよ（ギャラのためだけだね）。お茶の間の方々に共感を与えさせて、あんたらが言っている通りになることなんて、有りもしないだろと在り来りに心の中で罵る。

そろそろ別な番組に変わっているかなーと、再びチャンネルを変え。さっきまで見ていた討論やらとは違い、魔女についてニュースキャスターが事細か丁寧に分かりやすく説明していた。まあこれもあるタイプの物だ。新型インフルが流行った時にどう対処すれば良いのか、お茶の間の細菌とウイルスを同じ物と思っている無知な方々に講義する為の物だろう。

その間、僕と珠奈は会話することなく、ただ暇つぶしに、僕はテレビを見て、珠奈は本を読んでいた。

ついに暇になり過ぎたのか、この場の気まずくもない、何ともいえない空気を変えたいのか、珠奈が本から顔を上げて僕に話しかける。

「魔女ってさ、あたしと同じくらいの年の女の子が突然なっちゃうんだよね？」

「世間一般的にはそう言われているね。なっっちゃうというよりは勝手に改造されるの方が正しい気がする」

仮面ライダーやサイボーグ009みたいにと僕は例を挙げた。珠奈はピンとこなかったようで反応が薄い。なんだかショックだった。「それにしても、魔女が人を襲って食べるは、その魔女の意志でなくて強調しすぎじゃない？」

珠奈が疑問を呈する。僕はテレビの討論家よろしく答えた。

「どちらも被害者、ってことを暗示させたいんだよ。魔女に襲われた方の遺族が、魔女の方の親族ともめ事を起こさない為にね。魔女の方も理性を失って、人を襲っちゃうらしいから、食べたくて人を襲う訳ではないし」

「ふーん」

「そもそも、魔女になりたくてなるわけではなく、何者かに襲われてなるものらしいよ。それに人を襲う理由も、たまたま近くにいたのが、人だったから、という単純な理由だ。だから、そこは仕方がないというのか、なんというのか。魔女になった子を同情してやるべきだと僕は思うんだけどね」

珠奈が反論するように言う。

「でも、魔女になれば、人を殺しても仕方がないってことにしたらさ、魔女になって、嫌いな奴を食い殺してやりたい、と思う子もいるんじゃない？ ほら、それこそよくある二重人格になりすまして、殺人を行う、みたいな感じでき。年頃の女の子なら、そう考える子もでてくるんじゃないかな？」

「年頃の女の子って……、珠奈は含まないの？」

こいつは何様のつもりだ？ まあ人のことは言えないので追求はしないでおく。

「模倣犯が出てくるってことだね？　そういう身勝手な奴がいるから、成りたくないのに魔女になってしまった子が理不尽に叩かれて、可哀想になってくるんだよ」

「確かにそれは分かるけど――」

話を遮るように珠奈の携帯が鳴った。今流行りのアップテンポな曲だ。珠奈がお母さんからだ、と言い携帯を取り出して画面を見た。「魔女がいるから家に籠もってろ。って書いてあるんじゃない？」
僕が本文を推測し尋ねる。珠奈は携帯を見ながら嫌そうな顔をした。

「うげっ、今日の夕飯の材料買ってきて。ついでに洗濯物溜まってるから、洗濯して、ってメールが着やがった」

この無頓着な親子はいったい何なんだ？　食われても文句言えないぞ？　とは一切、口にはしなかった。珠奈は、はあくため息をついてベッドから立ち上がる。

「なんだ、もう帰るのか？」

僕はわざと名残惜しそうに言った。早めに帰ってくれるなら、バレずにすむ。

「何っ？　買い物、手伝ってくれるとなっ！？」

珠奈がきらきらと僕に期待の視線を送ってくる。早とちりしすぎだろ。

「いやいや、珠奈の寄り道は絶対長そうだから、パス」

「けっ、期待したあたしがバカでした」

珠奈はそう吐き捨て、立ち上がり帰る支度する。ていうか寄り道する気満々だったんだ……。てっきりしないから手伝って、とも言っているだけで身構えていたのだが、無駄になった。

珠奈は玄関の方へと行く。その後を見送りの体裁上、僕もその後を着いていく。珠奈が靴を履き、戸を開けた。

「じゃあな珠奈、また明日。って、明日も休みになるか」

魔女はまだ捕まっていない。捕まるまでは学校は休みになるだろう。勉強よりも命の方が大事なのは当然だ。学校側から見れば、もし生徒が襲われた時のクレームや訴訟対策なのだろうけど。

また冬休みが削られるのかと思うと、憂鬱な気分になるよね。そのくせ、宿題の量はそのままだし。

珠奈が手を小さく振って、閉めようとした。

「うん。バイバイ。あ、それとさ雅樹」

「ん？」

急に深刻そうな顔をして僕に忠告する。

「あんまり、魔女のことを哀れむって人前で言うのは止めた方がいいと思うよ。ほら、なんというか、そういう魔女の方をもつ人って、世間から避難されるし……」

「……分かってるよ」

魔女は殺人者と同じで哀れむ対象ではない。

憎むべき存在である。

そう言えるのは、食べる物は生きていた物なら何でもいいいなら、人じゃなくてもいいじゃないか。牛でも豚でも鳥でも魚でも虫でも人以外ならなんでもいい。人じゃないと駄目、と言うわけでもない。それなのに人を食うのは、どんな理由であれ、人喰いの狂った思考を持った奴らと同じだ。

だから、魔女は犯罪者であり許すべき存在ではない。

とも、密かに罵られている。

でも、だから、

だからって、

その魔女を殺しても、構わないの？

珠奈を見送り（玄関までだが）、玄関が閉まった後、僕は部屋に

戻り、隠していた家族の写真を取り出して見ていた。

これ撮ったの何年前だっけか。そんなことを思いながら写真を元の場所に戻した。いつまで女々しく持っているんだかと自嘲した。

次に浴室へと向かう。浴室に向かうのは浴槽を洗うためではないし、シャワーを浴びるためでもない。ましてや、洗濯する訳でもない。

もっと別な用事があるのだ。

僕は浴室の戸を開けた。

「もう行ったよ」

僕は、お湯も張ってない浴槽の中で座っている、ショートカットで、整った綺麗な顔、日に当たったら倒れそうなくらい体と細い手足に、血に染まった白と赤の斑のワンピースを着た僕と同じ年の女の子、甘音あまねばにらさんに声をかけた。

「これから一緒に、ばにらさんの服や肌着を買いに行こうよ。その服をずっと着ているのは、気持ち悪いでしょ？」

「そうだけど、でも、これ以外の服なんて……」

「大丈夫。僕の服を貸すから。それに女物の服って、どういうのがいいのか、僕にはさっぱりだからさ、着いてきて貰わないと、どれ買ってきていいのかわからないんだよね。それなら、ばにらさん自身が選べば手っとり早いでしょ？ それに、ほら、生活用品っていうのか……、女の子に必要な物も買わなきゃいけないでしょ？ だから着いてきてくれる？」

僕としては服よりも、生理用品を買ってきてほしかった。僕一人で、それを買う知識も、勇気ない。

「……………うん、分かった、行く」

もう分かっているとは思うけど、

「……匿ってくれて、ありがとう」

彼女、ばにさんはそう言った。

彼女は、人を襲って食べたことのある、正真正銘の魔女だ。

僕はそんな彼女を匿っている。

僕が後で絶対に後悔をしないために。

あんぐらっ！ Houzuki Angle 9／18 10∴33 (前書き)

誤字脱字などありましたら指摘お願いします。

大型バイクに若い男女が乗り、四車線の国道を走っている。平日であるからなのか、それとも魔女がいるからなのか、それほど混んでいない。時折、運搬用のトラックを追い越しながら、若い男女を乗せた大型バイクは目的地のホームセンターに向かって走っていく。その大型バイクの運転者の後部に座って、振り落とされないように運転者の腹部に細い腕を回して抱きつき乗っている少女は国道に隣接する店をきよろきよろと眺めていた。

白いヘルメット被っているため、顔は見えないが、淡い青色でストライプ柄のチュニックシャツ、黒のチノパンという格好の小柄な少女——鳥兜とりかぶとこならは甘ったるい声色で言った。媚びているわけではなくこれが地声らしい。

「先輩、あと何分くらいで着きますか？」

先輩といわれた運転者の黒いヘルメットを被った若い男性——むのほうずき六乃鬼灯は答える。服装は灰色のジャケットに黒のところどころ縫った跡があるカーゴパンツを穿いている。こちらは普通の低い男性の声で、聞き取り安い口調で喋った。

「んー、もう少しだと思う。俺の記憶が正しければの話だけだな」

「……先輩。さっきの信号、やっぱり左折だったんじゃないですか？」

「いや、このまま直進で合ってるみたいだぞ。ほら」

左前方からホームセンターの看板が見えてきた。そこで先に現地入りしている百合子と待ち合わせ、兼、こならの武器調達の為、一旦、ここを目指して走ってきた。

左折して駐車上に入り、バイクを止める駐輪場を見つけ、そこにバイクを停めた。

先にこならがバイクから降り、白いヘルメットを外す。その下に隠れていた素顔を晒らされる。小柄で顔立ちが幼いが、これでもれ

つきとした十七歳である。髪は肩に掛からないくらいの長さ、癖毛で全体的にウェーブがかかっている。

隣でバイクの施錠を終え黒いヘルメットを外し、こちらも隠れていた素顔が見えた。精悍な顔立ちで、年は二十二歳、髪は耳にかかってくるくらいのぼしているが、手入れとかは特に気にしていないらしく、少しボサボサだった。鬼灯はこならが被っていたヘルメットを受け取りしもう。

こならが言う。

「じゃあ買物に行ってきますね。ついでに買ってきて欲しいものとかありますか？」

「コーヒーでも買ってきてくれ。あと百合子を見つけたらメールするから」

「あいあいさ」

そう言つてこならは、パタパタとホームセンターの中に入ってしまった。残された鬼灯は、ホームセンターで待ち合わせをしている同僚の百合子がいなか、きよろきよろと辺りを見渡して探す。だが、そのような容姿の女性は見たらない。

「まだ着いていないのか」

約束の時間よりも早く着いたのか、それとも外で待つのは暇だからホームセンターの中に入って、商品でも見て暇つぶしでもしているのか。鬼灯は携帯を取り出し時間を確認しようとした時、後ろから声をかけられた。

「私なら、もうとっくに着いているわよ？」

鬼灯は声が聞こえた方に振り返る。そこには売り出されているログチェアに座っている見慣れた女性が座っていた。

長いストレートの漆黒の髪、恐ろしく整った美顔、灰色のワンピースに黒のレギンスを着こなし、膝の上に落ち着いた色の手提げのバック、そして、優雅に微笑んでいる有佐百合子ありさゆりこ（御年、二十四歳）が存在していた。

「なんだよ。いるなら早く声かけろよ」

鬼灯は不機嫌そうに言った。

「邪魔しちゃったら悪いと思ってね。それよりあなた、いつの間にそんな大型バイクなんて買ったのよ？」

「ん？ つい最近だけど」

「あなた、免許取ってからそんなに経ったのかしら？ 確か、大型二輪って免許取得三年以上じゃないと、高速で二人乗りできないはずよねえ？」

「そうだが、こならが乗せろ乗せろ、騒ぐから乗せてやったんだよ。それと運転テクは大丈夫だ。大型の免許取ったのは一年前だが、前から乗り回してたからな」

無免許でなど、さらっと言う。

「……ほんと、この男は鈍感ね」

百合子は小さな声で呟いたが鬼灯には聞き取れなかったようだ。

「なんか言ったか？ その前に、いつの間にそこにいた？」

こならと話していた時はそのログチェアに誰も座ってなかったはず、と鬼灯は記憶を掘り返すが、絶対にいなかったと思う。いたら、こならだって普通に気づくはずだ。

訊かれた百合子は笑った。

「気づかないならそれでいいわ。それよりも、どうせなら買うなら車の方を買いなさいよ。それなら私も乗れるじゃない？」

「嫌だね」

車は走っている気がしないから嫌いだと鬼灯と口を尖らせる。

「うふふ、まあいいわ。こならちゃんの為にもねえ？」

「こならの為って？」

「別に。うふふ」

鬼灯は百合子を訝しげに睨んでいたが、理解できそうもないし時間も食うから、早々に分らない、知らんと結論づけ本題へと移る。「で、今回の魔女の情報はあるのか？ どうせ早めに着て情報収集してたんだろ？」

鬼灯の表情が変わる。百合子はめんどくさそうに、つらつらと機

械的に述べていく。

「ええそうよ。今回、襲われて殺されたと思われる被害者は計五人。すべて二週間以内に起こったそうよ。一昨日、見つかった方もいるそうよ。検死の結果はまだ出てないから、この中で何人が、どんな魔女に襲われたのかは特定できないけど、二週間で五人は流石に多いし、今月にはいつて捕まった魔女はまだ一人だから、最高、三から四人くらいはいると覚悟した方がいいわね。私的にはそんなにいるとは考えられないけど、複数はいると思うわ」

「四人もいたら面倒だな。二週間で五人も襲われるって、模倣の魔女の仕業も考えられないか？　あの魔女なら、それくらい平気でやりかねないと思うんだが。ほら、光さん^{ひかり}とやり合った時の怪我を治すために襲ったとか」

「模倣の魔女と光がやり合ったのは三日前よ？　その前に襲われた人もいるし、模倣の魔女が三日前に光と戦った場所から、ここまで歩きでくるのは、無理ではないけど、相当な時間がかかるわ。ここに来てから襲うのは時間的にも辻褄が合わない。それに、襲うくらいなら近場で済ませない？」

「うーん、じゃあ、魔女草^{ストライガ}だっけ？　あいつらがやったんじゃないか？」

「その可能性は否めない。けど、あの魔女組織にいる魔女は、人を食べないって、あの魔女が断言しているから、これは普通の名無しの魔女がやったと考えた方がいいわね。それに、魔女草^{ストライガ}の魔女たちは、後から組織勧誘にくるのは毎回だし、もしかしたら、もう来てるかもしれないわ。さっさと終わらせないと長引くはいつも通りだけど」

本当、たった一人で、自衛隊を壊滅させたの戦歴は伊達ではないわねと百合子が自虐的に言う。

「で、そいつらの能力は？」

「全員不明よ。そもそも魔女の数も分かってないのに、そんなことわかんと思う？」

「それもそうだな。他の捕獲員は増援にくるのか？ 魔女が四人をこのメンツで捕獲するとか、^{ストライガ}魔女草の連中とやり合うのはキツイぞ？」

「今の時点では、まだ来ない事になっているわ。榊君も、いちりちやんも、他のメンバーもこないわね。あのウザったい光は入院中で、何があるうがこないのよ！ 私的に光が絶対に来ないのが心の底から嬉しくて、もう感極まっている状態なのよっ！ もう一曲歌っちゃいそうなくらい」

「……光さん、誰も見舞いに来ないって怒ってたな……。その他は何かあるのか？」

「上からは特になし。さすがに魔女の数が多ければ、いつも通り増援が来るし、まだ捕まってない、名のある魔女や、サバドがでてきたなら、機関、全員で狩りに行く。まあ、いつも通りやれてることよ」

大体の話を聞いた鬼灯は、こならに百合子に会った、さっき分かれた場所にいとメールする。

十数分後、こならが片手にレジ袋を持ちながらホームセンターから出て、鬼灯と百合子の元へと向かって来た。

「おまたせしました。えーと、あった。はい、先輩。ブラックで良かったですか？」

こならはレジ袋から缶コーヒーを出して、鬼灯に渡す。鬼灯はありがとなといい、缶コーヒーを受け取った。

その光景を見ていた百合子が感想を述べる。

「こならちゃん、いつ見ても、ほんわりしていて、愛くるしいわね。見ていてとっても癒されるわー」

「ありがとうございます。褒められると照れちゃいます……。えっと、百合子さんはお茶ですよね？」

こならは再びレジ袋を漁り、ペットボトルのお茶を取り出して、百合子に渡した。

「ありがとう。こういう気遣いが、どこかの無愛想な誰かさんとは、

本当に違うわよね？　そう思わない？　ねえ？」

百合子は鬼灯に嫌な視線を向け、同意を催促していたが、鬼灯はその視線に我関せず、缶コーヒーのプルチックを開けて飲んでいた。百合子がこならに今回の仕事の内容説明をし終えたところで、鬼灯が言った。

「どれ、気合い入れて仕事しますか」

鬼灯、百合子、こなら。

この三人は、政府機関、心欠落傷害捜査機関に属する心欠落傷害の少女を捕獲し、保護する捕獲員である。

あんぐらっ！ **Masaki Angle 9/18 11:57 (前書き)**

誤字脱字などありましたら指摘お願いします。

ばにらさんには僕のパーカーとハーフパンツを貸した。僕自身背がそんなに高くはないし（低いとは言わない）、細いので服のサイズも小さいので、多少大きくても、そこまで目立つことはないと思ったからだ。着替えた彼女は元の体のラインが良いからなのだろうか、男物とは思えないくらいうまく着こなしていたから、何か問いつめられない限り、怪しまれる心配はない。

少ししてから、僕らはばにらさんの衣類と食料の買い出しに出かけた。

行き先は近場のショッピングモールにした。そこなら大抵のものは全てそろっていると行って過言ではないくらい、いろいろな店が入り交じり、女性物の服を扱っている店なら沢山あるからだ。一階にある食品売場で食料の買い出しもできる。食料の買い出しをするのは、一人増えて、家にある食料が底つきそう、というわけではなく、家にある分では足りない食品があるからだ。それを買うに行かためでもある。なんと言っても彼女は魔女なのだから、僕と全く同じ物を食べるわけにはいかない。

二十分ぐらい住宅地を歩き、ショッピングモールに着いた。ショッピングモールの中に入ると、魔女がまだ彷徨っていると注意がテレビ等で流れているせいなのか、いつもは平日でもそれなりに賑わっているのだが、買い物客がほとんどおらず、閑散としていた。

「取りあえず、これくらいでどうにかして服とか肌着とか、必要な物を買ってきて。食べ物僕が買ってくるから」

そういい、ばにらさんに三万円を渡す。ばにらさんはそこまでしなくていつて遠慮し、渡された三万円を僕に押し返してくる。僕はばにらさんに触れないように注意しながら、取りあえず受け取った。「……こんなにいらないよ。服はこれでいいし、肌着とかは……我慢するから。それにこんなに借りても返せないし……」

「いいから、いいから。はい」

一瞬で返された三万円を、ばにらさんが着ているパーカーのポケットに素早く突っ込んだ。

「全部使いきってもかまわないよ。ばにらさんにあげるつもりで渡したんだから。じゃあ僕は食品売場に行ってくるから、買い物が終わったらここで待ち合わせて言うことで」

一方的にばにらさんに集合場所を伝えて、僕はばにらさんに追いつかれないようにそそくさと一階の食品売場に向かった。

ばにらさんに三万を渡すことに、ためらいなんてモノは微塵もない。だから、心配すること何もない。別に彼女がそのまま三万を盗って、どこかに消えたとしても、僕は騙されたと腹をたてたりはしない。そのままいなくなったら、なったで、僕はそれでいいし、なんだ嘘だったか、と笑い飛ばせる。たった、それだけで済むと考えられるなら、僕は罪悪感を感じることなく、明日を迎えられるのだ。三万で済むなら、僕にとって、安いものだ。

僕にとって、魔女である彼女を救えない罪悪感の方が、自分の命と同様にも重いのだから。

すぐに食品売場についた。そこには業務用の冷凍食品も置いてあり、何より値段が安いので、僕は自炊や、時たま、弁当のおかずを買いによく足を運ぶ所だ。

僕は魚介類のコーナーに向かい、安く、そして、量が多い生魚もしくはある程度保存の利く冷凍物を探す。牛とか豚、鳥でもいいのだが、沢山の量を買うと結構値が張るし、それに直接的過ぎて魔女を匿っているのではないかと怪しまれてしまう。だから、量も値段もリーズナブルな魚介類にした。

「何かお探しのようですね」

しばらくすると定員だろうか女性が話しかけてきた。僕は振り返ってその店員を見た。

話しかけてきた女性は若く、二十歳前半くらいだろうか、長いストレートの黒髪、灰色のワンピースに黒のレギンス着ていて、僕と同じくらいの身長でにっこりと微笑みながら僕を見つめている。僕は一瞬、動揺した。綺麗な人、どこかの令嬢みたいだ、とそんな好印象な第一印象が浮かぶ。

そのあとなぜか、この女性にずっと前に会ったような気がする。何時、何処で、何で、どうして会ったのかは思い出せない。

それよりもおかしいことに気づいた。

ところでこの人は声をかけてきたんだ？

この服装からして、絶対にここの店員ではない。そんな服装でも少なくともここの店のロゴが入ったエプロンをしているはずだ。

じゃあ何で話しかけてきたのだろうか？

「あのー、あなたは誰ですか？」

僕が恐る恐る尋ね、その女性は右手に手に持っている落ち着いた色合いのバックから、黒い手帳らしきもの取り出して僕に見せた。

「私、こういう者なんですよ」

心欠落障害調査機関

捕獲員

有佐 百合子

機関の捕獲員っ！

僕は内心で動揺した。こんなに近くに捕獲員がいるとは思ってもいかなかった。迂闊だった。体中から冷や汗が出てくるが動揺を表情に表さないように注意しながら、気を紛らわす用に僕は平然を装い、尋ねた。

「その、捕獲員が僕に何のご用ですか？」

「ちよっと気になって声をかけたんですよ。まあ、一種の逆ナンだ

と思いませんか？」

ナンパでこの捕獲員手帳を見せるのかよ。合コンで自己紹介するときのネタだと勘違いしてませんか？ 確かに食いつきはいいかもしれないけど。

内心、この理解不能な状況に耐えきれず、泣きそうになった。

「……すごいブラックジョークですね」

僕は恐れず突っ込んでみた。

「ええ。うふふ」

百合子さんは笑った。良かったと、何故か僕は安堵した。

「実は、魔女が餌につられてこう生物が並んでいる食品売場にやってくるがあるので、餌につられてきた魔女をあわよくば捕まえようと、ここで張り込んでいたのですが、やっぱり来ませんね」

百合子さんは、勝手に、何故、ここにいたかを親切に説明してくれた。

「はは、そうなんですか」

「あなたも気をつけてくださいね。まだ魔女が彷徨いているのですから。——それと、どこかであなたとお会いした事ありませんか？ 本当は、どこかでお会いしたことあるな〜と思って、声をかけたのですが………」

急に百合子さんは僕にどこかで会ったかと訊いてきた。

当の本人、僕は、これは本当にナンパされているのだろうかと緊迫感のないことをちらっと思っていたりしていた。絶対に無いな。うん。

「へ？ さあ、僕にはさっぱり——っ!？」

そうだ、思い出した。

この人は、あのときの新人捕獲員と言っていた人だ。

僕はあのことを思いだし、体中がふるえ出し、脂汗が止まらなくなる。呼吸も荒くなっていく。苦しい。くそっ、余計なことまでも思い出してしまった。

百合子さんは首を傾げて、何処で会ったのか思いだそうとしてい

る。思い出せないのか僕に尋ねてきた。

「あの、失礼ですが、お名前は？」

僕はつかえながらも答えた。

「遠藤 雅樹、です」

「エンドウ マサキ……、っ！？ あの時の……」

さすがに名前を聞いて思い出したようだ。そりゃ、一回聞くだけで、記憶に残るよな。あれは。

「ええ、そうです。あの時の馬鹿なガキですよ……」

僕は皮肉に、そして観念するように言った。

「あの……ごめんなさい。その、あの事を思い出させてしまつて」

「いいんですよ。気にしてない、とは言い過ぎですけど、ある程度はなれましたから」

そう強がるように僕は言った。

本当は全くなれてもないし、最近になってさらに悪化してきたのだが、百合子さんに心配はかけたくはないので、虚勢を張ることにした。

百合子さんは心配するように言う。

「そうですか。ここであつたのも何かの縁ですし、何かあの事で心配な事とかありましたら、私に連絡してください。携帯電話は持っていますよね？ はい。これが私の携帯番号とメールアドレスです」

そうして僕はされるがまま、会話の流れで、携帯を出し、百合子さんの携帯番号とメールアドレスを登録する。

「他の人に、自分が辛いと思っていることを言葉にして吐き出すことで、気持ちが楽なるらしいですよ？ それは、人それぞれだと思いますが、私でよければ、いつでもお相手になってあげます。それにあの事の話なら、少なくとも一般の人よりは、詳しく事情を分かっていますので、気軽に連絡してください」

そう百合子さんが心配してくれている中、僕の頭の中であの光景がフラッシュバックして何も考えられなかった。胃の中で何かが暴れ

て、口から逃げ出そうとしている。

一刻も早く、この場から立ち去りたい。

「ありがとうございます。僕、ちょっと急いでいるんで、それでは僕はそういつてこの場から立ち去ろうとした。思い出話に花を咲かせるべき雰囲気なのだろうけど、その思い出が絶対に他愛もない話に発展しないし、ここで長々話すべきで内容ではない。そんなことを話していたら僕が発狂して、死んでしまう。

唐突に百合子さんは僕を呼び止めた。

「あ、そうだ。もう一つ。お節介かもしれませんが」

「はい？」

僕は振り返って、百合子さんを見た。

「魔女に食べさせる餌は切り身より、内蔵系の方が喜ばれますよ？」

「……………」

僕は固まった。

気持ち悪さも、さっきまで何考えていたのかも、すべて吹き飛んだ。ある意味、最高に効果的な治療方法だった。

動揺するな。もしかして、完全に疑われているのか、これは会う人全員にこうやって鎌を掛けているのか、もう分からない。だが、動揺だけはしてはいけない。そう自分に言い訊かせる。

だが、引っ込んでいた吐き気が再び強くなり、嗚咽する。

「大丈夫ですか？」

百合子さんが心配して近づいてくる。その表情は子供を諭すようなそんな微笑みで僕を見ていた。

寄ってくるなど言わんばかりに僕は、大丈夫です、と突き放す口調で言い、百合子さんから距離をおいた。

「それと、さっきのは凄いジョークですね。びっくりしましたよ」

「ええ。うふふ」

百合子さんは笑っていた。性格悪いな、と感じた。

「では、お仕事がんばってください」

「はい。お体にお気をつけて。あと、気軽に電話やメールしてくださいね。なんでも相談に乗りますから」

僕は一目さんにトイレへ、逃げるように向かい、個室に入り、吐いた。

殆ど胃液しか出てこなかった。

そこでうずくまり、恐怖が体から去ってくれるのをひたすら待った。

三十分後、少し気分が楽になった僕は何事もなかったように、トイレから出て、ばにらさんとの待ち合わせ場所へと向かう。

たぶん、彼女は僕と違って、ちゃんと買い物をしているだろう。

あんぐらっ！ Houzuki Angle 9／18 12：54（前書き）

誤字脱字などありましたら指摘お願いします。

「そっちはどうだ？」

『全然駄目ね。牛肉とか魚とか沢山買おうとしている買い物がいるか見張っていたのだけれど、今は一人もいないわ。やっぱり、手帳を見せて魔女の餌は内臓系がいいって鎌かけているのが間違いなのかしら』

「……」

『最初に話しかけた高校生くらいの年の男の子はね、手帳を見せたら顔色変わったから、この子は魔女を匿っているみたいだと思って鎌かけたみたら、案の定、思いつき動揺して、私の前から逃げるように立ち去ったのよ。これはこの子で決定だなく、でも一応、他の人にも試してみようって、確認のために他の人にも手帳を見せたら、その男の子と同じような反応したのよ。繰り返している内に、誰が魔女が匿っているの！？ まさか全員！？ って混乱しちゃったのよ。鬼灯君、私、どうしたらいいと思う？』

「……あのな、誰だってなあ、世間一般で魔女と同じくらい忌避されている捕獲員に疑われていると感じたら、顔色ぐらいい変えると思うぞ。あと最後の鎌かけが最悪だな。そんなことを自分を疑っている素振りをしている捕獲員に言われたら、俺だって、何かしてくる前に逃げる。そんなことよりも、よく店から追い出されなかったな？ そんな営業妨害して」

『今さっき、店から追い出されたわよ。捕獲員じゃなかったら警察呼ばれていたわね』

「……三年くらい一緒に仕事してきたけれど、あんたが賢いのか馬鹿なのか本格的に分からなくなってきた……」

『それは、女の子の気持ちに鈍感な鬼灯君には絶対に分からないことね』

「余計なお世話だ」

『ところで、こならちゃんの情報収集はうまくいってるの?』

「ああ、こならの情報収集によるとだな、最近学校に急に来なくなった女子生徒が一人いるらしい。そいつが魔女かもしれないから、今から家に押し掛けるよ、だな」

『ふーん、それは大変ね。じゃあ私は警察署でも行って、死体の身元と検視結果が出てないか確認してくるわね』

「最初からそこに行けよ。つーか、警察署はマスコミとか多いから入れるかどうかかわからないじゃないか? あー情報規制してるから集まらないか」

『そこはコネ使うから大丈夫。色々あるのよ。鬼灯君が知らないあーんな事や、こーんな事が「あっそ」

鬼灯は電話を切った。こうやって切らないと百合子は永遠と喋り続けるからだ。

「百合子さんの方はうまくいってましたか?」

丁度よく、こならが若者向けの服屋から戻って来た。

ここ周辺の学校は休校になっている為なのか、暇を持て余した命知らずの若者たちがこいうショップに屯しているのだ。

鬼灯とこならは若者向けの（特に女子が好きそう、或いはその類のショップ）を周り、最近急に休んでいる子がいないか情報収集する。

身内が魔女を匿う場合、外に出て誰かを襲ってしまうのと、周りに魔女だと悟られるのを防ぐためか、魔女を外に一切出さずに、学校には病気であると長期欠席の連絡することが多い。

だから、その手の微妙な空気に敏感で、話題や刺激に飢えている中高校生の女子に聞いて回るのが手っとり早い。

前は（今もだが）情報収集は百合子がやっていたので、あんまり（下手すれば全然）あてにできなかったが、こならが入ってきたからは鬼灯は任せっきりになっていた。その任せる理由が、俺が女子向けの店に入ると怪しまれるし、声かけるとナンパと勘違いされるからだ。と本人は言い張っている。

「全然駄目だったそう。本当にあいつは仕事しているのか？」

「今回は魔女が多いかもしれないから、二手に分かれましょうって百合子さんから言い出したのですから、たぶん仕事してますよ……、たぶん」

こならは素直に言った。

「おまえにまで言われるとは、あいつ……、本当に駄目だな。見た目は真面目で何でもできそうな雰囲気なのに。ところで、おまえが持っているのは袋は何だ？ さっきホームセンターで買ったヤツじゃなさそうだし、ここで気に入ったの服でも買ってきたか？」

鬼灯はこならが持っていた服屋のロゴが入った紙袋を見て訊いた。こならは少し狼狽えたながらも答えた。

「えっ、これですか。えーと、これは、その不登校の女の子が通っている学校の制服ですよ。さっき情報提供してくれた人と同じ学校の人が出て、制服もってたんで借りたんですよ。サイズもあつてましたし」

「ああ、なるほど。それ着て乗り込むってわけか。乗り込む時、今の格好よりは怪しまれないもんな」

「そうです。そうですよ！ それより先輩、わたしの制服姿、見たいですか？」

こならは楽しそうに訊いてきた。

「見たい。……って素直に返せばいいのか？ なんかそれだと変態っぽくて、言われた相手も素直に喜べない気がするって俺は思うんだが」

こならはあからさまに不満な表情をする。

「……はあ。せめて見てみたいなく、程度の反応だったら、私も張りがあるし、嬉しかったんですけどね。あと、そこまで気が回るんだったら、わたしが見たいですかと訊いた時点で、こいつ、見せたいんだなく、ぐらい考えてくださいよ」

「そうも考えたが、昔そう返して……、うん。ひどい目にあっただ……」

鬼灯は遠くの方を見て言った。

きつとその向こうには、とある女性がうふふ、と微笑んでいるのだろう。

悪魔のように。

「……そのお相手が、わたしの目にも浮かぶのは、どうしてなんでしょうか？」

「本当に女って分からないな……」

「いや、あの人が別格で凄すぎるだけだと思いますよ？ たぶん」

そんな他愛もない会話を終わらせ、鬼灯はこならが借りてきたと言った制服をバイクの収納のところに入れさせた。

そして、先ほど百合子との電話の話題で出た、急に不登校になった女子生徒の自宅付近で、こならが制服に着替えるための場所を携帯の地図機能で探す。

「それと、百合子さんは次はどこへ向かうって言ってましたか？」

「警察署だとさ。検視結果が出てないかと、死体の身元確認して、その遺族に年頃の娘がいなか確かめるんだと」

「こちらにもその情報を回して欲しいですね」

「回してくるに決まってる。百合子は一人では戦えないからな」

鬼灯は携帯しまい、こならにヘルメットを渡す。二人ともヘルメットを被ってバイクに跨る。目的地はと、鬼灯は脳内でさっき見た地図を思い浮かべて、その場所を目指してバイクを走らせた。

あんぐらっ！ **Masaki Angle** 9／18 12..**37**（前書き）

誤字脱字などありましたら指摘お願いします。

百合子さん前から逃げだし、トイレでこの嫌な気持ちが悪く落ちてくまで吐いて、少しだけ気分を良くしたあと、僕はばにらさんとの待ち合わせ場所に向かった。

待ち合わせ場所に着くとばにらさんの姿はなかった。

まだばにらは着ていないか。それもそうだ。分かれてから三十分ぐらいいく経っていない。女の子の買い物はえらい時間がかかるものと世間一般で言われているけど、そんな人それぞれだと僕は思うし、ばにらさんも追われている身だから早く買い物を済ませるだろうなと勝手に思った。

食品売場には捕獲員の百合子さんがいるため、ばにらさんに食べさせる食料が買えない。帰りにどこかスーパーにでも寄って買えない。だが、百合子さんがこの食品売場で見張っているのだから他の所でも、別の捕獲員が見張っているのかもしれない。ならばコンビニで売っているビーフジャーキーならどうだろうか。加工されていなければ、干し肉でも食べれるはずだ。でもあれって量が少ない割には高い、さらに塩胡椒振ってあるから食べなかった場合を考えるととても痛い出費となる。洗って塩胡椒を落とせば食べれるかな？ いやでも量が……………。

なんて色々と策を考えている内に、ばにらさんが服屋の紙袋とビニール袋を持って戻ってきた。

「三万で足りた？」

「うん。十分だった。服も二着買えたし。もちろん肌着とかも」

「足りなかったらなら遠慮しない言っただけ？ 何度も来るのは流石に目立つから」

「うん。大丈夫」

「そっか、じゃあ早く帰ろうか。近くに捕獲員もいることだし」

僕はうっかり言ってしまった。ばにらさんの表情が急に陰しな

りに頻りに当たりを見渡しはじめた。僕が捕獲員が近くにいると言ったから、このフロアにいると思ったのだろう。

「大丈夫。その捕獲員は一階の奥の食品売場付近にいて、そこで魔女が来ないか見張っているんだ。だからその捕獲員はここには来ないよ」

ばにらさんに着いて来てと言い、ショッピングモールから出でようとする。もう一人くらい捕獲員がいるかもしれないと辺りを見渡し、そのような人がいないか確認して見るが、捕獲員の殺気に似たような雰囲気臭わしている人がいるとは感じられなかった。百合子さんみたいなそんな気配すら持たない人がいたが、そもそも自身にそんな気配を感じる能力を持っていない、言い換えれば、鈍感なだけなのか、よく分からないが、どう考えても後者だろうと挙動不審にならずに自然な素振りですぐ外に出た。問題なくでられたところからして、ショッピングモールの出口付近にはいなかったらしい。

「誰にも気づかれなくて良かったね」

「うん」

ばにらさんはぎこちなく笑った。僕はここで初めてばにらさんが笑うところを見た。その笑顔を見て何故かとても嬉しくなる。

「ここではにらさんの夕食を買えなかったから、途中どこか、スーパーにでも寄って買って帰らないと」

僕がそう呟くと笑っていたばにらさんが暗い表情になって、立ち止まってしまう。同時に僕も立ち止まる。どうしたの、と声をかけようとした瞬間、ばにらさんは俯き、小さな声で言った。

「わたしは……まだ大丈夫。……その、食べたばかりだから……」

「……………」

食べたばかり。

僕は察せるはずだった。

ばにらさんが着ていた白いワンピースが血に染まっていたことから察して、その捕食行為を行ったことくらい簡単に想像することはできたはずだ。

だが、あの記憶が邪魔をした。

あの一番大切に、一番忘れたい記憶が。

また思い出してしまった。今度は違うシーンだ。僕は震えそうな体を必死に抑制し、ばにさんの強がって、冷静を保つような素振りをした。きつとばれねえだろうな。

僕はばにさん以外誰にも訊かれないような小さな声で訊いた。

「訊いちゃいけないことだって、分かっているけど――どのぐらい食べたの？」

ばにさんは泣きそうな声で答えてくれる。

「……分かんない。でも、少なくとも、三、くらい」

「そうなんだ」

それを最後に僕は口を閉じてしまった。なんて声をかけてあげればいいのか、僕の頭では思いつきもなかった。ばにさんもそれっきり何も言わずに黙ってしまう。

お互い何も発しないまま、黙々と僕の部屋があるマンションまで歩く。大通りも車の通りはいつも通りなのだが歩いている人は全くいない。狭い道に入ると人っ子一人居らず、今日は時折、警察官が見回りの為にいつもよりも多く居たが、それ以外は特になくショッピングモールに行くときと同じように閑散としていた。

しばらくして、マンション前まで着いた。僕の部屋は七階にあるため階段で上っていくとなると結構疲れるが良い運動になるため、僕は普段はそちらを使う。今回はばにさんも連れてくるから一刻も早く部屋に戻りたかったのでエレベーターを使った。

僕たちはエレベーターに乗り込んだ。

沈黙。

僕は何か、何かと頭の中をフル回転させ、気の利いた言葉を探す。このまま、部屋にはいつてもでも沈黙のままいるのは辛い物がある。速めに処理しておきたい問題だった。だが、ボキヤ貧の僕にとってそれも辛い物だった。

でも、言わなくちゃいけない。

そう思い僕はばにらさんに声をかけた。

「あの、ばにらさん」

流石に監視カメラがあっても、録音はしていないだろう。だから声に出して伝えるのは躊躇う必要はない。

「な、何？」

「僕はどんなに、ばにらさんが……、あの、その、食べたって、絶対に僕は、恐れたり、見捨てたりはしないから、そこは安心して」

僕は格好つけるように言うつもりではなかったのだが、思ったよりキザっぽく言ってしまった、なんだか僕は恥ずかしくなった。

そう言われたばにらさんはずっと俯いていた顔を上げて僕を見て言った。

「……ありがと」

僕は少しだけ嬉しくなった。

「どういたしまして」

邪魔するかのようにチンツ、と音がして、前のドアが開く。すぐに七階に着いたようだ。日頃から階段で上っているからか、ものすごく早く着くんだと驚いてしまった。

僕とばにらはエレベーターからでる。僕の部屋に向かおう歩きだしたが、僕の部屋の前で立っている人がいた。何か僕にようでもあるのか、それとも、魔女がここで匿われていると気づかれ、捕獲員が部屋の待ち伏せしているのか。僕の頭の中では色々憶測が飛び交ったが、僕の部屋の目の前に立っている人の顔を見て捕獲員ではないと分かった。

だが、捕獲員の次に今、出会いたくないやつがそこにいた。

「ようっ！ 忘れ物したから取りに来たん、だけ、ど……」

珠奈は僕の姿を見て忘れ物を取りに来たと言おうとしたが、僕の後ろから続いて来るばにらさんを見つけ、凝視していた。

「その子は、何で、雅樹の服、着ているの？」

彼女にとっての不安要素なのだろうか？ その疑問を僕にぶつけてくる。僕の服を着ているということは、………………。それなり

のことがあったと想像するだろう。その誤解を解くために話さなければいけない。しかし、今ここで立ち話をして、他の誰か、第三者に訊かれ、魔女を匿っているとバラされたら一巻の終わりだ。

「それは……、ここだと誰かに聞かれるかもしれないから、部屋にはってから説明する」

珠奈に部屋に入るように指示した。珠奈は素直にしたがってくれた。

その姿を見た僕は、珠奈ならきつと分かってくれだろうし、理解もしてくれるはずだと、なんの根拠もなく、そう勘違いしていた。

僕は、ずっと後になって、空っぽの信頼を彼女に押しつけていたのだと気付くのだった。

あんぐらっ！ T a m a n a A n g l e 9 / 1 8 1 3 : : 0 2 (前書き)

誤字脱字などありましたら指摘お願いします。

あなたは他の誰かを憎んだことはありますか？

例えば、

あいつがいなければ一番だったのに、とか。

あいつだけのうのうと生きてんだ、とか。

あいつの才能が妬ましい、とか。

あいつだけが評価されているんだ、とか。

あいつはどうして成功すんだ、とか。

あいつだけモテるんだ、とか。

あいつだけあの人に好かれているんだ、とか。

そうゆう風に思うことなんて、今までの短い人生のなかでも沢山ありすぎて、最近じゃあ、自分の中の話題にすら上がってないですよね。

まあ私、そんじょそらの単なる平々凡々な女子高生が何語っても意味もないですし、寧ろ、無駄しかないですし、そんな戯れ言を聞くだけ人生の無駄ですし。

時間をもつたいないので簡潔に伝えますね。ここは、これだけ読めば大丈夫です。あとは読みとばしてくださいな。

私、珠奈は雅樹の隣にいる女を憎みました。

買い物ついでにショッピングモールに寄ろうとしたら、偶然、片思いの彼がショッピングモールから出て来たんですよ。

あれー、さっき手伝わなかったか言ってたくせに、なんでこんな所にいやがんだー、と弄ってやろうと思ったんですよ。

そしたら、

次に出てきたのは、その彼が前に着ていた服と、全く同じ服を着た女でした。

一瞬で頭の中に妄想という名の怪物が心をぐちゃぐちゃに踏みつぶしました。

しかも、微笑みながら、その彼の隣に着いていきます。

ナニ、アイツ、モシカシテ、ワタシヲサシオイテ、カレノマエデ、マタヒライテ、オトシタッテイウノ？

その彼も笑っています。私には見せたことのない表情です。

アア、モシカシテ、サキコサレタノカ。

ナニ、アイテカラキテクレルダロウトオモッテイタカラ、コウナツタノカ。

コンナニコウカイスルナラ、ハヤクコクツテ、イツショニネテ、キセイジジツヲツクレバヨカッタノニ。

ニクイ。

コロシタイ。

私はこの鬱憤と憎悪をため込んだまま、逃げるようにその場を去りました。走ったので心臓がバクバクいていました。ある程度離れたところで、彼の隣いたゴミが何かをしたと思い出した途端、吐きました。

靴が自分はいた吐しゃ物で、でろでろに汚れました。

口の中が苦酸っぱくて、気持ち悪くて、悔しくて、泣いてました。

すぐに寝取ってしまいたいと考えました。

でも、彼を悦ばす程の自信ありません。

あのゴミを殺してやろうかと思いました。

でも、殺したら彼も悲しむだろうと思えません。

彼が振り向いてくれるとは考えられません。

だから、私は努力しました。勇気を振り絞りました。

彼の家まで先回りして、合い鍵（彼が隠している場所とはつくに確認済み）で部屋に入り、わざと荷物を置いておき、鍵を閉めて、鍵を元の場所に戻して、部屋の前で待っていることにしました。

数分後、彼とゴミが来ました。

まず、事情を聞かなければ、ちゃんと怒ることもできませんからね。

あんぐらっ！ K a z u r a A n g l e 9 / 1 8 1 2 ∴ 4 9 (前書き)

誤字脱字などありましたら指摘お願いします。

雅樹とぼにらが去った後、ショッピングモールの駐車場に一台の黒いクラウンが入ってきた。その車はバックで駐車せずに、頭から入れて止めた。

運転席から一人出てきた。

「はあぁ、疲れた」

背伸びをしている長身のショートカットの二十代後半くらいの女性と言った。

その女性の服装は白い開襟のワイシャツに紺のジーパン、首からはかぎかつこのような形が二ついてあるネックレスを下げている。顔は綺麗と形容しても良さそうなのだが、つり上がった目と口元から見える八重歯せいで野生的な印象をあたえていた。

「ご苦労様、でもまだ仕事が残っているよ？」

助手席から中学生くらいの緑色のパーカーに紺のハーフパンツの少年が出て来て、運転していた女性の隣に行く。

ぱっと見では性別の区別がつかなくらい中立の顔立ちで、背はたぶんその年にしては低いと思われるくらい小柄だった。隣にいる女性の背がかなり高いため比率でさらに低く見える。

「そんなぁこった知ってるわ。俺様はここまで来るのが疲れたっていつてんだぞ？ クソッ、上の奴らが手配してきた車がマニュアルとか、俺様に対する当てつけだろ？」

けっと口悪く、愚痴を吐いた。

「ふきって、男っぽい性格の割には、そういう機械操作とか苦手だよね？ 高速入る前にエンストした時は、流石にびびったよ。僕もまだ生きていたいから、帰りは安全運転でよろしく」

「うるせえ。文句あんなら、俺様にMT寄越した上に言え」

「ふき、僕がそんな権限があると思う？」

「何いってんだ？ 葛^{かずら}？ ついに俺様より先に呆けたか？ 寝言は

対外にしろ。お前は俺様を生かすほどだ、かなりあるはずだろ？」

ふきは大人げなく、葛に暴言を吐いた。

「それはそれ。これはこれだよ」

「何がだ。まあいいさ。さっさと仕事を終わらせちまおうぜ。で、今回は誰を殺すんだ？　って、毎度ながら、訊いても意味ねーか」

「いや、今回は珍しくターゲットがいるんだよ」

葛がクラウンの後部座席に置いてあったバッグを取り出し、その中からここ周辺の地図などが挟まっているクリアファイルを取り出す。

「ふーん。写真でもあるのか？」

「うん。ほら、この人だよ」

クリアファイルから挟まっていた一枚の写真を取り出して見せた。

「……、フツの顔の奴だな。名前は？」

「遠藤　雅樹。17歳で出身高校は……」

あんぐらっ！ Masaki Angle ×××××× (前書き)

誤字脱字などありましたら指摘お願いします。

あんぐらっ！ **Masaki Angle** ×××××

昔、僕は姉が好きだった。
愛していた。

「ねえねえ、お姉ちゃん」

「なあゝに、マサちゃん？」

「お姉ちゃん、大好きだよ」

「ありがと。お姉ちゃん、とっても嬉しい」

僕がそう言うとき姉は必ず笑顔になって、そっと抱きしめてくれた。
輝いていた笑顔が、柔らかく暖かい抱擁が、鼻孔をくすぐる甘い
香り、姉のすべてが好きだった。

僕は何度もその快楽を味わいたくて、自慰行為を覚えた猿のよう
に暇さえあれば姉に「大好き」と言い続けては、姉に抱きしめられ
て快楽に溺れていた。

その頃の僕は愚かだった。どうしようもない、愚かな子供だった。
あまつ、僕が「大好き」と言えば、どんなに姉は落ち込んでいて
も、すぐに笑顔になって元気になってくれるんだと、途方もない勘
違いしはじめた。自分のげひな行為を正当化してまで思い込んだ。
僕は姉にとっての大切な人——僕が姉を救って上げられる唯一の
人間なんだと馬鹿な妄想に完璧に酔っていた。

友達からはべったりと姉にくっついていて僕をシスコンと言って
避難され、両親からは、異常なまでに姉離れできていない僕を変な
目で睨んでいた。僕はそんな視線になんて気にも止めていないし、
ただ一線さえ越えなければいい。それくらい子供にだって分かると思
い上がって、快楽に浸っていた。

だが、一瞬で理想は崩れ、海岸で作った砂の城が波によって削ら
れて、バランスを保つことが出来ずに削られた方に倒れていくよう
に、形を留めず、最後には波に全て均されて何も無かったように、

綺麗さっぱりと無くなってしまおう。

醒めない夢から醒めてしまった。

あの黒い、得体の知れない、サバドと呼ばれるヤツに言われてからだ。

「君、ちっとも面白くない人生を送っているのね？ それって生きている意味あるのかしら？」

「？」

「分かりやすく説明すると、君の人生はありふれているのよ」

「……」

「そう、誰にでも考えられて、そして誰でも終わりが見える、そんな安い人生。それってつまらないと思わない？」

「……別に、それでいい」

「やっと口を開いてくれたわね。確かにそのままでも、今の君にとっては良いかもしれない。でもね、安っぽいと何年か経ったら意外と飽きるわよ？ それもありふれている台詞をいうの。なんで飽きたんだろう？ ってね」

「そんなことはない」

「決めつけない方が良いわよ？ もし、その通りになったときに逃げ場を失うから」

「……」

「たとえば、君が飽きなくても、お姉さんの方から飽きちゃったら、君がどんなに頑張っても無理、無駄になってちゃうのよ？ それに人間は神では絶対ない、そこら辺の生物と基本は同じなのだから、必ず飽きるように出来ているのよ。そうすれば多く、さらに強い子孫を産み、繁栄してくれるしね。それに近親の場合だったら、もっと早く飽きる可能性があるわね。ほとんど同じ遺伝子じゃあ、体が相手を拒絶するし」

「……どうして？」

「当たり前でしょ？ 生物学的ことは、どうこうできないから我慢するしかないとして」

「それでも、そういう物語だってあるじゃん……」

「それはあくまで売り物のフィクションで、決まって事件やすれ違いがあつて、必ずって言うって良いほど、ハッピーエンドで締めるでしょ？ その方が売れるからそうなっているの。それに比べて、現実には救いようもないバッドエンドが沢山ある。君だって、そんな気分が暗くなる物語なんて、つまらなくて飽きるし、わざわざ、けなしのお小遣いを出して買うこともしないでしょ？」

「……」

「それにバッドエンドになる原因は、自分たちのせいではない方が多いの。社会とか、倫理とか、金とか、ホント、くだらないもので縛られて転ばされて、挙句自分たちの所為にされちゃうのよ」

「……」

「泣かない、泣かない。君はずっとお姉さんと一緒にいたいものね？ 出来れば永遠に好かれていたいものね？ でも実はね、それは簡単なことなのよ。しがらみや倫理や社会を踏み越えて、永遠にお姉さんと一緒にいたい、その関係が続けたい、そうなりたいと願うなら、そうしても良い、と他の奴らに思わせられる程の特別なことをすればいいのよ。ああ君たちはそうするしかないんだ、みたいにな」

「……特別？」

「そう、君とお姉さんとの特別な力、生物の性を越える物を手に入れば、ね？ だから――」

僕はその時、姉を笑顔が頭の中で、浮かんだ。

そして、その笑顔が、体が、心が、全部、姉の全てが僕の為、僕以外には絶対に向けられず、独占できると、信じてしまった。

だから、僕は、

言われた通り、姉を呼び出し、サバドに売り渡して、特別を手に入れた。

そして、姉と僕は特別によって、永遠の関係になった代わりに、

姉は心臓を失い、魔女になって、両親を殺して、食べた。

まじないっ！ **K a z u r a A n g l e** (前書き)

誤字脱字などありましたら指摘お願いします。

まじないっ！ Kazura Angie

『呪』って漢字は本当に面白いよね？

だって、呪のろいも、呪まじないも一緒の漢字を当てられるんだよ？

藁人形に五寸釘突き刺して憎い相手を念力か何かで殺そうとする呪のろいと、恋い焦がれる女の子が好きな男の子と両想いになりたい願まじなう呪まじないも、同じ漢字を使うんだ。

それってさあ、どちらも同じ効果があるから同じ漢字を使っているってことだね？ 確かに根本的には“願いを叶える”だから、あながち間違っちゃいない。

もっと調べれば、詳しいことは分かるけど、ここは敢えて調べないよ。そうしないと次に言いたい事が言えなくなるからね。

何が言いたいのかって言うと、

『人を呪わば、穴二つ』って、お呪まじないでも同じことが言えるんじゃない？

まじないっ！ Houzuki Angle 9／18 13：49（前書き）

誤字脱字などありましたら指摘お願いします。

「先輩、どうですか？ これ似合いますか？」

赤いリボン、紺のブレザーの下に白地のブラウス、チェックのプリーツスカート。鬼灯は着替えたのならを見て言った。

「お前の制服姿ってみたことないから新鮮だな。似合っているぞ」

「えへへへ。嬉しいです」

借りてきた制服に着替えたのならは、鬼灯に似合うと言われて嬉しそうに笑った。

鬼灯とのならは、最近不登校になった女子生徒の自宅へと向う途中、こならがその不登校になった女子生徒が通っている学校の制服に着替えるために、公園の公衆トイレに寄って着替えた。

こならは、何んでこんなところで着替えさせるのかと不満を鬼灯にぶつけ、鬼灯はコンビニとか服屋とかだと怪しまれるだろと言いつ返した。さらにこならはそれなら車とかホテルとかあるでしょと突っ込んだ。鬼灯は一瞬、不埒な所を考えてしまい、顔には出さずに自己嫌悪していたり、色々あって今に至る。

こならは嬉しそうに自分が着ている制服を見ている。捕獲員の中にも高校に通いながら仕事をしている人も少なくないが、こならは色々な事情があって高校に通ってはならず、捕獲員の仕事をしているので、高校の制服を着るのは初めてだったらしい。

「スカートの丈はもっと上げた方がいいですか？ どのぐらいの丈が丁度いいのか、借りたときに訊けば良かったですね」

鬼灯はこならが穿いているスカート方に目線を下げる。十分短いでは？ と鬼灯は思う。

「学級委員長風で乗り込むんだから、逆にもっと下げた方がいいじゃないか？」

偏見だけと付け足した。

「これ以上は下げられませんよ？」

「なら無理に上げ下げしないで普通に着こなせば大丈夫だから。寧ろ、お前の口の巧さと演技によって成功するかに掛かっているんだから」

そういう鬼灯は携帯を取り出して操作し、ここ周辺の地図を出す。

「不登校の子の家の住所、教えてくれ」

「えーと、確か、4丁目6番地の12ですね。先輩、一回言ったのに忘れたんですか？」

「いや、確認のために訊いただけ」

こならに確認のために訊いた住所を打ち込み、この公園から不登校の女の子の家までのルートを決める。土地勘もないから大きい道路に沿って行くか。こればかりは目立っても仕方がないなと鬼灯は思った。

「服はバイクの収納の所でもに入れておけ」

「はいはい」

こならはバイクの収納スペースにさっきまで着ていた服を入れた紙袋をしまった。その間に鬼灯は、百合子にそろそろ戻ってこいとメールを打つ。鬼灯とこなら、二人だけで魔女一人を捕まえるのは苦労はしないのだが、後始末に時間が掛かるので、厄介な後始末を今回あまり役に立ってない百合子に押しつけようと企んでいた。

「ある程度近くまではバイクで行って、あとは徒歩で向かうからな」
「了解です。バイクはどこに止めるんですか？」

「止めないで、押していくんだよ」

「それなら最後まで乗った方がいいのでは？」

「どこの高校生の学級委員長が、無免許で大型バイクに跨り、不登校の子の家に訪問するんだよ？ 思いっきり怪しまれるぞ？」

「確かにそうかもしれません。ですが、そこは敢えてそこはやりましょう！ 熱血学園モノっぽくて、一般的に受けが良いと思いますっ！」

「ドラマ的にだろ、それ？ バカなことやってないで、さっさと行くぞ」

「はい」

鬼灯はヘルメットを被ってバイクに跨り、エンジンをかける。こちらもヘルメットを被ってバイクに乗ろうとするが、鬼灯に止められた。

「なあ、そのまま乗ると、走っているときに、たぶん、見えるぞ？」

「へ？ ああ、そうですね。じゃあ、これは日頃お世話になっている先輩へのサービスと言うことで。ガン見しても構いませんか？」

そう言われた鬼灯は盛大にため息をついた。

「そのお気持ちは男として嬉しいが、運転しているときにどうやって後ろ振り返れと？」

見る前に絶対事故るぞと言った。

「男の人って、例えば死んだとしても、そういうの見たいんじゃないですか？」

こならはニヤニヤと見つめながら挑発するように言う。

「少なくとも俺は、残りの人生をかけてまでは見ないな。潔く、コンビニでその手の本を買う。さっさと何か穿け。さっきまで穿いたのがあるだろ？」

「それはさっきしまっちゃんしました。まあ別にスパッツ穿いているんで問題ないですけどね」

「……………最初からそういうえよな」

気を使って損したと言わんばかりにうなだれた鬼灯であった。

「あ、それと」

「なんだ、今度はどんな色仕掛けしてくるんだ？」

「……先輩、なんかひねくれてますよ？ 怒っているなら謝ります。ごめんなさい」

棒読みで謝るこならだった。

「謝る気がさらさらないな。もうなんでもいいから、あの合法魔法みたいなならなくてくれよ？ 一人いるだけで俺は、もう精一杯なんだから」

「先輩の中では百合子さんは魔女なんですか……」

こならは哀れみの視線で鬼灯を見ていた。

ふと、鬼灯は疑問に思った。

「さて、この周辺の学校って、魔女がいるから今日は休校になるんだよね？」

こならの顔がひきつった。あ、ばれた。とくつきりと顔に出ていた。

「え、ええ。ソウデスヨ？」

声の上擦り、たらたらと冷や汗が顔から出てきている。

「それなのに制服を着て乗り込むのは、おかしくないか？ その前にどうやって借りれたんだ？」

最後のセリフには、お前の体系で他の人に借りれるものがあるのか？ という意味合いもあったのだが、これを言う立場が逆になりかねないのであえて言わず、鬼灯はこならを追求する。

「……………エエ、ソウデスネ？」

こならはすたすたとその場から逃亡しようとした。

「まてや」

即捕まった。捕獲員の名は伊達ではない。

「逆に目立つぞ？ その格好は」

「……………すみませんでした。その、あのお店で進められて、こういうの一度着てみたいなーって思って、勢いで買っちゃって、早く着てみたいなーって思って……………」

「それで、今に至ると？」

「はい……………」

こならはしゅんとして申し訳なさそうにする。

そんな姿を見て、怒るにも怒れなくなった鬼灯はため息をついて言った。

「まあ、お前の制服姿を見れたから、いいんだけどな。さっさと元の服に着替えてこいな」

そういわれたこならは少しだけうれしそうに返事をした。

「はい」

元の服に着替え終わったのならは鬼灯に向かっていった。

「今回の魔女対策の仕掛けは、先輩のバイクを使います。どこか紐をくくりつけられる頑丈な取っ手みたいなのはありますか？」

「後ろの荷物乗っけるとところに括りつけられると思うが、俺が手に持つんじゃないのか？ その方が楽でいいと思うが」

「先輩の手、特に指が危ないからそれはダメです。あと片手運転も危ないので止めてください」

「知ってるか？ バイクの方向指示のランプが付かなくなったら場合、片腕を使って方向指示しなければいけないことを。それとバイクに何か紐を括りつける時点で相当危ないからな？」

ため息い一つついてから続ける。

「あとお前がやりたいことが大体分かった。確かにその方が簡単に処理できるからいいかもしれないな」

「さすが先輩、血生臭いことだけは察しがいいですね」

「それは誉め言葉として受け取っておこう」

「こならは鬼灯が乗っているバイクに乗り、鬼灯の腹部に手を回し、体を鬼灯の背中にくっつけて言った。

「そんな先輩のポジティブなところがわたしは好きですよ？」

「じゃあ、その台詞を俺は前向きに考えるぞ？」

鬼灯が後ろにいるのならに向かって一泡吹かせようと言い、反応を見るため振り返った。

「望むところですよ」

こならはニヤリと不適な笑みを浮かべる。

「……本当に百合子に似てきたな」

鬼灯とこなら同時に笑った。

バイクを発進させ、不登校になった女の子の家の方向へと走る。

「先輩が百合子さんのことを気にしているから、わざと似せている

んですよ」

こならが小さな声でぶつぶつ発し、聞き取りにくいうえでさらにエンジン音と風を切る音でかき消されてしまう。

「なんか言ったか？」

「何も。きつと空耳ですよ」

こならは笑って、優しい嘘ついた。

きつと伝わってくれる日が来る。

そう、願いながら。

まじないっ！ **Houzuki Angle 9/18 13..49 (後書き)**

イチャついている二人は気にしないでください。ただ、書きたかったです。

まじないっ！ **M a s a k i A n g e** 9／18 13..
43 (前書き)

誤字脱字などありましたら指摘お願いします。

「ふーん。それで魔女——ばにらさんを匿っているんだ」

僕は珠奈にばにらさんのことと今までの経緯を説明した。珠奈は僕が説明し終えるまで口を挟まず、ただ受け手に徹していた。そしてこの発端の張本人であり、なお現在この国で一番のお尋ね者と言われているばにらさんは、ぺたりとフローリングの床に座って説明している間、居心地が悪そうにオロオロとしていた。話に入っても良いのか、どのタイミングで入ればいいのか、色々と躊躇っているうちに話が終わってしまい、役に立てなかったことに落ち込んでいるようだった。

珠奈は視線をそらさずに僕をじっと見てた。

「だけど、雅樹が魔女を匿っている理由が分からない」

珠奈はきっぱりそういった。先ほど珠奈に話した説明には一言も言うてはいない。話した内容はここまでの経緯だけで、どうしてもばにらさんを助け、こうやって危険を冒してまで匿っているかの理由を一切話さなかった。

ばにらさんを匿った理由がないとか、ただ匿う代わりにいかがわしい行為を求めてたから言えないとか、そういうわけではなく、その理由を思い返すだけで、僕はトラウマに発狂したくなるから話さなかっただけだ。ばにらさんを見つけたときも、僕はあの血にまみれた光景がフラッシュバックし、もう死にそうなくらい恐怖に足が震え、倒れそうになったくらいだ。さらに見て見ぬ振りをして、その場から立ち去る、なんてことをしていたら、その後、罪悪感に押し潰され、僕は飛び降り自殺していたかもしれないし、少しでもその罪悪感を減らすべく、自らこの身を魔女に捧げてたかもしれない。

「ごめん、そのことは、なんて言うのか、話したくないんだ……」

「どうしてなの？ あたしに聞かれて欲しくないことなの？ それは雅樹がここで一人で暮らしていることと関係しているの？」

珠奈が追求してきた。それはそうだ。珠奈には僕が言うことは不倫した男の言い訳を言っているみたいに胡散臭く、そして遠回りして核心には近づけさせないように聞こえるだろう。

「……珠奈に知って欲しくないし、ばにらさんにも知って欲しくないことなんだ」

それでも言えなかった。

そもそも、言えるわけがない。

例え、珠奈に僕を今まで苦しめている過去を、赤裸々に話したとしても、仮にばにらさんにも言ったとしても、僕の中からその忌々しい過去は消える訳でもないし、二人に知られ、さらに消せるはずもない物と化してしまう。それなら言わない方が僕の中だけで処理できる問題で在り続ける。その方がいいに決まっている。慰めてもらいたいわけでもない。というより、僕の過去を聞いた時点で、二人は僕を慰めてはくれやしないだろう。話せば楽になるかもしれない、と僕の過去を知っている——現にその場にいた百合子さんは言っていた。楽になれるならそれでいいかもしれない。ぶっちゃけ、死んだ方が簡単に楽になると思う。

だが僕の場合、事前に知っていたとしても、その場にいたとしても。その気持ちを共有出来るものではない。

それは、無理なことで、人として、外れたものだから。

珠奈は黙ったまま僕を睨んでいた。僕も黙ったままだった。これでは永遠に話が進まないと察し、諦めたように珠奈は話題を変えた。
「……これからどうするの？」

「とりあえず、ほとぼりが冷めるまで、ばにらさんを匿う」

「それはできっこないよ。だってここ周辺には魔女が必ずいるってみんな知っているんだよ？　しかも捕獲員までいるし、当たり前前に警察もいる。ここ一ヶ月、魔女が人を食べていないから、ここにはいません。どこか別の所に移動したんでしょう。だからここから引き上げましょうなんて事には絶対にならないよ」

「……それはどうして？」

やっぱばにらさんが口を挟む。珠奈が続ける。

「確かに警察だって、捕獲員だって、ここから離れた可能性は考えるけど、同時にここにずっと匿われている可能性も考えるのよ？」

全部の可能性を舐潰し潰して、見つけるのよ。あなたをね」

ばにらさんは珠奈から目をそらし俯いて黙ってしまった。

僕は反論しようとしたが、珠奈に止められてしまった。

「ちょっと雅樹ついてきて、ばにらさんはここにいて」

珠奈は僕の手をつかんで連れていく。玄関から外に連れ出され、流石に僕は何するんだ、と言おうとした。

僕は頬を叩かれた。

パンッ、と音が鳴った。

どうして叩かれたんだろう？

分からない。

「何、する……」

「何って、雅樹、自分がどういう状況か分かっているの？」

「だからって叩くことは——」

僕が珠奈の顔を見ると、珠奈は泣いていた。

僕は滅多に見ない泣き顔の珠奈に戸惑ってしまう。

「下手すると、雅樹まで警察に捕まるんだよ？ それでもいいの？」

珠奈は、最低限の言葉で、僕にしか聞こえない小さな声で、僕を説得しようとしていた。ここで魔女に関する単語を言わなかったのは、彼女なりの配慮だ。でも僕はその優しさすら、怖くて、逃げたくて、知られたくなくて、踏みこじってしまうのだ。

「捕まるのは嫌だけれど……、仕方がないんだ。それに彼女を見捨てるなんてできない」

「それは、ばにらさんが可愛いから？ 自分好みの子だから好かれないと思うってやっているの？ あたしにはそうにしか見えないよ……」

「違う。それは」

やっぱり、あのことを彼女に言うべきなのか、あのことを言った

焦げ臭い、臭い^{にお}を、思い出した。

『これが、罰なんだね』

頭の奥から、叫び声の様に、そつと聞こえた。

誰かを突っぱねて、もうどうしていいかわからず、発狂し、そこから階段を転げ降りながら、逃げ出した。

まじないっ！ **S t r i g a A n g l e 9 / 1 8 1 4 ∴ 1 0 (前書き)**

誤字脱字などありましたら指摘お願いします。

「やっとうきましたね」

腰まで伸びた黒い髪を揺らしながら、上にクリーム色のポンチョ、黒のキュロットパンツを着ている女の子は言った。高校生くらいの年なのか顔立ちは幼く、身長は低くも高くもなくその年相応の身長、長い前髪を後ろに流し、髪留めで止めているため、額が惜しげなく見えている。

「くそっ、なんでうちが勧誘しにこなきゃいけないんだよ。鈴がリーダーなんだから、あいつがくりゃあいい話しだろ？」

その隣でいる白地の長袖のTシャツにブーツカットジーンズの女性が愚痴を吐いた。二十代前半くらいでショートカットで白髪、背は隣の女の子より少し大きいくらいだ。

「花木さんは別件で来れないと言ってたじゃないですか。それから天下の真っ逆さま（笑）がそんなはしたないことを言わない、言わない。あくまで自称可憐な乙女（爆）なんですから」

「おいコラ、デコ。毎回毎回、止めろって忠告してんのに、ごてーねーに各個、各個閉じまで言うとはいいい度胸だ。しばき倒すぞ」

デコと言われた女の子——羽背^{はせ}くららはふざけるのを止めずに片言でなく返す。

「きゃあー、恐いですわー」

「……道化の魔女のうちよりも、ふざけてる魔女が存在するってどういうことだ？」

真っ逆さまと言われた白髪^{はなき}の女性は頭を抱えた。

「わたくしなんて毎回、花木^{はなき}さんに着いて行ってるんですよ？ それに比べ、真っ逆さま（痛）なんて数回しかしていないじゃないですか？ それなのにたかが数回で愚痴るとは。これだから、超現代っ子はダメダメ言われるんですよ。まあ、わたくしの方が年下ですけど」

「あとでお前が鈴りんのこと、クソビッチって罵ののってた、って報告しておくからな」

「きゃあー恐いすわー、……………名のある魔女なのに、その年でその痛々しい名前を名乗っているのが」

「張はっ倒す」

くらは懲こりずにいけしゃあしゃあと言う。

「まあまあ、こんなところで遊んでないで、迷える魔女を救いに行きませんと。ねえ、真っ逆さま（痴）？」

「お前が遊んでいるんだろっ！　ところで『チ』ってなんだよっ！　？　発音だけじゃあ、漢字わかんねえぞっ！　？　まさか痴女の『痴』かっ！？」

「えーと、ここには、魔女がいーち、にー、さーん、よー人はいますね」

一人だけ盛り上がっている真っ逆さまを無視してくらは魔女を捜す。

「完璧にスルーしやがったな。それについての尋問は後でやるとして、四人って多くないか？」

「どうしてなんでしょ？　わたくしたちみたいに組織でも組んでいるのでしょうか？　あー。一人目は、近くに捕獲員らしき能力者が二人いるので、追いつめられているみたいですね。今からでは遠すぎて、助けにいけない距離ですから、残念ですけど、この子は諦めましょう。それからもう一人は、えーと、この感じは——近くに嫌々感じの能力者を連れているので、これは政府の魔女ですね」

「うげっ、あいつらもいるのか？」

真っ逆さまは心底嫌な顔をする。

「いますね。残念ながら」

くらはあため息をついた。

「あいつらに会うと面倒ってレベルじゃないから、絶対に会わないようにしないと」

「わたくしも同感です。えーと、他は、もう一人の方はマンション

の中にいるみたいです。移動しているわけでもなく、能力を使って逃げているでもなく、何かを食べている様子もないので、きつと匿われているのでしょうか。こちらは少なくとも、わたくしたちが向かうまで安心ですね。最後の一人は、この感じは——、うーん、どこかで会ったような……」

「どこかであった、つーことは、そいつは名のある魔女ってことか」「わたくしが知っていると言うことは、大体はそういう事なりますね……、あっ！ 思い出しましたっ！」

「誰なんだ？ そいつは？」

「強奪の魔女。名のある魔女の中で、唯一、顔と身元が不明。わかっていることはその能力だけ、といわれている魔女です。能力は、確か首切り飛蝗バツダと同じ系統、切り裂き系の能力だったと思います。ここにやって来るとは意外ですね」

「ふーん。そいつも勧誘するのか？」

「止めておきましょう。どう考えてもここまで一人で、やってきたということは、模倣の魔女と同じ、一匹狼でやっていききたいタイプのように感じますし」

くららが模倣の魔女と言った瞬間、真っ逆さまはどこか寂しそうな顔した。

「……そうだな。わざわざ魔女草ストライガや、ほかの連中とつるまないで、一人で動いているやつは、ほとんどそんな奴だ」

ほとんどが、首切り飛蝗バツダに首切られてブタ箱にいったけどな。と言う。

「あとサバドも一匹いますね。場所は特定できませんが」

「それは魔女が生まれた近くには必ずって言っているけどいるだろ。サバドは出会ったら殺すだけ。魔女草ストライガの第一の目的は名も無き魔女を、捕獲員に捕まる前にうちの組織に入れる。それだけさ」

「そうですね。じゃあ心優しい人にマンションで匿われている魔女を救いに行きましょうか。真っ逆さま（愚）？」

「さすがに今のは分かったぞ、デコ？ いっぺん付き落とすぞ？」

「きゃあ、痛い中二風な名前にかけた、だだ滑りのギャクで脅さないでください」

「……ブラジルまで落ちろ」

二人の魔女は電波塔の上で、きゃあきゃあ騒いでいたが、その真下の道を歩いていた人たちは、誰も電波塔の上に魔女がいることに気づけなかった。

「痛いっ！　ここから落とさないで！　ああっ駄目っ！　能力使って、本当にブラジルまで落とすのは禁止っ！」

人騒ぎしたところで、真っ逆さまはチンピラよろしく言った。

「よし、これぐらいで許してやらあ。ところで、その魔女が匿われているマンションってどこだ？」

「あれですよ。ほら茶色の」

くらは指でそのマンションを指し示す。

「……米粒みたいな、あれ……か？」

「はいそうです。いやあ、真っ逆さま（老眼）でも見えるんですね？」

真っ逆さまは微笑み、そして下した。

「うん。宇宙の果てまで落ちろ」

ストライカ
魔女草。

組織の全員が名前がある魔女であり、名も無き魔女を助け、保護する、魔女に対して慈愛に満ちた集団である。

それと同時に、この国の唯一の防衛組織の自衛隊を壊滅一歩手前まで追いやった魔女、花木鈴はなきりんを筆頭に、この国の中で一番厄介な戦力——能力を持った最強の魔女集団である。

まじないっ！ **T a m a n a A n g e** 9／18 13：56（前書き）

誤字脱字などありましたら指摘お願いします。

彼を後ろからそっと抱きしめたら、急にヒスって私を突き飛ばし、どこかへ行ってしまうました。私、間違ったことしたのかなあ。

いやあ、あんな風に泣きながら、過去のトラウマに向き合っているような姿を見せられたら、抱きしめて、大丈夫だよとか言うのが一般的にだと私は思います。

一般的では無かったんですけどね。

すぐに彼を追おうと思いましたが、もう脱兎の勢いで行ってしまったようで、ここから下を眺めても、彼らしき人はいませんでした。残念。

彼の逃げ出す姿から、彼が話したくないと言ったトラウマは絶対に引かれる類の物だと簡単に推測できます。確かにその手の類は絶対に聞かれたくないですよ。私だって、ほら、……彼との、えーと、その、×××を妄想して、×××××しているだなんて、口が裂けてもいえません。彼に知られたら、真っ先にここから飛び降りますね。そう思うと彼を問いつめてしまったことに少しだけ罪悪感を感じました。

ここにずっと立っていても仕方がないので、彼の部屋にいる、ゴミ、もといい、人喰いの相手をしなければいけませんね。こんな人喰いでも、彼が好むのなら勝手に捨てたり、なぶったり、切ったり、ミンチにしたり、ミキサーにかけたり、煮たり、あげたり、チンしたり、流したり、腐らせたり、肥料にしたりしてはいけません。彼の部屋の中に入り、座っているゴミを見ます。一応話しかけないとこの場の空気がやばいというのか、生ゴミみたいに腐ってくるというのか——この表現は的を射過ぎているというのか、本当にどうでもいいですが、この場を取り繕って話しとかなないと、後で彼にこのゴミはなんて陰口するかわかりませんからね。

他愛もない話から始めることにしました。なんであなたは魔女

になっちゃったの、てな感じで、みんなが魔女に訊きたがるベストテンの中で上位にランクインしてるものを訊いてみました。私もそれには興味があったからなんですけど。

で、その喋るゴミは、

「わかんない……、気がついたらなってた」

と可愛らしくほざきました。うわっ、これ絶対、オタク共に好かれるような口調だよ。何で私まで媚び売ってんの。キモッ。

こんなことを内心密かに思っている私は、とても嫌われそうな奴になってますけど、誰にも聞かれる訳ではないので、気にしない、気にしない。

ここで会話が止まるとさらに空気がゴミのせいで腐って異臭を放ってくるので、受け手に徹しながら話を聞きいていきます。

「鼓動の音がしなくなっ、さわって確かめても、鼓動しなくて、それでわたしは恐くなって、お父さんとお母さんに相談したら、急にバットで殴られて、何か注射されて意識がなくなって、気づいたらが覚めたら森の中にいたの」

なんてお約束な展開でしょうか。

今時こんな話つまらねーよ。携帯小説かつての。

敢えておもしろいところをあげるなら、ゴミの親がゴミを機関に引き渡さなかったのは、自分たちがラリっているのを隠すためで、ゴミに薬打って意識を混濁させてどこか遠くの森に捨てたところですかね。

ん？ その前に魔女に薬って効くんでしたっけ？ 確か心臓がとまっているから、薬がうまく体に回らないから効かなかったはず……。まあ、別に効こうが効くまいが、私には一切関係ないので追求はしないでおきます。

それは大変だったねと適当に終わらせ、本題に移ります。

彼のことどう思っているの、と。

唐突に訊かれてゴミは、生意気に狼狽えて、吐きました。

「優しい人だなんて思う」

それが耳に入った瞬間、ゴミを殺したくなりました。

何ほざいてんだ？ このゴミは？ 私を見くびるのもいい加減にしろよ。ゴミ分際で。彼は誰にでも優しいんだぞ？ お前みたいな社会の汚物、汚点を拾い上げてくれる時点で、彼を神様だと感じないゴミがいるか？ そんな奴はいねえよ。

.....

こんなゴミと話したくない。生理的頭が受け付けません。直感で思いました。ゴミが彼を優しいと感じたようにね。

私は彼がどこか行ってしまったから探しに行くと、ゴミに言い、部屋から出ていきました。ゴミをそのまま彼の部屋に放置しておくのは気が引けますが、彼がそうしたいと言っていたので、施錠しておいてと忠告し、私は彼の元へと走りました。

階段を下り、マンションの外に出て、彼がどこに向かったのか探します。携帯に電話しても通じません。メールで、探しているから戻ってきてと打ち込み、送信。たぶん返信してくれないでしょう。

取りあえず、辺りを走り回って彼を探します。でもなかなか見つかりません。街の方へといってしまったのかと思い、そちらにも足を運んで見たのですが見つからず、途中で捕獲員の魔の捕獲劇があったらしく、野次馬やマスコミ関係が集まってきたりして街から離れるのが大変でした。

あっと言う間にもう少しで四時になる頃になり、流石にもう部屋に戻っているよなど、彼の部屋があるマンションへ戻ろうと、住宅地を歩いている時、何故か涙が出してきました。さっきも泣いたような気がします、あれは演技に近いものだと言うことで、カウントしないことにしました。

なんで、彼は魔女の彼女を選んだのか。

ずっと前から近くにいた私ではなく、魔女でビッチのゴミを選んだのか、それが悔しくて悔しくてたまらなくなり、最終的にその場にうずくまり、声を出しながら泣いていました。

もういやだ。と泣き叫んでいました。それでも当たり前のように何も変わりません。

どうしようもないこの怒りを憎しみをゴミぶつけ、呪い殺そうとしました。そんな程度で変わってくれる、お安い世界に生まれたかったと都合良く嘆きました。

考えれば考えるほど、私は魔女になりたいと思いました。

だって彼は五年間も、一緒にいた私よりも、一瞬ちらっと見たゴミを選んだんですよ？ 彼の琴線は魔女って火を見るよりも明らかじゃないですか。なぜ彼が、魔女にそこまで執着するのか、検討もつかないのですが、昔、魔女とにかしら合ったことは間違いありません。知られたくない過去が――。

魔女になれば、彼は、私にも優しくしてくれる。

誰よりも、あのゴミよりも。

でもどうすれば魔女になれるのか、全く分かりません。

私は魔女になりたい、とさっきの彼のように狂ったように連呼しました。

魔女になって、彼に愛されたいと。

「あなた、なんだか可愛そうな子らしいわね？」

すると、どこからか女の人の声がしました。

座り込んでいた私は顔を上げると、目の前には、若い黒いコートを着た美しい女性が立っていました。

私は目の前に立っている女性に、あなたは誰ですかと訊きました。するとその女性は微笑んで、

「私はサバド、って呼ばれる、この世界で迷える女の子たちを、魔女にしてあげられる、唯一の存在よ」

.....え？

訂正。

世界はどうしてだか、都合良く、出来ているみたいです。

まじないっ！ **Houzuki Angle** 9／18 14：13（前書き）

誤字脱字などありましたら指摘お願いします。

こならは、最近不登校になった女の子の家のインターフォンのボタンを押した。ピンポンと当たり前に電子音が鳴る。その近くにレンズは見あたらず、別アングルで見られている可能性もあるなど考えたが、流石に鬼灯までは映らないか、と思いこむことにした。

しばらくして、インターフォンから女性の声がした。きっと不登校になった女の子の母親だろう。

「はい、どちら様でしょうか？」

「私、楓さんと同じクラスで近くに住んでいるの三谷と言います。楓さんの具合を伺いに来たのと、学校で配布されたプリント類を渡しに来たのですが、楓さんはいらっしゃいますか？」

こならは差し障りのないような口調で話す。

「わざわざこんな時に来るなんて、先生に早く渡すように頼まれたの？」

人喰いの魔女がまだ彷徨ってるのに、一人で来るのはおかしいと思っっているだろう。こならとしては、昨日もプリントを渡しに寄ってくれた子がいるんだけどや、いつもプリントを持ってきてくれる子と違うなどの矛盾が生じないか緊張していたのだが、それはなかったものでほんと胸をなで下ろしながら話し続ける。

「ええ。家も近いので、プリントや宿題等をほとぼりが冷めてから渡してこいと担任の先生に言われたんですが、先ほど親に見つかって、大事な進路関係のプリントもあるでしょうから早めに渡してきなさいと、どやされました」

こならは世間話風に答えていく。相手は話しやすいと思ったのだろうか、最初は疑っていたようだったが、柔らかい口調になっていく。

「それはご苦勞様ねえ。楓は熱がなかなか下がらなくてね。今、自分の部屋で寝ているのよ」

こう言えば、不登校の我が子に会わせない為の自然な口実だろう。染ってしまうから、を理由にして直接合わせないために。

それは、その我が子が人ならば、の話だが。

「へえ、自分の部屋で寝ている、と」

こならは不敵に笑みを浮かべた。掛かったと心の中で思う。

「え？ なに？ えっ？ どうしたの？」

インターフォンの向こう側では、自分が何か変なことを言ったのだろうか、急に雰囲気が変わった娘の同級生に慌てふためいている声が聞こえる。

「つまり、楓さんは家の中にいるんですね？」

こならはとどめと言わんばかりに確認を取った。

「っ！」

さすがに相手もこの時点で気づいたようだ。

「あ、念のためニュースでよく流れているんで、知っていると思いますが、最大の特長三つは、超能力が使える、人を食べる、そして、心臓がないです。その他にも色々ありまして、代表的なのは、」

「体温がないことなんですよ？」

今、自分が話している相手が、娘の同級生ではないことを。

そして、自分が匿っている娘を狩りに来た、正義と烙印された、悪魔だということを。

「せんぱーい、中にもう一人、人はいますか？」

インターフォンに拾えるくらい、大きな声でこならは鬼灯に訊いた。

陰からサーモグラフィらしきゴーグルつけた鬼灯が出てきた。その家全体を見回す。

「立っている人間が二人。一人は間違いなく女性、もう一人は体のがたいからして男性だな。あと」

「等身大の人形で、動いている人形が一つ、家の中にあるな」

「逃げてっ！ 楓っ！」

インターフォンと家の中から女性の叫ぶ声がして、家の裏から誰かが走って逃げる音がする。魔女が家の裏側の勝手口から逃げたのだらう。

「これで確実ですね」

こならがいい、後ろから鬼灯がゴーグルを外しながら、こならの隣に近付いてくる。

「これ、まだ喋れると思う？」

「いけるんじゃないでしょうか？」

こならに代わり鬼灯が魔女の両親に、

「それじゃあ、あーあー、聞こえてますか？ 聞こえてなくてもいいですが。私たちは心欠落障害調査機関の捕獲員です。あなた方の娘さんは残念ながら心欠落障害になっています。匿まっている場合、速やかに娘さんの身柄をこちらに渡さないと法律で罰せられるかもしれないので、ご注意ください。あと、私たちの行動を妨害したら、こっちは確実に公務執行妨害になるので気をつけてください」

そう建前を言ったところで、こならが口を挟む。

「それにしてもこんな事なくても、普通に乗り込めばよかったじゃないですか？ わたしの能力もあてにしてくださいよ」

「一応確認しなければ駄目だろ？」

こならの能力は、近距離にいる生物の心臓の鼓動を感知できると

いう物だ。こなら曰く、壁があろうが、防音壁があろうが、何があるうが鼓動だけが音として聞こえ、心臓がない魔女の場合は一定になり続けるノイズのような音がするらしい。そのノイズが聞こえた時点で、魔女が近くにいることとわかるのだが、正確な位置までは特定出来ないため、隣家から聞こえていたとか、家の間に隠れてたなどケースだと、関係のない家に押し掛け、赤の他人まで巻き込んでしまう可能性がある。その間違いを防ぐために鬼灯は、このような鎌かけをして、魔女を炙り出し、確実に引きずり出す方法をとっている。

「それにしても、このサーモグラフィで家の中、透視できる思っただな。家が日光に熱せられて、壁自体の温度が上昇したら見えなくなると思うんだが。その辺の原理はさっぱりだから、どうだか知らないけど」

鬼灯はゴーグルを指にひっかけてぐるぐる回している。ちなみにこのゴーグルは、サーモグラフィなんて仰々しい機能などは一切ない。只のハッター用にいつも持ち歩いているものだ。

国から機関へと毎年それなりの金額の予算が下りるのだが、それらは捕獲員の部署ではなく、魔女を元の人間に戻すかの研究の為に費用、魔女収容所の維持、増築費用、魔女に襲われた被害者の遺族と魔女になった子の親族への補助金の三つに根こそぎ持っていかれるため、結果、捕獲員の装備は安いものになっているのだ。歳のわりには少し高めの給料を渡すから、武器は自分たちでどうにかしろ、ということらしい。

「先輩、早く追わないと逃げられますよ？」

「筋力強化とか幻術たぐいの厄介な能力はではなさそうだから、すぐに追いつくさ。それにこっちには、バイクもある。あと、この人たちから、何人襲ったか聞かないとな」

そう親指で家を指した鬼灯は、こならと一緒に、魔女が匿われていた家にいる二人から事情を聴くことにした。

それから、魔女を追っても十分間に合うだろう。

まじないっ！ **Houzuki Angle 9/18 14..13 (後書き)**

皆様のおかげでPV1, 000を超えました。本当にありがとうございます御座います。なんか頑張れる気がしてきました(何を?)。これからもどうか温かい目で読んでやってください。

まじないっ！ **K a z u r a A n g l e 9 / 1 8 1 4 ∴ 2 7 (前書き)**

誤字脱字などありましたら指摘お願いします。

誰もいないオープンカフェで、魔女草の二人が出会いたくないと嫌悪していた二人組、政府の魔女のふきと能力者の葛が、休日の昼下がりのように一服していた。

「なあ、何で俺様はオープンカフェで一服してるんだ？」

「よくよく考えてみると、今回件を片づけちゃうと後先、つまらなくなるんだよね。だからゆつくりと行こう、ってなわけ」

それよりも個人的な別件の方が気になるんだけど、そっちは首を突っ込むなって、お父さんに言われてるしとつぶやいた。

ふきは不機嫌そうにただの水を一気に飲み干す。ふきはこれでも一応魔女なので生肉と水くらいしか飲み食いできるものが少ない。だからケーキやコーヒー等しかない、おしゃれなカフェで時間をつぶすのは苦手なのだ。外のテラスでも禁煙らしいので、唯一の気分転換の煙草すら吸えない。その一方で、葛はアイスコーヒーを飲みながら優雅に文庫を読んでいる。これもふきを不機嫌にさせる原因因子でもあった。

「この続きが気になって気になって、仕方がなかったんだよ。あ、集中して読みたいから話しかけないでね」

視線をふきに向けず、文庫を読みながら葛は言う。ふきはあくびをして眠そうに言った。

「そんなに気になるんなら、移動中、車の中で読めばよかったじゃねえか？」

「僕、乗り物に弱いんだよ。一行読むだけで気持ち悪くなって吐きそうになるんだよね。三半規管が弱いからかな？」

「そんなの子供だからじゃね？　ところで、あと何分くらい暇つぶすんだ？　俺様はこの店じゃあ、飲み喰うするもんがねえから、暇で暇でしょうがない」

「んー、魔女が一人、捕獲員に捕まるのと、ストライガ魔女草の魔女たちが勧

誘にここに着いてからかなあ。僕たちはその頃に、間入した方が楽しくなりそうだね。その時まで一休み、ってところかな」

「あっそ。その方が面白くなるって、お前が言うなら俺様はなんだったいいさ。じゃあ、俺様は移動する時まで寝るから、そんな時になつたら起こしてくれ」

「おっけー」

ふきはポケットからiPodを取り出し、イヤフォンを両耳につっこんでふんぞり返り、瞼を閉じて寝る体制になる。

「おやすみ。ふき」

文庫から視線を離さないで葛が言った。

二人以外だれも客がいないオープンカフェにはクラシックのBGMが流れる音と葛が文庫のページをめくる音が聞こえるだけだった。しばらくすると葛はふと、文庫から目を見上げる。昨日は雨が降っていたが今日は灰色の雲はなく、晴れ晴れとしたい天気だった。

「雨が降らないといいんだけどね」

葛は青い空を見上げながら、ニヤリと笑みを浮かべて、視線を文庫へと向け、読書に没頭していった。

まじないっ！ **S t r i g a A n g l e 9 / 1 8 1 4 ∴ 5 2 (前書き)**

誤字脱字などありましたら指摘お願いします。

一方、魔女草ストライガの二人組はというと、

「いやー、流石ですよ。真っ逆さま（神）がこんな方法でヒッチハイクするなんて、わたくし考えもしませんでしたよ。もう感服です」
「はっ、今頃うちの能力の凄さを思い知ったか」

自らの足で、魔女が匿われているマンションへ向かうのは、遠すぎるため、早々にあきらめ、ヒッチハイク（？）紛いをし、どこかのマスコミのワゴンに勝手に乗り込んだのだった。この周辺でその町に向かう車は、報道やマスコミ、警察の車くらいで、カメラや何に使うか見当もつかない機材が後ろの席に積んである。

ワゴンの運転手とその助手席に座っている人は、バックミラーに映る後部座席に座っている魔女二人に一切気づいていなかった。

くらはまだ真っ逆さまを誉め称えていた。

「真っ逆さま（凄）は、もっとこう、すごいえげつないことでもするのかと思っていましたよ。こう走っている救急車を止めて、破水して今にも赤ちゃんを出産しそうな妊婦を引きずり下ろして――」
グロにはそれなりの耐久性があった真っ逆さまでも、くらの横道に逸れたカオスワールドには引いていた。

「……本当はな、もっとカッコいい車でも奪って行こうと思ったんだがな、あとで足が着くと、鈴や他のやつにも迷惑が掛かるからマスコミのワゴンにしたんだ」

真っ逆さまは胸を張りながら威張った。本当の理由は車を運転できないからなんだが、そこは言わないらしい。

「わたくしはてっきり、下着姿でこんな淫乱な私をここまで送ってくれたら、今晚、私を食べて尽くしてもいいよ、ハートマーク。と書かれたプラカード持ちながら、ヒッチハイクするんだと思いましたよ。もちろん、真っ逆さま（処女）がっ！！」

「よし、お前だけ魔法を解いて、この車の運転手やらに見えるよう

にしてあげよう」

「うわーん。それだけは止めてくださいよ。わたくしが代わりに、その役やりますから」

「勝手にやってるよ。つか自分がやりたいのかよっ！」

「下着姿なら、自信がありますっ！ 少なくとも真っ逆様（貧）よりは！」

「首だけ見せないって、手もあるな」

「そっちの方がホラーなんでやーめーてーくーだーさーいー」

くららに肩を掴まれ、真っ逆さまはがくがくと体を揺らされている。

「……もう、やめれ……」

酔ったようだ。

「実はこの下着姿で、ヒッチハイク作戦、必ず車が止まってくれるようになっているんですよ？」

「すげー作戦名だなと真っ逆様はばやき、さらに言った。

「世の中、それだけ腐っているってことなんだよ」

だから男はいやなんだよ、と人類の半分を罵り始める。

「ええ、そうですね。本当に腐ってますよ。白と黒と赤の車に乗った男たちが必ずって言っている程、乗せてくれるんですが、目的地に連れていかずに強制的におもちかえりし、個室で言葉で精神的に陵辱して、あまつさえ、金までせしめるんですよ？」

「ごめん。世の中意外と腐ってないわ。お前が腐っているんだわ。

そんなことよりも、デメリットの方が大きいじゃねえか下着姿でヒッチハイク作戦っ！」

「見事な三段突っ込みですね。天井にします？」

「しなくていいっ！ 突っ込むの面倒だからっ！」

「いや、そこは、警察署だからカツ丼だろっ！ って突っ込まなきゃ真っ逆さま（ウザッ）じゃないですよ？」

「ついに漢字じゃなくなったのな………」

流石の真っ逆さまは、突っ込みに疲れたのか、まじめな話題を振

る。

「今後、魔女草ストライガはどうなっていくんだろうな」

今度はぼけることなくくらは答える。

「そんなの決まっているじゃないですか。機関の捕獲員達から逃げて、魔女の一般的な人権を取り戻すために活動していくんですよ。それに花木さんや真っ逆さま、毬藻まりもさんみたいな強力な魔女だっていますし」

「それもそうなんだが、もし、鈴がいなくなったら、どうするんだよ？ 今の魔女草ストライガは鈴がいるから、成立しているわけであって、その代わりに、うちや毬藻がやっていくことは不可能だ」

鈴がやられたら真っ先に魔女草ストライガは簡単に潰されるなど苦笑しながら言う。

「……………」

真っ逆さまが嫌々そうに話す。

「あと、もっと不安なのは、政府の魔女みたいな政府直々の魔女が出てくることだな。今は政府と協定結んでいるに近いから安心だが、もし、独自、独断にやられたら、こちらは太刀打ちできない。うちの組織って何というか、同じ貉の穴だから入る時に、お互い過去とか詮索しないだろ？ それが逆に墓穴を掘って、自滅に繋がるんだよ。こちらが一方的に相手を信じきっているからな。だから魔女のスパイとか送り込またら、こちらに勝ち目がない」

「——それは花木さんに伝えたのですか？」

「そんなの、うちが入ってからすぐに伝えたさ。そしたら鈴はなんて返したかわかるか？」

にやりと笑いながらくららに訊いた。くらは首を竦めた。

「わかりませんよ。そのように訊く時点でわかりっこないですもの」「つまんねーの。鈴は、魔女に悪い人はいませんよって返したんだ」
くらは呆気を取られる。

「……花木さんって、時々、頭悪そうな発言しますよね」

「いや、その後が怖かったんだ」

「?　なんて言っただんですか？」

流石にくららも興味を持ったらしい。真っ逆さまは勿体ぶるように言った。

「わたしが生きている間はずっと、ね?　って」

「……え?」

「つまり、鈴が生きている間中、うちら含め、生きている人間は、絶対に逆らえない鈴の手駒だってことさ」

くらは一拍置いて話した。

「……なんだか嫌な空気になったような気がします」

「ああ、ごめんな。こんな話して」

「つまり、今さっきまでのわたくしの思考、妄想、狂言は、花木さんに植え付けられた人格がそうさせていることだということであって、本当のわたくしではないと」

「絶対に違う。お前の性格はそれで間違いない合っている」

真っ逆さまは、真顔で突っ込むのであった。

まじないっ！ **A b s o r p t i o n w i t c h A n g l e 9 / 1 8 1 5**

誤字脱字などありましたら指摘お願いします。

淡い水色のスウェット姿の魔女——楓は捕獲されるという恐怖に怯えながら、裸足で住宅地から街の方へと逃げ、狭い路地を走って逃げていた。

先ほど家に機関の捕獲員が楓を捕まえに訪れ、裏口から出ることで間一髪逃げることに成功した。街の方に行けば、こんな時でもある程度は人目がつき捕獲員も捕まえ難いだろうと考えて、向かってどこか隠れる場所はないか探し回っていた。

「はっ、はっ、はっ」

走っても走っても、呼吸は一定のまま、不思議と息が切れない。その事実が自分が魔女であること如実に表していた。

「何で、わたしがこんな目に遭わなくちゃいけないのよっ！」

楓は涙目になり、自棄になったのか大声で不満を叫んでしまった。すぐに慌て走りながら、周りに捕獲員がいないか確認する。遠くから捕獲員がバイクに乗って追いかけてきているのか、エンジンを吹かす音が徐々に近付いて聞こえる。その悪魔から逃げるために楓はさらに走るペースをあげた。

「もう、いやだ」

楓はついに泣き出して、嗚咽しながら、休むことなく、逃げていく。

どうしてこうなったんだろう？

放課後、遅くまで友達と寄り道していたからかな？

知らない間に、こんな心臓も体温もない体にされて、リウまで食べちゃうなんて……………。

楓は路地から大きな通りへと出た。放課後、よく友達といっしょに寄り道する店がならんでいる見慣れた通りだった。今日はテレビに映った所に来たような、ここが現実にあるのと疑問に思う程、遠い世界に来た様な気がした。

思っていたより人通りは少なく、いつもなら平日でも交通量が多いのだが、今日は自分のせいで閑散としていた。

ここまま走って逃げても、相手はバイクだ。すぐに追いつかれてしまう。残念なことに楓の魔女の能力は筋力強化でないので、超人のように早く走ることはできない。寧ろ、楓自身、足は一般人より遅い方で、息が切れずに走れるからと言ってそんなに早くはない。

振り切る方法の一つだけあった。

それは魔女だからできる方法だった。

楓の頭の中に一つだけ、その方法が浮かぶ。もう躊躇っている時間もない。

楓は覚悟を決めた。

丁度、大通りを走っている車の前に、

飛び出て、引かれた。

ドンッ、と車に当たり、腰が先に当たったのか、まずそこが碎ける。その次にボンネットからフロントガラスの上を滑るように体が動いていき、勢いがついて、空中に投げ出される。後はアスファルトに右肩から落下し、ゴギッ、と骨がまた碎けた音がする。楓は立ち上がるようにしたが、止まり切れなかった後続車にまた跳ねられた。今度は真上ではなく、前に飛ばされた。骨が何本何力所、折れたかもうわからなくなっていた。アスファルトをごろごろと体内の骨を削るように転がり、その体の中では折れた骨が凶器と化し、内部から肉を突き刺す。先に引いた車が止まっていたので、そこに勢いよくぶつかって、止まった。

楓の体は四肢はあり得ない方向に曲がり、体中の骨折によってできた内出血と打撲の痕が斑状にでき、折れた骨が凶器と化して、内側から肉を貫いて出血している箇所を多くあった。

運転手達が倒れている楓の元へと駆け寄った。その悲惨な姿に運転手達は絶句し、訳も分からずパニック状態のまま、懷から携帯を

取り出して、救急車を呼ぼうとする。

「……………救急車はいりません」

楓は、はっきりと述べた。

二人の運転手は目の前で起こった光景に唾然とした。

二台の車にはねられ、体中の骨が折れて、腕も足も首も体もおかしな方向に曲がっていた少女は、生まれ落ちた子牛のように、今、平然と立ち上がりとしている。

楓の魔女としての能力は、吸収。

傷口に触れた相手の皮膚を溶かして、そこから結合し、結合部分から自分の細胞が相手の皮膚を喰い破って体内に進入、体内から中身を喰い散らかして自分の体へと吸収させる。

怪我をしていないと楓は一切、相手に攻撃できないのだ。

この状態で相手に抱きつけば、そこでけりが付く。

「わたしは、魔女なんです。今、とってもお腹が空いているんです」

楓は前髪を手でかき分け二人の自分を引いた運転手を睨む。片目は内出血で真っ赤に染まり、ぶつかった衝撃で鼓膜が両方破れたのか、神経が切断したのか、ちゃんと発音はできていた。睨まれた二人は腹を空かせた猛獣を前にして怯えるように、後ずさりして逃げようとしていた。この場から一刻も早く逃げなければと本能的そうさせているのか定かではないが、一步一步、楓から距離を置こうとしている。

「どちらでいいので、わたしを、車に乗せて遠くに」

そう楓が言った瞬間、頭に細い鉄線で作られた輪が、輪投げのようにくぐった。

「駄目ですよ。人を食べちゃ」

いつのまにか隣には自分と同じくらいの年の女の子が立っていた。

声は聞こえないため、何を言っているのか分からない。

「あなたは――」

そういえば、私を追っていた捕獲員のバイクの音は？

「残念でした」

その女の子は楓の顔面に向かってスプレーを浴びせる。

スプレーが眼に入り、焼けるような激痛に顔を押しえてしまった。本当にやらなければいけなかったことをすることなく。

「せんぱうい。準備はいいですか？」

「OKだ。かつ飛ばせばいいんだろ？」

「はい、気にせずにガンガン走り抜けてくださいっ！」

楓はけたたましいエンジンをふかす振動を体で感じた。

「大丈夫ですよ？」

「へ？」

楓は聞こえていないのに何故か聞き返してしまった。

今から自分の首を狩り取る捕獲員に。

「首が切れる瞬間、気絶するらしいんで全く痛みはないみたいですよ？ まあ、あなたは魔女なんですから、首と胴体をくっつけられ生き返るんで、痛いとか死ぬとかは心配はしなくていいんですけどね」

急に細い鉄線の輪が強い力で引っ張られ、楓の首の肉に食い込んだ。肉が耐えきれなくなった。肉を裂き、切り落とした。

ここで楓の意識が、一端、なくなった。

やっとバトルシーン！ ……ええ、バトルシーン書くの苦手で
すよ。だからこうなりました。期待していた方、本当にすみません。

まじないっ！ Houzuki Angle 9／18 15：12（前書き）

誤字脱字などありましたら指摘お願いします。

「ふう、いっちょ上がりですね」

こならが道路の真ん中に転がっている魔女の首と持ち上げる。死んでいる状態なら能力もへったくれもないので、気にも止めなかった。頭を失った体の方は、このまま道路のど真ん中に寝そべってもらうのは色々と酷なので、丁度よく近くにいた魔女を引いた運転手二人に手伝ってもらい、邪魔にならないように歩道に運んでもらった。その間に鬼灯はバイクに括りつけていた鉄線を取って回収し、Uターンして戻ってきた。

「意外とうまくいくもんだな」

「今度からこうしましょうよ。楽にさらに怪我せずにできますから」

「ああ、確かにいいかもしれない。だが」

「え、なんですか？ やっぱりバランス取るの難しかったですか？」

「いや、……………人目に付きすぎだな」

こならは当たりを見渡した。

野次馬の方々がこならと鬼灯を中心に囲むように集まり、携帯電話話を片手に、この国では珍しいパパラッチ行為をしている。先ほどの手伝ってもらった二人はいつの間にか、車ごとどこかに行ってしまった。 (あの車の状態で逃げたらひき逃げと間違われるのではないか?) それに、こならは片手に首を持ったまま撮られていた。かなり危ない人になっているに違いない。心霊写真よりも怖そうだ。 「……………これ、また報道関係から叩かれますよね？」

「これで何回目だっけか…………」

二人ともこういうのには慣れているが、辛いものはやっぱり辛いらしい。帰ったら報告書、始末書等を十数枚も書かなければいけないのかと、遠くを見て疲れた表情をしている鬼灯だった。

そんな憂鬱気分の真ん中にさまよう鬼灯にこならは訊いた。

「それよりも、百合子さんはまだなんですか？ 早くここから撤収

したいですが」

「大丈夫だ。今回はあいつに任せないで、もう俺が回収班に連絡しておいたから、この付近で待機してくれているはずだ」

「さすがです。先輩。それにしても――」

「なんだ、晒し者みたいでイヤか？」

「いいえ。百合子さんの存在意義が薄れてきたような気が……」

「……本人には絶対に言うなよ？」

本人に言ったら二人は命と同じくらい大切なものをいっぺんに失うのだろう。

数分後、人混みをかき分けるように回収班の黒いワゴンが来た。

鬼灯が指示して、魔女を回収し、野次馬は、野次馬自身が呼んだ警察に散らしてもらって、情報規制や交通整理をしてもらった。警察の方々からもっと穏便にできないのかと、どやされた捕獲員二人だが、愛想笑いですいませんと謝っていた。

「あと、何人魔女がいるんだね」

鬼灯とこならは回収班の波多浦はたうらに訊かれた。数が多いと運ぶための車も多く手配しなければならぬからだ。

鬼灯が答える。

「あと最高で五人はいると百合子が言っていましたけど、そんなにはいないと思います。それから、この魔女の母親が言うには、人は食べていないと言っていました。身内の証言なので信憑性に欠けますが」

鬼灯とこならは、今捕獲した魔女が匿われていた自宅から逃げたあと、魔女の両親に、あなたたちの娘は、いつ魔女になったのか、人を食べたのか、食べたなら何人、どこで食べたのかを業務的に訊きだした。

魔女の両親は、この子は人ではなく、この家で飼っていたゴールデンレトリバーのリウを殺して食べたんだと、涙を流しながら二人のこれから自分たちの娘を捕まえに行く捕獲員二人に訴えかけていた。玄関に飾られていた、リウを後ろから抱きしめている幸せそうな女の子の写真が、もの悲しく見えたのを思い返す。

タイミング良く鬼灯の携帯がなった。誰かから電話のようで、鬼灯は携帯を取り出して画面を確認し、百合子からかと呟き、電話に出た。

『もしもし、そっちはもう終わった？』

「ああ、終わったよ。新しい情報でも入ったのか？」

『そうよ。いいのか悪いのかよくわからない情報が、ね』

「勿体ぶらないでさっさと教えろよ」

『そう焦らないの。さっき警察から、被害者たちの検死の結果を教えてもらったわ。詳しくは教えてもらえなかったけれど、被害者全員、同じ犯人による犯行のものと断定できるそうよ。それから、さっき別の場所で被害者が三人見つかったらしいわ。警察はそれも同じ犯人によるものと視野にいれて捜査しているって』

「……おい、それって」

『ここには、過去類を見ないほど、短時間に人を食べた魔女が彷徨いているってことになるわね。あの快楽人喰いの模倣の魔女よりも、危険な魔女らしいわね。機関からは、その魔女の名前が決まったって、今さっき連絡が入ったわ。人食べるペースも早いし、この子も快楽殺人も入っているんじゃないのかしら？』

「その魔女の名前はなんだ？」

しびれを切らした鬼灯がその魔女の名前を訊いた。

『殺戮の魔女。全く、十代の乙女につける名前とは思えない程、皮肉で、最悪な名前ね』

まじないっ！ **M a s a k i A n g e** ×××××××× (前書き)

誤字脱字などありましたら指摘お願いします。

まじないっ！ **Masaki Angle** ×××××

僕と姉が特別になった日。

魔女になった姉は、最初に母、次に父を襲って、二人とも食べた。僕は運良く襲われなかった。姉は二人を食べ尽くして、もうお腹いっぱいだったらしい。二人を余す事なく食べ尽くした後、満腹で理性が戻った姉は、母と父の滓を見つけ、泣いていた。わんわんと泣いて、その自分がやった死を悲しんでいた。

その時、僕は弱りきった獲物を見つけた肉食獣のように、今がチャンスだと思って行動したのだろう。

特別になれるんだと。

そして、ゆっくりと姉に手を差し伸べた。

血に染まった弱りきった手をとって、僕から抱きしめた。体温もなくなって冷たく、返り血で服は血に染まって生臭く、姉の元の香りとはほど遠かったけど、すごく気分が良かったことを後悔するほど覚えている。

「……お姉ちゃんは魔女になって、お母さんとお父さんを殺して食べちゃったんだよ？ マサは私が怖くないの？」

かすれるような声で僕に訊いて来たのを覚えている。

「お姉ちゃんはどんな姿になっても、どんなことをしても、僕の大好きなお姉ちゃんだよ。だから、泣かないでよ」

すると姉は僕をいつものように抱きしめて、ありがとうと顔を涙と鼻水と返り血で汚しながら、吐露し始めたの覚えている。

僕は覚えている。

その時、自分がもう歯止めが利かない程、狂っていたことを。姉の好意を独占しきって、満足していたことを。

それ以上を求めてしまったことも。

それからすぐに姉もおかしくなっていた。

当時の僕でも分かるくらいに、僕と話す時の口調が変わっていたからだ。それは姉弟愛というものではないものだと、直感で気づいた。

きっとそれは吊り橋効果みたいなもので、好意も愛もすべて違うもので、ただその違うものを正しい、汚れていないものだと言いたかったのだ。そう思いたかった。そう思わなければ、辛くて耐えられなかった。

その想う姉の心を。唯一残った姉の心を、

僕は僕の快楽の為に、永遠に味が無くならない、チューインガムのように、何度も咀嚼し食べ尽くそうとした。

その夜、僕と姉は、両親が死んだって言うのに、馬鹿みたいに、それこそ猿みたいに、溺れた。

その時の僕と姉なら、それを『愛』とでも呼ぶのかな？

どう考えても、偽りも無く、近親相姦という名の倫理に悖る行為で、ただ快楽に溺れたかっただけじゃなか。

と今の僕は、スパッと素っ気なく言い放ち、それこそどっかの条例を定めた人たちよろしく、頭ごなしに嫌悪するけどね。

うたかたっ！ **K a z u r a A n g l e** (前書き)

誤字脱字などありましたら指摘お願いします。

うたかたっ！ **K a z u r a A n g l e**

うたかたっ！

所詮、人生なんて泡みたいに弾けて消えるものなのさ。

そう思えば楽になれる気がするんだけど、案外うまくいかないものなんだよね。当たり前のように息詰まって、苦しんで、絶望する。僕はそれでいいと思うよ。そうしないと人は前に進もうとしな
いからね。

まあ、そんなじゃない、もっと人生とは薔薇色で、美しいもの
なんだと思っ
ていてもかまわないよ。

どうせ、美しく、素敵な物に例えたって、必ず最後は、泡のよう
に弾けて消えて無くなるんだから、精一杯、限りある自分の人生を
自由に愛撫すればいいさ。

それが間違いだとしてもね。

うたかたっ！ **T a m a n a A n g l e 9 / 1 8 1 6 ∴ 2 1 (前書き)**

誤字脱字などありましたら指摘お願いします。

目の前に立っている女性は確かにそういいました。

私を魔女にしてくれると。

マジでっ！？　こんなに簡単に成れるものなのっ！？

このとき私はテンパっていました。無理ありませんね。

いやいやいやいやいやいやいや。

そんな悪徳商法に引つかかるほど私は馬鹿じゃない……のかな？
自信がありません。はい。

どこをどう考えてもこの人が魔女にしてくれる分けないじゃないですか。物は試しだ、やってみてだなんて死んでも言えませんか。ていうか、心臓えぐり出す時点で試しも何も一回しかできないっての。そもそも何を根拠に信じればいいんですか？　というとあれですか。こやつ、できるっ！　みたいな極めた眼力をもたないといけないのですか？　それくらい出来れば、魔女になろうだなんて思いませんって。

というわけで、丁重にお断りしようとしたんですが、その女性はさらにいいました。

「あなた、私を疑っているわね？」

そりゃ当たり前です。誰だってこんな怪しすぎる人にあったら疑うにきまっています。免疫ある人でも疑いますって。

あと学校でも、どこかの女子生徒が魔女にしてあげるから着いて

こい、とフツーのおっさんに言われ、ほいほい着いていって卑猥なこと（具体的に言うとなんちゃって）された事件があったから、帰りは女子は一人で帰るなよって、先生に言われたもんねっ。まさか、こんなきれいな女の子に卑猥な、いや、百合百合なことされるとは……。
訂正、私は馬鹿です。

「証拠を見せることは出来ないんだけど、信じてくれないかしら？」

だから無理だって言っているじゃないですか。証拠見せたって、もし、嘘だった場合、私は心臓を抉り取られて絶命するんですよ？
違う方法で、たとえばそこら辺の犬とかで魔女になれる証拠を見られたとしてもすぐ成りたいって思わないですし、そんな理不尽に近い取引を迫られたら、アニメ、マンガなどのヒロイン（ここは絶対に譲らない）だって、三話くらい消費して成ろうか成るまいか、その葛藤を描くじゃないですか？ 最近はワンクール、十二〜三話くらいしかないから、一話、二十四分で成っちゃう子がいるみたいですけど、ここはあくまで現実なんですよ？ あなたみたいな現実と非現実が区別できない人がいるから、どんどんとマンガやアニメは規制されていくんですよ？ それに（ry

「やっぱり、直接、証拠を見せた方が信じてくれるわよね？」

えっ？

その女性は私にいつの間にか近づき、私の胸に手を突っ込んでいました。

上に着ていた服、肌着、ブラと全て貫き、

（あまりの早さに妄想。どうでもいいので省略）

さら胸の肉を貫き、あばら骨を掴み、

（あまりの痛さに絶叫。うるさいので省略）

あばら骨は進入してきた手によって簡単に切断されて、切り取られた皮膚や骨はポイ捨てられて、

（あまりの痛さに失禁。汚いので省略）

たどり着いた先の心臓を親指、人差し指、中指、薬指、小指、すべてを使って撫で回し、

（あまりの激痛に失神。無言なので省略）

すべての動脈、静脈を指で丁寧に取り取り、体の中からズルツと引きずり出しました。

あ、あああ。あ？

気づいたときには、その女性の手握られた握り拳くらいの私の心臓があり、まだ元気に動いて心臓内に残されている血液をピュッ、ピュッ、と吹き出しています。

「これであなたは立派な魔女よ」

そういうと女性は私の顔に向かって微笑みかけて、私の心臓を持って、くるっと向きを百八十度変えて進み、曲がり角を右に曲がって、とうとう見えなくなりました。

え？ 私、もう、魔女になったの？

心臓が取り出された胸の穴からは、溢れんばかりの血がどくどくと出て——いません。それに痛みは、さっきよりは痛くなく引いているような気がします。が、やっぱり痛いんです。

でも、死んでません。

というより、死にません。

心臓を取っても、数分は頭の中に酸素があるから意識があるってきいたような気がしますけど、これは数分どころではありません。貧血も起こす気配もなく、意識はしっかりとしています。全く死ぬ気配がないことが逆におそろしいくらいです。

おそろおそろ、飛び跳ねてみました。死にません。

おそろおそろ、そこら辺を走ってみました。死にません。

おそろおそろ、折りだした所を触ってみました。神経はあるみたいで激痛に悶え苦しみました。が、死にません。

死にません。

これは、魔女になったってこと？

私はあのゴミが言っていた通り、呆気なく、素っ気なく、突然に魔女になりました。

ふふふふふふふふ……。

不思議と笑みがこぼれます。

ずっと体中を舐め回していた恐怖の次にやってきたのは、歓喜、喜びでした。

これであるゴミと同じ立場に立てる。寧ろ、私の方がつき合いは長いから有利だ。

いやいや、私も魔女になったんだから、もっと確実に、

アノゴミ、ブッコロシテ、ハラワタヒキズリダシテ、タベチャエ
バイイジャンッ♪

私は不気味にニヤニヤと笑みを浮かべ、愛しの彼の搜索を再開することになりました。

彼にあつたらこう告白するのです。

こんな体になるまで気づかなかったなんて、雅樹のばか。でもね。責任とってくれたら許してあげる。

決めゼリフはこれ決まりですね。きっと彼も私に落ちてくれます。メロメロです。

まず私は、着替えるために、一端、家に帰りました。着ている服がぽっかりと穴が開き、血液が付着していますからね。それに………あまりの痛さに、ごによごによしてしまいました……。それが終わってから、彼を搜索を始めるとしましょう。なんせ私は魔女なんですから。

うたかたっ！ Houzuki Angle 9／18 16：06（前書き）

誤字脱字などありましたら指摘お願いします。

「こちら辺か」

「こちら辺ですね」

鬼灯とこならは、この周辺で魔女を匿っている人がいる、という匿名のたれ込みあったと警察の方々にいわれ、その付近の住宅地にたった今ついたところだった。

「いちやついているバカップルを見た人が、腹いせで通報したってオチじゃないですよね？」

「あー、あり得るかも」

なんせ、匿名で警察に通報した方は、魔女を匿っている家の住所を教えず、こちら辺にいますとアバウトにしかいわなかったらしい。信憑性に欠け、どう考えても迷惑な嫌がらせだろうと鬼灯と思ったが、殺戮の魔女がどこに潜伏しているのかの手がかりは、今の所一つもないため、藁をもすがる、というよりは虱潰しに警察に寄せられた魔女の目撃情報、たれ込みを片っ端からつぶしていく方針になったのだった。

寄せられた情報を全部確認するのは、警察の人たちでも大変時間のかかる作業であり、殺戮の魔女捕獲にかかる手間と、甚大な被害が被る可能性が出てきたため、百合子が応援として、さかき 榊といちりなどの捕獲員を呼んだと言った。明日にはこちらの着くらしい。

鬼灯はバイクを止め、どこから探しているのかと警察の方から借りた地図を取り出そうとした時、何故か、こならがバイクから降りた。鬼灯は、どうしたと言う。

「ここは二手に分かれましょう。マンションとかはわたし一人で回った方が手っとり早いですし」

「だが、俺一人だと家の中に居る魔女を発見できないんだぞ？　だから二人で回ってるのに」

具体的な魔女の手がかりがないため、こならの家の中にいる魔女

や人、生きているものなら、なんでも区別できる能力が、ぱつと見では分からない魔女の捜索には必要となる。ここで二手に分かれてしまうと捜索の能力を一切もたない鬼灯は魔女を見つけることが困難になる。

「だから機関にサーモグラフィのゴーグル買ってもらえばよかったじゃないですか」

「あのなあ、あれ、結構高いんだぞ？ それになかなか捕獲員の方に予算が下りないって東城さんとうじょうさんが愚痴ってたじゃないか」

それならバイクなんて買わずにそっち買えばよかったんじゃないですかと、こならは思ったが、バイクを購入すると、鬼灯は高速乗ればいいやと125ccを少し上回るくらいのバイクを買おうとしていたのについて来たこならが、わたしはこの大型バイク乗ってみたいです！ それにしてください！（自分で乗る気はさらさらない）と、大型バイクを催促して、意外とそういう押しに弱い鬼灯は、現在に至る結果となったの思い出した。これは自分にも非があるので言わないで置く。

「それに今回の魔女は沢山、人を食べているんですよ？ そんなことを匿われながら、できるわけがないじゃないですか？」

匿われている魔女の大体は身内によって、外に一步も出られないようされ、これ以上人を襲わないように匿われている事が多い。そのためなのか、長い間気づかれなくても被害者の数は全く出なくなる。だが今回は短期間に八人も襲っている。おそらく、この殺戮の魔女は匿われておらず、一人でさまよっているために短期間で多くの人を襲った可能性が高い。つまり、隠れずに歩いているのではないだろうかとかならは思ったのだ。

「そうだな——別の可能性もあるがそっちはできれば考えたくないな」

こならもこれには頷いた。別の可能性とは、匿っている人が魔女を餌を食べるときだけ、外に放しているという可能性だ。狂っていると思えないが、この世の中、そういうことをする輩も少な

らずいる。

「時間がないので、二手に分かれた方がいいと思いますよ？」

こならが提案すると鬼灯は渋々、了承する。

「そうするか……。だが、危険なことはするなよ。魔女を見つけたら一人で捕まえようとは思わずにすぐ俺に連絡しろ。なんせ今回の魔女は分かっているだけで八人食った奴なんだから」

こならはヘルメットを外し、鬼灯に渡しながら言う。

「先輩のバイクがなければ、わたし一人の力で、魔女の首を切り落とすことなんてできるわけじゃないじゃないですか？」

どこをどう見たってわたし一人で魔女を捕獲する程の力なんてないですよと自虐的に言った。

「それもそうか。でも見つけたり、出会ったりしたら、すぐに逃げて、俺に連絡しろよ」

「はい。わたしはバイクじゃあ、絶対に通れない、あっちのマンションの方を探してきますから、先輩は一軒家が密集している方をお願いしますね」

「了解」

素晴らしい鬼灯はバイクを走らせ住宅地に向かっていった。一人ぼつんねんとこならがその場に取り残される。

「そういう、わたしに怪我させない為に、一人で魔女を狩ろうする先輩の優しいところが、大好きですよ」

こならは一端背伸びして、気持ちを入れ替え、マンションの方へとスキップしながら向かう。

「まあ、わたしも同じような事を考えていたりするんですけどね」
ある程度歩いた所でこならは、ふと思った。

「イチャついていたバカップルって……。わたしと先輩の事なんじゃ……。きやつ」

こならは一人、幸せな妄想に耽りながら、魔女を探しに行った。

うたかたっ！ **B a n i r a A n g l e 9 / 1 8 1 6 ∴ 1 5 (前書き)**

誤字脱字などありましたら指摘お願いします。

ばにらは一人、助けてもらった恩人の雅樹の一室でぺたりとフロ
ーリングの床に直に座り込んで、雅樹の帰りを待っていた。

雅樹さんの恋人（？）なのだろうか、珠奈さんが雅樹さんをつれ
て、外に出たと思いきや珠奈さんだけ戻ってきて、不機嫌な顔をし
てわたしの経緯を色々と言いついて、わたしの受け答えの何かが気に喰
わなかったのか、急に雅樹さんを探してくるって言ってどっか行っ
ちやったし。

ばにらは珠奈に言われたとおり、玄関の鍵を閉めて、元の部屋に
戻ったあと、いつまでも借りた服でいるのは気が引けるので、買っ
てきた服、灰色のパーカーとジーンズに着替えた。あとはする事も
ないのでぼーと座り込んでいたのだった。

「……………この後、わたしどうなるんだろう」
ばにらは呟いた。

いつまでここで隠れて入れるだろうか。そのタイムリミットは明
日かもしれないし、明後日かもしれない。もしかしたら永遠に來な
いかもしれない。そんな淡くすぐにも消えてしまいうドライアイス
の煙みたいな夢、泡沫の願いは、ばにらの心の周りをもやもやと紫
煙のように包んでいる。

そもそも何で捕まるのが嫌なのか、ばにら自身も分からない。マ
ンガやアニメ、色々なサブカルチャーの影響、それから得た似非知
識で、捕まったら非道な人体実験され、薬漬けにされたり、体を生
きたまま解剖されたり、はたまたは裸にされて辱めを受けさせられ
るかもと妄想して怯えているのだろうか。実際は魔女がほかの人々
を襲わないように、個室で管理され、魔女を一般人に戻すために日
夜研究が行われているはずで、そんなマッドな実験は行われていな
いと言われている。そもそもそこまでしたら、世間にバレたときの
バッシングが国際問題にまで発展するため、そこまで危険を犯して

までやる研究者はまずいないし、いたとしても一人では到底無理だ。それに捕まっても受刑者みたいに、厳しい規則に縛られた生活を余儀なくされるわけでもない。動物園のライオンやトラなどの肉食獣が檻に入れられても、ストレスの少ない快適な生活できるように、魔女が人を襲わないよう管理される以外は、捕まった魔女たちは、多くことは自由に行動してもいいということになってる、と政府が国民から集めた税金を使って作ったパンフレットに書いてあった気がする。関係ないし、かさばるから一回流し読みしてから、即資源回収に出しちゃったから詳しいことは分からない。まさか、自分になるとは思ってなかったし。

捕まっても悪いことはされない。むしろ、人を襲わないよう管理してくれるならそちらの方がいいんじゃないかと時折、思ってしまったりもする。

でも、どうしてだか捕まりたくはないのだ。

確かに捕まれば両親、友達、恋人、その他諸々に会えなくなる。という訳ではないが、面会は全てモニター越しで行われ、時間制限すらあり、もちろん触れることすら許されない。それは面会しているとき魔女がお腹を空かせて理性を失い暴れても、面会人の安全を確保するため、仕方がない事なのかもしれないが、これじゃあ刑事ドラマとかでよくある犯罪者と面会するみたいで、何か嫌だなって思ったりする。

それに魔女が人間に戻す研究が行われているからといって、元に戻るとは限らない。魔女の寿命はまだ分からないが、下手したら死ぬまで一生、もしからたら魔女は寿命では死なず、永遠に人間に戻れない可能性だって否めない。その場合、政府に捕まった魔女は魔女収容所で一生を終えるに等しいことになる。魔女収容所の中である程度、自由が認められていても、やっぱり大切な人と直にふれあうことができないのは辛い。それなら魔女に治る方法が見つかるまで自由に人と同じように生きていたいと考えたくもなるだろう。まあ、わたしはどっちでも構わないのだが。だって親に捨てられちゃ

ったし。

なんで魔女になっちゃったのかなあ。

ばにらは自分の胸に手を当てた。何回やってもどくどくと当たり前になるはずの鼓動を感じられないし。体温もなく死んでいるように冷たい。

「はあ、やっぱり、わたしは魔女なんだよね」

こう匿われているとなぜだか分からないが、また魔女になる前に日々、人に戻ったような気がする。

なんて大げさなんだろうと思うが、心臓がないこと、体温がないこと、人を食べてしまったことが、今まで平々凡々だった現実を、自分にとってのフィクションのように曖昧で現実味のない物に変化し、遠く手を伸ばしても届かないような何万光年離れた場所にある、綺麗だなくと感嘆を漏らしていたフィクションが今、現実となっている。

わたしは、フィクション現実ではなく非現実リアルに、憧れているのだろうか。

ピンポーン。

「はいっ!？」

ばにらは急になった玄関のチャイムに驚き、声を挙げてしまった。玄関から宅配の男性がこれまた大きな声で話しかけてた。

「遠藤さん。宅配便です」

ばにらはしまったと狼狽えた。何で返事しちゃったんだろう。居留守使えばよかったのに。とさらに慌てふためく。

ばにらは取りあえず荷物を受け取る事にしよう。もう返事しなかったから居留守なんてできないし、印鑑はどこにあるか分からないけど、確かサインだけでもよかったはずだと軽い気持ちで、玄関へと向かい、鍵を開けて戸を開いた。

「はい……」

だが、外には誰も立っていないかった。

「いやー、こうも簡単に開けられちゃうとやりがいないですね」

突然、宅配の男性の声ではなく、高校生くらい女の子の声がした。

「……え？」

次の瞬間、戸のわずかな隙間から、部屋の中に缶の何か——バル〇ンと書かれた赤い缶が三つ投げ込まれた。

「っ!？」

ばにらは危険を感じ、とっさに戸を締め、鍵までして、姿形も見知らない敵の進入を防いだ。

「あゝあ。そんな密閉した部屋の中にいたら、バ〇サンの煙で喉とか目とかやられちゃいますよ？」

「えっ——」

バルサ〇を部屋の中に投げ込んだ女の子が忠告した。投げ込まれた三つの〇ルサンから、勢いよく吐き出される殺虫成分の煙が、徐々に部屋の中に充満していく。ばにらは煙を吸い込まないように息を止めて、殺虫剤が含まれた煙は目にしみるので目瞑ぶった。魔女は呼吸をしなくても生きていられる。ここはやり過ぎるのではないかとばにらは思った。

「いやー、すごいですね。人間がバ〇サンの煙の中でじっとして入れるなんて。魔女ならずと息を止めても大丈夫ですけどね」

このままこの煙の中に居続けたら魔女と思われてしまうっ!!

ばにらは目を開いて、戸の鍵を開き、四つん這いになりながら外に飛び出た。部屋の方を見ると、扉の間から火事みたいに白い煙が出てきていた。

「こういうのって簡単に引っかかるものなんですね。トイレやお風呂場の密閉した空間に逃げれば、別に部屋の中にずっと入れてもおかしいわけではないんですけど。やっぱり、焦っているからでしょうか？」

ばにらが顔を上げると、そこには自分と同じくらい年の女の子が鉄線で作った輪を持っている。その輪にはこれまた鉄線が一本、首

輪にリードをつけるように結んである。

「えいっ」

訳も分からずにばにらの首に鉄線の輪がくぐされた。

「えっ？ 何？ これ？」

「この階までブロックを持ってくるの大変だったんですよ？」

独り言のように女の子は呟き、マンションから、この町が一望できるほど開けた部屋の前の通りの落下防止の手すりの上に置いてある、なんの筈もないコンクリで出来た穴があいたお馴染みのブロックの所まで移動した。そのブロックには鉄線が結ばれてあり、その鉄線をたどると、途中、円上に束ねられたあと、ばにらの首の輪にながっていた。

「えっ！？」

このあと自分が何されるのか理解できた。

「このくらいなら切れますよね？ 失敗しても首の骨が折れて意識が飛ぶこと間違いないですし、どちらにせよ任務完了です」

その女の子はつらつら話し、落とす場所に人がいないかを確認して、

「下には誰もいないですね？」

「止め」

躊躇わず、押して、ブロックを落とした。

「さようなら。殺戮の魔女さん」

女の子は笑顔で見送った。

うたかたっ！ **M a s a k i A n g e** 9／18 16∴11（前書き）

誤字脱字などありましたら指摘お願いします。

「戻らなきゃ」

さっきまで僕は、ばにさんを部屋に残したまま、珠奈に外につれて、自分の部屋の前でばにさんを匿うか言い合っていたような気がするのだが、自分がいつの間にか逃げ出して、住宅地の中を見えないものから逃げるために、そこら中を走り回っていたらしい。珠奈と言い合っている内にトラウマの起爆スイッチに触れたのだらう。

僕はあたりを見渡して、自分の現在地の位置を確認する。自分の経やがるマンションから遠くの、ここ数年で新しく出来た住宅地を僕は走り回っていたらしい。見える範囲では主に一軒家の家と空き地がちらほらあるくらいで、閑静な住宅街と表現されて売られてそうだなと感じるくらいの静かな場所だった。ここの辺は偶に散歩するときに通るくらいで、あまり来ることがないため、大雑把にしか道が分からない。

取りあえず、歩こう。そうすれば、いつか分かる大きな通りにできるさ。そう思っ僕は歩きだした。

そういえば、なんで僕は珠奈から逃げ出したんだろう。

僕が魔女――――ばにさんを匿うといって、珠奈があんなに怒るとは思ひもなかった。見ず知らずの女の子を部屋の中に入れて、しかも自分の服を貸すなんて、どう考えても下心があると珠奈に勘違いされてもおかしくない。それに理由も語らないで察してくれだなんて、僕が珠奈の立場だったとしても、首を縦に振らないだろう。ちゃんと匿う理由を話せば納得してくれたに違いないが、僕は話せなかった。

「全部、僕が優柔不断なだけか……」

深淵よりも深く溜息を吐きたい気分だった。すべて自分が弱いせい。一字一句間違いがなく、そごも嘘も見栄もない。自分のトラウ

マ、過去、その全てを知られるのが怖いからだ。

そりゃフィクションの物語の主人公が、両親が死んだの隠すような、いくらでも美談にできるものだったら、誰かに知られても絶対に嫌われることもなく、寧ろ、優しく触れないでくれる。デメリツトに働かないことの方が多いじゃないか。

だが僕の場合は違う。そう格好つけて言うけれど、これと言っても特別なケースではない。僕と同じ立場の人には絶対に言えない立場の人なら、居ないようで、案外沢山いる。その人たちが同じ様に誰かに話したとしても、同情の欠片すらもらえない。避難され、罵倒され、陵辱され、晒されて、一生、べったりとレッテルを張られたまま、生きることになる。だから話すのが怖い。失いたくない。

話したところで何になるって言うんだ？ 話し相手になつてくれると言った百合子さんは、僕が犯したこと少なくとも三割くらいは、知っているはずだ。けれど、こちらとしてはたかが三割程で、僕が犯した業を知った気になっては困る。得意げに年上の優しいお姉さんぶられても、僕が腹割って話したところで、この話題に相手が合わせられるわけがないのだ。理解できるなら、その人も、僕と同じ腐った人間になることを暗示しているようなものだ。

……まあ、やってみないと分からないから、頭ごなしに否定できないけど。

でもやっぱり嫌だ。考えているだけで羞恥心で死にそうになってトラウマがまたぶり返し発狂したくなる。

やっぱり無理だって、

大好きな姉とセックスがしたくて、ザバトに姉を襲つてと頼んで、姉を魔女にし、姉が両親を無意識に殺して食べてしまい、心身共に弱っているときに、優しく励まして、その晩に姉が体を許した時に、近親相姦しましたなんて、口が裂けてもいえるわけがない。

もちろん、珠奈やばにらさんにも。

ほら、引いたでしょ？

全然、憂う気持ちもないでしょ？

何であんな事したんだろうかと思って、悔やんで、反省し、改心したといっても、もう二度としないと、心の底から謝罪し続けたとしても、許されるわけがないのだ。

体の片隅にきっちり刻み込まれて、無かった事にはされずに背負って生きなければならない。苦しみながら生きることが罰になるのだ。

そういう類の話を人に話し、あなたは辛い人生を送ってきたんだね、なんて親身に言ってくれるのは弁護士と同類くらいしかないだろう。

だから話せない。話せ話せとしつこく言われ、渋々、信賴して話したところで、事情をすべて聴いた後に、ポイツと手のひらを返され、避難する側に行くのだ。

それならまだ知らずに、お節介焼いてくれる方が何百倍もいい。自分の中の良心が許すならの話なのだが、これもこれで騙しているという罪悪感に潰されてしまいそうになる。

嫌になってきた。

お願いだから嫌わないでください。僕がばにさんを救うのは、僕が犯した、償うことができない罪を、できなくても償うものであって、くだらない下心は一切ない。そんな下心があるなら………
……、こんなことは考えたくないが、一番近くに居てくれた珠奈としたいと思う。それにばにさんに好かれたいなんてこれっぽっちも思っていない。だって、すでに僕は十分に好かれている。

………焦れったくするのは止めよう。淡泊に言えばいい。

僕は珠奈が好きだ。

姉より。もちろん、ばにらさん、百合子さんよりも。

誰よりも。

だけど珠奈が僕が姉と近親相姦したって知ったら、当たり前のように僕を嫌うだろう。

部屋に呼べるくらい仲良くなったのに、それに珠奈だって僕のことか……。

それを崩してしまうのが怖かった。告白してフラれるよりも、ずっとずっと怖かった。少なくとも、告白してフラれたとしても、ぎこちなくではあるが、明るい性格の彼女なら、会話くらいはしてくれるだろうし、何より僕は彼女を見ているだけで、僕は元気になれる。それに彼女が僕を嫌っているなら、仕方がないと割り切れる。

だが、もし僕の過去を知られてしまったら、汚らしい汚物を見る目で見られて、話しすらしてもらえないだろう。そんな事が起こってしまったら、僕は簡単に自殺するだろうな。ボタン一つで簡単に出来る、みたいに。

でも、もし、例えば、僕が過去を話しても、文句もいわずに嫌悪もせずに珠奈が受け入れてくれるなら。

辛かったよね。でももう耐えなくてもいいんだよ。あたしがそばにいてあげるからなんて言ってくれたら。

僕は絶対に珠奈の優しさ、愛情、いや全てに溺れてしまうだろう。姉の時よりも酷く、何も考えられなくなって、溺れているのに、もがくことすら忘れて、どんどんと――――。

「つて、僕は何考えているんだろう」

珠奈と恋人になりたい、珠奈にすべてを慰めてもらいたいという、甘えは何百回も夢想したことじゃないか。本当にそういう性的欲求は尽きないから困るなと自己嫌悪した。

僕が彼女に求めているのはそんなじゃない。ただ明く、楽しく、笑っていたい。それだけでいい。普通に愛し愛されたいだけなのだ。僕はどこまで歩いたのか、確かめてようとあたりを見渡した。

だが、周りの景色、家の柄、名字の札すら変わってない。つまり……。

「一步進んで、思慮に耽った……ってことか……はあ」

誰か僕を馬鹿じゃねえのと罵ってくれたら、少しくらいは改心すると思うんだが。さっきから自己嫌悪しまくりだな。

後ろからバイクが僕の方へ向かってくる音が聞こえた。僕は道路のど真ん中に突っ立っていて、流石に機動性優れたバイクでも通行の邪魔になるので、右の路肩へと小走りで避けた。

ところが近づいて来たバイクは僕の左隣に止まった。

「その人。ちょっと道、聞いてもいいか？」

バイクの運転手の男性は僕に道を訊いた。少し低い声とエンジン音が同時に聞こえた。僕はうなだれかけた体を声が聞こえた方に向かせる。運転手は二十代くらいの男性だった。敬語で答える。

「はい、いいですよ。なんですか？」

「この先は大通りに出るのか？」

この人は、どうやら道に迷っているらしい。

「たぶん出ると思いますよ。今、僕も道に迷っていて、とりあえず大通り目指そうとしていたところなんで」

「まあ、俺は大通りに出るわけではないから、出ても出なくともどっちでもいいんだ。ただ行き止まりだけは、面倒だから訊いたんだよ」

「はあ……」

だったら訊くなよと言いたくなる。バイクなんだから、行き止まりでもUターンしてくればいいだろうに。燃料代が無駄になるのかと自分の中で結論づけた。

「そうそう、もう一つ訊くの忘れてた」

……………あれ？

前にこういう風に鎌掛けられた記憶があるぞ？ しかも今日の記憶だ。何このデジャビュ？

というかあの政府機関は、魔女を匿っていると思われる奴を見つけた時は、そいつに鎌かけると教育しているのか？ この調子なら三度目もありそうだ。気が滅入ってくる。

僕は勇気を振り絞って、ではなく、投げやりに訊いた。

「もしかして、あなたも捕獲員ですか？」

一瞬、空気が凍ったような気がした。これは地雷踏んじやったかなと思って内心ビクビクしていた。

ある程度経ち、バイクの運転手は僕におそろおそろ訊いた。

「……もしかして、百合子にあったのか？」

「ええ。同じ様に話しかけてきましたよ」

あと、バイクに乗っている捕獲員の男性が、まさか、知らずに百合子と同じ手を使ってしまうなんて……………、と呟きながら、がっくりとうなだれ、自己嫌悪しているんですけど、慰めた方がいいのかな…………？

僕は狼狽えながらも捕獲員の男性に、鎌かけが一番効果的な方法ですつと、根も葉もないフォローをし、慰めてあげた。
本当は僕が慰められたいになーと溜息でそうになった。

うたかたっ！ **M a s a k i A n g e** 9／18 16∴15 (前書き)

誤字脱字などありましたら指摘お願いします。

「俺の名前は六乃鬼灯、今年で二十二歳だ」

「僕は遠藤雅樹です。十七歳で一般的な高校生です」

自己嫌悪していた鬼灯さんが復活したので、気を取り直してお互い簡潔な自己紹介をした。

「そうか年下か。なら気兼ねなくきけるな」

いや、聞けないことなんて沢山ありますよ？ 例えば——ごめんなさい。言いたくありません。察してください。

鬼灯さんは路肩にバイクを通行の邪魔にならないように止め、完全に話し込む気にいる。僕としてはこの捕獲員から一刻も早く逃げたいのにと泣きそうになっていた。だってこの人、僕のことを疑っているに決まっているじゃないか。

「この辺に魔女がいるって、たれ込みがあっただけど、そのような奴、知ってたり、見かけたりしてないか？」

「うーん、そんな女の人は、知りも見もしなかったです」

声が裏返ることなく、自然に発することができたので、ひとまず、セーフ。

「急に知らないかと訊かれても困るよな。まず一目で魔女だってわかりっこねえし」

「じゃあ訊かないでください」

堪え切れずに、突っ込んだじゃったよ。

「一応だよ。一応。形式上ってもんがあるんだよ」

本当にあるの？ それ？

僕がどこか胡散臭そうだなと、訝しげに鬼灯さんを睨んでいたら、鬼灯さんは訊いてきた。

「なあ、お前は魔女についてどう思う？」

「それはどういふことですか？」

「ああ、そうだな、特に深くは考えなくていいぞ。どう答えてもいい

い、殺したい程憎んでるって言ったとしても、愛したいくらい助けたいと言っとしても、俺はお前が魔女を匿っているんじゃないかとか、そんな無粋な推測っていうか、妄想と言った方がいいか？ まあ、ただ魔女について、どんな風に他の連中はどう思っているのか、個人的に訊きたいだけだ。ほら、学校の授業改善アンケートみたいなものと思ってくれ。成績には関係ありませんから、好き勝手感じたこと書いてくださいってヤツみたいに」

「あれって、成績に関係ないアンケートって、謳っている癖に名前を記入しなければいけないくて、先生の目を気にして好き勝手書けずに、無難なことしか書けなくなる縛りがあるから、アンケートとして成り立ってないと思いますよ。無記名でも筆跡でばれるし」

「そういう事じゃなくてな、俺が質問しているのは、答えたくないなら答えないでいいという、選択肢もあるんだってことを言いたかったんだが、例え間違えたか。俺としては無難に嘘を返されても、こちらの為にならんし。そもそも、答えたくない、も十分な答えだからな」

「……」

うわ何キザっぽいこと言っちゃってんの、とは思わなかったことにして、僕はゆっくりと答えた。

「魔女について、ですか。僕は魔女は可哀想な存在だと思います」
「ほう」

「魔女はなりたくなかった訳じゃないのに、知らぬ間に魔女になっちゃって、両親とか兄弟姉妹とか、身近な大切な人知らない間に、殺して食べちゃって、自分の意志で悪いことしてなんて一切してないのに、犯罪者のように捕獲員に追われてたりするし、世間からも冷たい目で見られる。そう考えるだけでも、十分、可哀想だと僕は思う」

「確かにそうかもしれないな。それからもう一つ訊いていいか？ もし、目の前に魔女がいたら、匿うか？ それとも、捕獲員や政府、国に突き出すか？」

鬼灯さんがいきなり直接的な事を訊いてきて、僕は少し悩みながらはつきりと答えた。

「僕は……たぶん匿うと思います。理由は………言えませんが」

「そうか。てっきりエロいことしたいからとか言うと思ったんだが」
てめえ、人が真面目に答えてるのにボケるとは、流石にはっ倒すぞ、とか微塵にも思わなかったことにした。表情は流石にひきつったが。

鬼灯さんは、楽しそうに笑みを浮かべ、ヘルメット被りバイクに跨った。どうやら、僕との会話を打ち切って魔女を捜しに行くらしい。

「答えてくれてありがとうな。ちなみに俺は、魔女は職業がてら居なくなつて欲しくない。最後のは、魔女になったヤツが大切な人だつたら匿う。だな」

「うわー。なんて自己中心的な回答」

魔女云々の問題じゃないじゃん。しかも一個目は答えられているのか怪しいし。

「だろ？」

素晴らしい自信満々に言いのかた鬼灯さんは、バイクはエンジンをかける。

「あと、今度ここで魔女が居るつてなつたら、真っ先にお前疑うから、住所教えて」

「嫌です。というか、捕獲員なら、それくらい政府の権力でいくらでもどうにかできますよね？」

「それは面倒くさいんだよ。書類を書かなきゃいけないしな。じゃあな」

鬼灯さんは別れの挨拶をし、バイクを走らせ、すぐにUターンし、元来た道に向かつて行ってしまった。この先が行き止まりかどうかを確認せずに元来た道を行ってしまった。………僕に道を訊いた意味ないじゃん。なんか、少しだけ悲しくなった。

どんどんと小さくなっていく姿を見送りながらふと思った。

「なんで僕は話しかけられたんだろ？　ていうか、今回は見逃されたのか」

一人残された僕はなんだかなーと、目的である大通りを目指しながら何で鬼灯さんは、僕に話しかけたのか考えていた。

「ああそうか」

僕はわかった。

「魔女を置いて家から出ることってまずしないよな」

鎌かけはたぶん形式上のものだったとして、家に一人魔女を置いて出るなんて、人を食べないように飼い慣らされたライオンの檻に鍵をかけないでいるのと同じじゃないか。飼い慣らされているとはいえ、勝手に出て行って、他の人を襲っちゃったらそれこそ一大事だ。

……………って僕もかなり不味いんじゃないか？　そういえば珠奈も一緒にいる……のかな……？

僕はばにらさんと珠奈（たぶん）が待つマイホームへ目指すべく、全速力で第一のチェックポイント、大通りへを探しに走っていった。

うたかたっ！ **S t r i g a A n g l e 9 / 1 8 1 6 ∴ 3 7 (前書き)**

誤字脱字などありましたら指摘お願いします。

相変わらずの魔女草ストライガの二人組は、勝手にヒッチハイクして乗り込んだマスコミのワゴンから目的地の周辺で、勝手に止めて降りたのだった。

「真っ逆さま（滅）やっとうきましたね」

「おい、くらら。お前はうちにどんな恨みがあるんだよ？」

ジト目で睨む真っ逆様にくららは、

「ノリで恨んでますっ！」

きらきらとしたり顔で言い放つ。

「したり顔で言われてもな」

飽きれ顔でくららを横目に見ながら、真っ逆さまは辺りを見渡した。閑静な住宅街で、建っている家がどれもこれも新しいので、新しく出来た団地なんだなと感じた。魔女がこの辺りを彷徨いていると言われているせいで全く人通りがない。

「こちら辺に魔女が匿われているマンションがあるのか？」

「いえ、あっちの方ですよ」

くららがその方角へ指を指す。真っ逆さまはその方向を見たが家で阻まれマンションの形すら見えなかった。

「あとどれくらいの距離だ？」

「んー、直線上だと、五キロあるないかだと思いますよ。うげっ、その周りに捕獲員がいるじゃないですかっ！ ていうか、今逃げる真っ最中だしっ！ あと政府の魔女とかも居ますね……、踏んだり蹴ったりになりそうな予感がします……」

くららが憂鬱そうに言い、真っ逆さまが舌打ちをする。

「チッ。じゃあ早くしないと。車盗ってもあとが面倒だから、走って行くぞ」

「はい………ん？」

くららの表情が急に陰しくなる。何かに気づいたようだ。

相方の異変に気づいた真っ逆さまは訊く。

「どうした？ 何かあったか？」

くらは暗い表情のまま言った。

「残念なお知らせがあるんですが、いいですか？」

「まさか、匿われていた方の魔女が捕獲員に捕まったか？」

「いいえ。そちらはまだ大丈夫です」

「じゃあ、なんだよ？」

さっさと言えと急かす。

くらは口を開いた。

「たった今、サバドが魔女を生んだんですよ」

魔女がもう一人増えた。

うたかたっ！ **M a s a k i A n g l e 9 / 1 8 1 6 ∴ 2 8 (前書き)**

誤字脱字などありましたら指摘お願いします。

やっと僕の目の前には、愛しのマンションがまるで僕を迎えるようにそびえ立っている。ようやく僕はここまで戻ってくる事ができた。

そういえば携帯電話という、かなり便利な機械があるのだから、それを使えばよかったじゃないかと、彷徨っている内に大通りにたどり着いてから気づいたのだった。さっそく携帯を出し、電源を入れようとしたが、残念なことに電池が切れていた。日頃から携帯なんて使わないのが今ここで仇となった。どうせ大通りに出れたから必要なかったんだけどね。

そうして、ここまで着いたのだった。

早く自分の部屋の中の現状を確認しなければと、僕は車が何台か停めてある駐車場を抜け、正面の玄関へと向かう。ここからは七階の自分の部屋が見えるのだが、その手前には流石に珠奈はいなかった。部屋の中で待っているのだろう。

そう言えば、僕は珠奈の前から逃げたんだ……。トラウマだから仕方がないんだ、なんて言えるわけない。珠奈になんていったら良いのかわからなかった。もういい。悩んでも仕方がない。この際、僕の過去を言ってしまうおう。そして、告白もしよう。それでも嫌といわれるならしかたがない。ただ、誤解だけを解くことができれば―――なんて考えていた矢先に。

ガサッ。

マンションの周りに植えられている木の茂みの陰から何か物音がした。きつと犬か猫だろうと、いつもなら思っただろう。

その茂みから、二人分の足が見えた。合計四本。片方は靴を履いていて、もう片方は靴を履いていない。裸足だ。

僕はさっきまで何かを咀嚼し、呑み込んだ、口元を真っ赤に染めた彼女――魔女に声をかけた。なぜか首には針金で作られた首輪をしている。

「ン？」

背を向けていた彼女は僕の方に振り返ってとぼけるように、僕をおいしそうに見つめてた。その視線は冷たく、恐怖を植え付けるんじゃないかと感じるくらい、おぞましかった。

「……」

彼女はもう一度、今まで食べていた物を見た。そして、嘆息。

「また、やっちゃった……」

食べていた物、まだ中学生か高校生くらい年で、くせつ毛の幼い顔立ち女の子だった。表情は瞼をぎゅっとつぶって痛みに耐えて絶命したせいか苦しそうなまま固まり、目の回りは涙の跡が残って、口はあーんと開いていた。きっと叫ばれないように口に手をつき込まれていたのだろう。その女の子は上半身は服を破られて、その服の下に隠されている女性特有のふくよかな胸がある一帯の皮膚は、全て梱包を剥がすように剥がされ、次に存在する、肺や心臓を守る肋骨は、食べやすいようにへし折られ、そこら辺に無造作に転がっていた。そこに詰まっているはずの肺、気管、心臓、食道、胃、あとは黒ずんでいて分からないが、普通の人間にとって大事な部分はなくなくなって空っぽになり、その器を注いだように血のダムが出来ている。その下の腸など器官は、これから食べようとしていたため、手を着けておらず、そのダムに濃いトマトスープ浮かぶの具のように浸かっていた。

なくなった部分は、

「……………けぷっ」

彼女が全部、美味しく、頂いちゃいました。

僕は血塗れのばにらさんを部屋に連れ戻さずに、その場からばにらさんと共に逃げることにした。

もうどこに逃げる場所なんて在りもしないのに。

うたかたっ！ **K a z u r a A n g l e 9 / 1 8 1 6 ∴ 4 0 (前書き)**

誤字脱字などありましたら指摘お願いします。

背の高い目つきのキツい女性、政府の魔女こと、ふきと中学生くらしいの幼い顔立ちの男の子、能力者の葛が話している。

そんな二人は、葛とふきは一人の少女の死体前でだべっていた。

遠藤雅樹という今回のターゲットがここのマンションに住んでるから、接触ぐらいはする予定で来たのだったのだが、マンションの入り口を探していた時、この捕獲員の少女が喰い殺されて放置されているのを葛が発見したのだった。

葛が少女の死体を指で突っついて、楽しそうに観察している姿を見て、ふきは嫌そうに目をそらし、胸ポケットに入れていた煙草を取り出して口にくわえて、ずっとだべっていた。

「やっとなんてなってきたね？」

「どこがだ。死人が出ている時点で俺様は萎えるな」

「何言ってるのさ。こういうのは一人二人、死んだ方が面白いに決まっているのに」

「その考えはあぶねーと思うぞ？」

「いいや、正しいよ。全くの正論さ。誰も死なない推理小説なんてつまらないよね？ ノックスの方だっけ？ それともヴァン・ダインの方かな？ 確かそんな感じの規則があったよ。それと同じさ」

「それはあくまでフィクションの話であってだな――」

「そこなんだよ。そこが面白くない。わざわざフィクションと現実って壁を作っちゃっているから、現実面白くないんだよ。いや、箱に例えた方がいいかな？ 現実の箱には、つまらない物が詰まっていて、合理的で人畜無害な物ばかりだからね。対局するフィクションの箱には、現実の箱に入れない面白い物が捨てられるんだ。面白い物は有害であり、被害が及ぶものでもあるから求めないし、取り入れるとしても副作用の少ないものしか取り入れない。あとは無理だと決めつけている固定概念もあるね」

ふきの頭の上にクエスチョンマークが浮かぶ。葛がうーんと考えて言う。

「うーん、簡単言えば、宇宙について研究するって壮大でロマンがあるけど、ぶっちゃけお金も時間かかるんだよねー。スペースシャトル打ち上げるのもお金掛かるし、打ち上げ失敗したら乗ってた優秀な人材も死んじゃうかもしれない。ぶっちゃけ見合った分返ってくるわけでもないから、この分のお金と時間と人材を別なもつと確実に利益になる仕事に回した方が効率的にいい。よし、止めてしまおう。ってこと。これは心底つまらないでしょ？」

代わりに莫大な利益がある人工衛星打ち上げるってのもあるねと付け足す。

「確かに……つまらないな」

「でしょ？ だから僕は強制的に面白くするんだ」

胡散臭そうな話になってきたと、ふきはいつものように聞き流す体制になる。

「どうやって？」

「誰かのエゴを使うんだよ。合理的に損得の判断をしないで私利私欲的に物事を進めてくれる。それも僕好みの面白い方向にね。それを僕は操る。というよりは、みんな同じ方向に並べて、誰か一人を最後に押し倒すんだ。あとは皆勝手にドミノ倒しみたいに倒れていく。それを傍観するのが楽しいんだ」

「へえー。わっけわからね。で、これからどうすんだよ？」

話題飽き、次に何するのか不機嫌そうにふきが訊く。

「んー。ストライガ魔女草の魔女たちもやっそこっちに來たみたいだし、これからの下準備も終わった。仕事の方はターゲットは殺せなかった、ということとで終わらせて、あとはこの顛末でも傍観していますか」

「……何のためにここまできたんだよ……。俺様は……」

ふきは疲れ果てたようにうなだれる。そんなふきを氣遣いなどしない葛は言う。

「一旦ここから立ち去るよ。機関の回収班がこの子を回収しに來る

からね。はち合わせたら面倒だ」

「分かったよ」

葛は立ち上がり、すたすたとその場から立ち去っていく。その後ろをふきが着いていった。

「ところで、傍観って、そんなに面白いのか？ 俺様は、見てるよりは、やる方が面白いと思うぞ？」

「傍観だって面白いよ？ それにふきが言っているのは全く違うことだよ」

「どういう意味だ？ それ？」

「どちらも全く別物あって、ふきが訊いたのは、極端に例えると蟻と鯨を比べてどちらが空高く羽ばたいて飛べるか訊いているのと同じだよ。つまり、どちらも面白いんだけど、全く別の楽しみ方なのだよ」

うたかたっ！ **H o u z i k i A n g l e 9 / 1 8 1 6 : : 4 7 (前書き)**

誤字脱字などありましたら指摘お願いします。

急に百合子からメールで呼び出され、魔女を捜して走って回っていた鬼灯は、進路換え、百合子のメールに添付してあった地図の場所に向かった。

そこにはマンションがあった。確かこならが回るといていたマンションだ。

そこに着いて、愕然とした。

「……………なんだよ、これ」

そこには、こならが仰向け、片目を抉り取られ、無惨にもぱっくりと開かれて中を喰い荒らされて、放置されていた。

もちろん、息などしているわけがない。

「私は、こならちゃんが生きている間、と言っても最後のとどめの時に丁度、ここに着いたんだけどね。その時に近くにいたから、私の能力で、脳死にはなっていないわ。でもこれでは——死んでいくに等しいわね」

百合子はたんたんと言っていた。

百合子の能力は、ひとことで言えば維持。百合子の近くにいれば生きた細胞は機能を失うことなくそのままの状態で保存され、固定される。つまり、栄養や酸素を失ってもそのままの状態で保たれる能力だ。生きている細胞なら、その形のまま、劣化することも、成長することも、活動することも、老いることも、朽ちることもなく、そのままの状態で保たれる。

捕獲員として百合子はこの能力を使い、魔女に切り落とされた捕獲員や警察、一般市民の腕や足の細胞を保存、固定することで、切り落とされた部位は常温だろうが何だろうが、腐ることなく、いつでも手術で繋げる状態で保ち、損傷の被害を押さえることに使われ、捕獲員の治療係としている。

だが、今のこならの状態では、固定もなにもなかった。

「……お前は助けなかったのか？」

鬼灯は百合子に力なく訊いた。

「ここについた時に、丁度とどめを刺されたって言ったでしょ？」

助けようにも、曲りなりにも、私より強いのならちゃんを殺した魔女に、一人で立ち向かうなんて無駄死にもいいところよ。その前に、鬼灯君こそなんでここに来なかったの？　そもそも、あなたたちまで二手に分かれているのよ？」

「それはこならが分かれて探そうって、提案してきたんだ。それに連絡もなしに、ここまでに駆けつけられないだろ……」

百合子はおかしいわねと言う。

「連絡もなし？　私にはちゃんと魔女を見つけましたので、回収班を呼んでくださいって、メールが来たわよ？　一人じゃないわよね？　って返信したら、隣に先輩がいるんで大丈夫ですよって、返ってきたわよ」

「……」

百合子はため息をついて、横たわっているのならに近づき、しゃがんで、こならの頭を撫でた。

「本当にこの子は馬鹿ね。鬼灯君に怪我させたくないからって、一人で魔女に向かって行って、返り討ちにされちゃうなんて」

「……」

ずっと鬼灯は黙ったままだった。

「私はこの不祥事を機関に報告してくるわ。鬼灯君はこならちゃんを襲った魔女を連れていった男の子がいるから、その子と魔女を追っかけて行って。名前は遠藤雅樹君。今日、わたしが電話で言ってた子よ。写真があればいいんだけど」

「……………そいつなら知っている」

さつき会ったと簡潔に説明する。

「そう。ならあとは任せたわよ」

そういう百合子はこの不祥事を報告するのと、鬼灯の為に自分の能力が届くぎりぎりの範囲まで離れようとしたが、思い出したよう

に言った。

「一つだけ、鬼灯君に謝らないといけないことがあるの」
百合子が立ち止まって鬼灯の方に向かい合った。

「私、前に、こならちゃんに鬼灯君に告白したいんですけど、どうすればいいか訊かれたことがあったの。その時、私は面白い事になりそうだった茶化してその場は終わったんだけど、こんな事があるなら素直に手伝ってあげればよかったなーって」

「……お前、俺に謝ってないぞ」

「気づかない鈍感なフリをしていた鬼灯君も悪い。それにこれは、お相こよ」

「……責めないのか？」

「何を？ 責めることなんて一つもないわよ？ 少なくとも私からはね」

「……いい百合子は報告しに行った。」

「……………全とお見通し、か」

鬼灯はこならの横にゆっくりと腰を下ろした。

「お前、本当に馬鹿だよな。ちゃんと連絡しろって言ってやったのに」

着ていたジャケットを脱ぎ、こならのぱっくりと開いた胸を隠すようにかけてやる。

「もうお前が後ろに乗らないのか……………」

鬼灯はこならの顔にふれる。もう冷たくなっていたが、まだ皮膚は柔らかい。

「ごめんな。俺は……………」

何分かその場にしゃがんでいた鬼灯は、ゆっくりと立ち上がった。

「じゃあ、お前の敵討ち行ってくる」

「……いい、鬼灯は止めていたバイクの方へと歩き出す。」

けたたましくエンジンをふかし、バイクは飛び出していった。

鬼灯の後ろの席は、空いたままだった。

うたかたっ！ **M a s a k i A n g e** 9／18 16∴54（前書き）

誤字脱字などありましたら指摘お願いします。

ばにらさんに僕のあとに着いてくるようにいった。ばにらさんは、うん、と頷き、人を食べた後にもかかわらず、平然と何もなかったかのように僕に着いてくる。

ここから早く逃げなくては。この言葉が僕の頭の中に浮かぶ。

この場所に居続けたら捕獲員がばにらさんを捕まえに来るという焦燥感が、僕の体を逃げ場ない逃走へと走らせる。

捕まったらといって殺される訳ではないし、まだ分からない事が多い魔女の体の生理的機能を調べるため、生きたまま解剖という非倫理的なことを他の機関、国民が許すわけがない。だから、捕まっても安心。といううたい文句がある。

でも、魔女たちは、出頭しない。

魔女が自ら政府の機関に出頭するのは極僅からしいとニュースやゴシップ紙で書いてある。その理由として、ニュースでは、まだ元の人に戻る方法がないのにその魔女から人へと戻る方法が研究、確立するまで隔離されるのが嫌で、出頭したくないではといい、一方のゴシップ紙では、国は人体実験をしていないと覆い隠し、実際は、魔女を使って人体実験がされているのではないかと、高校生の間で噂になっているからだといい、例をあげるときりがない程、様々な理由が上がっている。

出頭しない理由なんて、魔女それぞれ、それこそ十人十色な考えがあり、一概にコレと指さすように決めつける事は出来ないだろう。だが、僕の後ろに着いてきている、ばにらさんは捕まってはならないと思う。

それは、ばにらさんが特別なのではなく、ばにらさんが捕まったら、僕が僕自身にかけた、魔術的でも、科学的でも、何でもないただの呪いが僕を殺すからだ。ほらまたなぶって見捨てた、とせせら笑いながら僕を殺してくる。それから逃げたいから、怯えながら必

死に走って逃げているのだ。

それだけでは僕のエゴのためにやっている偽善じゃないかと言われれば、返す言葉もないが、ばにらさんが捕まることによって魔女たちにとっても悪いことが一つある。

僕が思うにばにらさんは、ここ一帯の事件の犯人である可能性が高く、襲った人の数は、少なくとも六人以上。これが意味するのは、魔女は無意識に人を襲っていたから、魔女自身に罪はないという、人を殺して食べてしまったことのある魔女を刑罰から救っていた命綱を切られる可能性があるのだ。

魔女は選んで人を食べたのではないか、人を食えること快楽を得ていたのではないか、だから、刑罰を与えるべきだと被害者の遺族たちが団結して交渉する反論の事例として使われてしまう。

だから、捕まってはいけない。僕のエゴの為にも。他の魔女たちの為にも。

「ばにらさん、なんで、あの子を食べたの？」

走り息を切らしながら僕は後ろについてきているはずのばにらさんに訊く。

「宅配屋さんだと思って、扉を開けたら、男の人の声がしたのにあの子が立っていて、部屋に置いておくタイプの殺虫剤を部屋の中に投げ込まれて、ここまま部屋の中にいたら魔女だってばれちゃうと思うって、部屋の外に出たら、あの子が鉄線でわたしの首を切ろうとしたから……………食べたんだと思う」

ばにらさんはしどろもどろになりながらも話してくれた。

ばにらさんの能力は筋力強化系と推測した。七階の僕の部屋から捕獲員の女の子を手すりの上まで持ち上げ、地面まで一緒落ち、手の力だけで解体したのだから、筋力強化系の能力じゃないと、そんな離れ技ができるわけがない。

あともう一つ、ばにらさんが危険にさらされると、空腹時と同じように無意識で、自分を狙う危険因子を襲う自動的な能力もあると

思われる。つまりばにさんはお腹が空いていなくても、人だけを襲うことがあることになる。

自分を襲う者、天敵が少ない魔女の首を刈り取る捕獲員のことだ。僕は返事を返すことなく走ることに専念した。なんて返せばいいのかそれこそわからなかった。

ばにさんが呟く。

「やっぱり、わたしは生きてちゃいけないのかな……」

そんなことはない。

と、言うことなく僕は何も返すことが出来なかった。僕も同じ様な物だったから言える立場ではなかった。

生きなきゃいけないとか、死んだ方がいいとか、そんなの、

どっちだって、同じくらいそうであって、どっちも、同じくらいそうではないんだよ。

しばらく住宅地の中を走っていると前方から誰かが歩いてくる。僕は焦った。ばにさんの血に染まった格好を見られたら、間違いなく魔女だと通報されてしまう。

僕はばにさんを電柱の陰に隠れさせて、目を凝らしてその人を行動を観察する。どこかの角で曲がってくれと。

その人が近づくにつれて、僕はその姿、服装に見覚えがあった。

「……………珠奈？」

前からふらふらと歩いてきたのは珠奈だった。何故かさっきまで着ていた服ではなく、着替えていたようで、

見知っている人だとほっとし、ばにさんが電柱の陰から出てくる。

だが、珠奈の様子がおかしかった。

薄気味悪い笑みを浮かべながら珠奈は、僕だけをなめ回すように見つめていた。

「あはっ、雅樹だあゝ」

妙に媚びたような声色で、僕に話しかけてきた。

「どうしたんだよ……急に」

僕は戸惑いながらも、一刻も早くここから、遠くに逃げ出さなければ行けないことを伝えようとした。

「珠奈、今——」

僕が内容話す前に、珠奈は急に僕に抱きついていた。

なぜか僕の胸に顔を押しつけて、必死に匂い嗅いでいる。

「っ!？」

「えへへへへへ、いい匂い♪」

「急に何してんだよっ!」

僕は抱きついていた珠奈を引き離し、今どれだけ危険な状態かを説明しようした時には、もう遅かったことに気づいた。

遠くからこちらに近づいてくる、あの捕獲員が乗っているバイクの音が聞こえた。

「っ!？　ばにらさ——」

僕の口は真知の手によって閉じられてしまった。

「だあゝめ。あんなゴミと話を聞しちゃあ」

僕は目だけで、ばにらさんを探した。ばにらさんはこの奇々怪々な状況に、自分は一体、何をすればいいのか、分からずただその場でおろおろしている。

ばにらさんだけでも逃がさなければ。僕は一人で逃げて、と言うおうとしたが、珠奈に邪魔されてしまう。

バイクの音が大きくなってくる。近づいてくる。

ばにらさんが言った。

「あのっ、」

ぐちゃっ。

潰れた音がした。

「「へ？」」

急に聞こえた何かに刺さった様な音に、僕と珠奈は何があったのか、どうしてそんな音がしたのか、分からず——分かっていただけれど、信じられなくて、疑問の声を漏らした。

「……………痛イナア？」

目の前では、にたあと楽しそうに笑い、背中に手を回し、投げつけられて、釘抜きの方から刺さり、体に埋まった金槌を引き抜き、道路に捨てたばにらは、

「お前か……………」

今まで乗っていたバイクを止めて、もう一つ金槌を取り出しながら、怒気と憎悪を込めた深海よりも暗い視線で相手を睨む鬼灯さんは、

「ネエ、アナタ？」

「お前さあ」

「食ベテイイカシラ？」 「殺していいか？」

と二人同時に言った。

そう尋ねあった瞬間、

二人は殺し合いを始めた。

鬼灯さんの金槌がばにさんの体めがけて振り下ろすが、ばにさんは右横に飛んで攻撃をかわし、鬼灯さんの体、めがけ手刀を突き刺そうとする。

鬼灯さんは左手でばにさんの手刀をつかんで止めた。ばにらさ

んはこのままだとまた金槌を振り下ろされると思ったのだろう、後ろに飛び距離を取った。

二人は笑っていた。楽しそうに、嬉しそうに。

僕は狂っていると素直に思った。

一番の異端者^{キチガイ}はこの僕なのに、そう直感した。

「雅樹、ここにいると危ないから、別なところで話そ」

僕は腕を珠奈に捕まれ、引っ張られるまま、この戦場から逃げる
ことが出来た。

ひとくいっ! **T a m a n a A n g l e** (前書き)

誤字脱字などありましたら指摘お願いします。

ひとくいっ！ T a m a n a A n g l e

私は彼の隣を守りたかった、それだけだったのかもしれませんが。確かに好きという感情はありましたし、ずっと一緒にいれたらどんなに幸せなんだろうなーと考えに耽ったこともありました。

でも、それは本当は彼の隣にいればなんとなく安心する、勉強とかややこしいこととか、面倒くさいものから離れることができる、そんな漠然とした都合の良い想いなのでしょう。

奇跡も運命もロマンチックも何もない、ただ偶然出会っただけ。それだけなのです。

その中で私はそれ以上を求めてしまっていたのです。それが私の間違いであり、一つの悔いでもあります。

一から六の六面のサイコロではどんなに頑張っても十の目はできないように、無いものを、あると理想を押しつけ、それが出てきてくれる、奇跡が起これると思っていたのです。

それを私は、決して信じてはいませんでした。

信じるも何も、はじめから絶対に起こると仮定していたのです。

蛇口を捻れば水が出るように、それが当たり前だと思っていたのです。

蛇口から水が出てきてほしいと信じるのは馬鹿げていると言わんばかりに。

そんなことを信じている人も近くにいるとは知らずに。

その勘違いに気づければ、こんな終わり方にはならなかったでしょう。

彼が泣くことは無かったでしょう。

苦しむことも無かったでしょう。

それでも、こうやって終わるしかなかったのです。

奇跡は起こらないのです。

すべては偶然なのです。

偶然、そうなった、だけなのです。

運が悪かった、それだけなのです。

それを奇跡とは、私は呼びたくないのです。

ひとくいっ! **S t r i g a A n g l e 9 / 1 8 1 7 : : 0 4 (前書き)**

誤字脱字などありましたら指摘お願いします。

「ちっ、一足遅かったか」

真っ逆様は苦虫をつぶしたようなしかめっ面で、目的地にしていたマンションを見上げる。くららが言うには、この場所にはもう、魔女、捕獲員の気配はすでになく、立ち去っていったらしい。

「まだ近くにいるみたいです。早く行きましょう」

くららは真っ逆様に早口で言った。真っ逆様も、ああと返事し、追いかける捕獲員から逃げるべく、この場所から離れた魔女を追う。

「おっ、魔女草の連中が来たぞ？ 葛？」

「うーん。ちょっと待って、今いいところだから」

そのもつとも会いたくないと言っていた奴の声がした方に、真っ逆様とくららはゆっくり振り返った。

「……………政府の魔女」

真っ逆様が唸りながらふきを睨んだ。くららは真っ逆様の後ろに隠れて顔だけ出して、その最悪とも言われている二人組を凝視していた。

くららが訊いた。

「わたくしの能力ではあなた方の気配は遠くにあるように感じるのですが……どういことですか？」

ふきの隣にいた葛が答える。

「それは僕的能力だよ。詳しくは教えないけどね。それにしても君は魔女なのに僕と同じ探索系の能力ってのは珍しいよね。君が捕獲員に捕まらないで、ストライガ魔女草に入ったのは僕としては嬉しいかぎりなんだよ。これからの物語には欠かせないものになってくるに違いない」

そういうわれくららは葛を睨む。

「……それはどういった意味ですか？」

くららが聞き返し、葛が言った。

「ああ、とくに意味はないよ。でも、理由はある。それはね、娯楽の為にやっているのさ。そういうと誰かが、なんて無益なことの為に人を玩具みたい言いやがってとか文句を言うけど、それはお門違いだと僕は思うけどね。君はどう思う？」

真っ逆様の後ろから出て、くららは淡々と言う。

「わたくしに訊かれても困ります。貴方を論破するために食ってかかるために訊いたわけでもないの、なんと答えたところでわたくしにとっては別にどうでもいいことなんですよ」

「ふーん、てっきり、僕らが魔^{ストライガ}女草を潰しくるだろうから、その相手の戦力の情報でも引きだそうとするんじゃないかな〜と考えただけど、見当違いだったみたいだね」

「そんなの、潰れるときは何やっても潰れるんですから、訊こうが訊くまいが、どうってこともないです。それに貴方が言うことなんて信用しないと決めていますから」

「それは名案だ。そうした方がいいよ」

「そもそもわたくしたちが貴方たち勝てる勝算なんて一つもないんですから」

「確かに——ん？」

一瞬葛が嫌な顔をした。

「ちょっと待って。ふき、こいつら殺して」

葛がふきにレストランでお水をもらう様な気軽な感じで、頼んだ。

「いきなりだな。いいけどよ」

ふきは躊躇いなく実行する。

ふきは右手を真っ逆様とくららに向けて振った。

すると二人はあっけなく首を切られた。

重力に従って首と胴体が地面に落ちていく。

ふきが訝しげにたった今、自らの魔女としての能力で作り上げた死体たちを不思議そうに睨みつけ、どう観察しても頭にピンと来なかったのか葛に訊いた。

「おい、こいつらあの魔女の幻影だったのか？ それとも仲間割れでもして、同族殺したのか？」

葛は感心するように言った。

「途中から道化の魔女が能力使っていたみたいだね。僕らと討論して足止めさせようとしたみたいだ。僕が騙されるくらいだから、相当すごいと思うよ」

「お前を一瞬でも騙せるってすげーな。で、その能力使っているヤツが近くに居なくても、能力として機能できるのか？」

「今の十分機能している所を見ただろ？ だから機能したってことだよ。昔の道化の魔女の能力は一人だけに幻覚を見せるものだったからね。まさか、二人同時に同じ幻覚を見せてくるとは思いもしなかったよ」

「同時同じもの見せるって簡単にできねえのか？ ほら片方だけにあたかも二人同時に見せてますよみたいに幻覚を見せるってな感じで」

「できないっていうか、そのやり方もできるんだけど、敢えて実用には難しい方を使ってきたんだよ。この場合、一人だけを騙すのは騙せないと同じことだよ」

ふきは理解できないのか不満そうにする。

「答えになってねえぞ」

「道化の魔女の今の力量では、相手一人しか完全な幻覚を見せられないんだよ。五感のすべてのコントロールをするのは、一人だけでも十分難しいからね。それに僕らは二人組だから、ふきが言ったとおり一人があたかも二人とも、幻覚にかかっているように見せられても、もう一人は相方が、幻覚で使い物にならなくなっているって気づくでしょ？ その時点で、道化の魔女の勝ち目なんてないよ。だから二人、同時に完全な幻覚を見せるよりは、それよりも簡単な

二人同時に同じ物を見せ聴かせる、聴覚と視覚だけを操ったわけ。これだと気づかれるから、僕はやってこないと腹くくっていたんだよ。実際はまんまと裏をかかれて、引かなかった」

「うーん、そうなのか」

「それと僕がふきに、こいつらを殺してと言ったのは、これが幻覚かどうか確かめるためなんだ。実際よく分かったらなかったし、触ろうとしても離れようとするようにしてあるだろうね。こいつら、ふきの能力を椿と同じと考えているから、ふきが能力を使えば、なんでも首が切れて死んでしまう、なんてボロが出てくるんだよ」

「誰があんな首切り飛蝗と同じ能力かっての」

「そんなこと言わないでよ。仮にふきが駄目だったら椿にこの仕事を頼もうかって考えていたんだから。それよりも、最初から逃がしてあげる算段だったのに、なんで逃げたのかなあ？」

「それだけお前と俺様が嫌われているってことだろ？」

ああそうかもと葛は言ってニヤリと笑みを浮かべた。

葛がべらべらと説明している間、このマンションの住民らしき男性が葛の目の前を通過した。そして、突っ立て話している葛を見て、

「――頭、大丈夫か？ この子？」

一人でぶつぶつ言っている葛を気味悪そうに横目で見て、関係ないと装いながら通過していった。

ちなみに真っ逆さまの能力は、相手の五感すべてを別な情報に置き換えるものだが、真っ逆さま自身が近く居なければこの状況みたいな複雑な事は出来ない。いや、近くにいても出来やしない。その複雑な状況の例としては、二人同時に同じものを同じ空間に居るように見せたりすることだ。

その様な二人の意識をシンクロさせるには、一人の脳が右足を動かそうとした場合、その脳から出た指示、信号を真っ逆さまが感知し、もう一人の視覚にそう動かしただように見えた情報を置き換えなければならぬ。そうする場合、その二人の脳の信号を感知するため、必然的に近くに居なければならぬのだ。そうしなければタイムラグが発生し、うまく機能しなくなる。コンピュータの様に一回打ち込めば、後は自動でやってくれるものではないし、打ち込んだ膨大な数の指示をそっくりそのまま覚え、そのままやってもらっても後々困る。こんなの、逃げる秘策としては到底使えない。敢えて使うとしたら、仲間割れを誘うくらいだろう。

そもそも、真っ逆さまの能力では相手の脳からでた信号を、自分の脳が感知するなんて出来ないのだ。出来たとしても、頭からでる信号を理解するなど無理だ。“足を動かす”という信号が、伝わりやすい文字のまま頭の中に入ってくるわけがない。その膨大な数の複雑な信号を処理するにも、人の頭ではどう頑張っても無理なことだ。

そんな難しいことよりも簡単な足止めを出来る方法がある。

それは、一人ひとりに別々な五感の情報に置き換えることだ。

これなら、別々に違う幻覚を見せるので、お互いに干渉させるわけでもないし、近くに居なくても相手の脳が勝手に混乱してくれる。

というわけで、先に幻覚から醒めたふきは、ストライガ魔女草の連中は追わなくていいと葛から言われていたので、まだ幻覚から醒めず、一人混沌とした似非説明をしている葛を放置して、煙草を買いに行ったのだ。

十

「あのチビのステルス能力、卑怯すぎるだろっ!？」

真っ逆さまの能力により、葛とふきから振り切ることができた魔^ス女草の二人は勧誘する魔女の元へと向かおうとしていた。

「確かにあれは卑怯ですね」

くららが疲れました。と額の汗を拭った。

「で、これから魔女を勧誘しに行くのか。あのチビ、魔女の居場所までも変えてるんじゃないやねーだろうな？」

「それはないと思います。真っ逆さまが能力を使った時点で、もうあの人たちは使いものにならないでしょうし。それよりもたった今、その魔女と追っていた捕獲員が戦いを始めたみたいですよ」

「早くしないと、こちらが勧誘するまえに、捕まるかもしれないかな」

「……………」

「どうした？」

「捕獲員なのか、ただの能力者なのか、わかりませんが……、魔女と捕獲員の戦いから、遠ざかるように逃げていく能力者が一人いるみたいで、その人を追っているのか強奪の魔女が近づいて、えっ！？」

「おい、本当にどうしたんだよ？」

くららが血相を変えて叫んだ。

「この能力者っ、本当に危険ですっ！ わたくしたちの仲間にするかっ、もしくは殺さないといけませんっ！」

面を食らった真っ逆さまはくららを落ち着かせようとする。

「おい、焦るなよ。ちゃんと話せって」

だがくららは落ち着くことはなかった。

「真っ逆さまは、今戦っている魔女と捕獲員の方に向かってくださいっ！ こっちの能力者は、わたくしが何とかしますからっ！」

そう言うときからはわき目もくれずにその能力者の元へと走って行ってしまった。

相方が急におかしくなり、途中、呆然としていた真っ逆さまは一人取り残され、

「………………。おい、どこで魔女と捕獲員が戦っているか、訊いてないんだけど…………？」
「ぼそつと呟いた。」

ひとくいっ! **Masaki Angle 9/18 17:21 (前書き)**

誤字脱字などありましたら指摘お願いします。

どんどんと殺し合っている二人から遠ざかっていく。

ばにらさんを守るために行動したじゃないか？ と体を奮い立たせようとしても、あのばにらさんの獰猛な肉食獣の目、人を喰おうとしている突き刺すような目を見たら、そんな腐った正義感も一瞬で吹き飛び、過去のトラウマ、魔女になった姉が、殺した両親を美味しそうに貪っている姿が代わりに浮かんだ。そして当然のように怯え、恐れ、逃げていく。

そんな僕の黒歴史を思い出したくないのか、現実逃避に近い感覚で、珠奈の様子がおかしいのはどうしてなのだろうか、と考えようかと思いきまされたが、考えれば考えるほど余計に分からなくなっていく。そりゃそうだ。トラウマの方が強いもの。僕の思考に恐怖の墨をぶちまけて隠していった。あーあ、本当に情けない。

何故か珠奈は僕が住んでいるマンションの方へと向かっている。そこには、ばにらさんの食べ残しがあって、今、警察、あるいは政府の機関が後片づけをしているころだろう。近づきたくないとは言えず、ただ黙って珠奈の後を着いてく。

だが急に珠奈が立ち止まった。そこは誰もいない、古い空き家の前だった。

「どうしたの？」

珠奈は僕をその空き家の中に連れ込んだ。

空き家の鍵は何故か開いてあり、僕はされるがまま家の中に入れられる。

靴置き場は広く、その先には廊下が続き、扉が三つあった。

家にかかることなく珠奈は振り返り、深呼吸をし、決心が付いたのか、満面の笑みで僕を見て言った。

「あたし、雅樹のことが好きだよ。世界中で一番愛してる」
僕はその唐突の告白にたじろいだ。

「な、何、急にそんなことを」

「そんなことじゃない。あたしにとっては大切なことだよ？」

「じゃあ、何で、こんな時に言うんだよ？」

珠奈は話しながら僕に近づいてくる。

「今までは、まだ時間があるからとか、フラれたらとか、恥ずかしいからとか、色々と考えて、躊躇して告白でなかったけど、あのゴミが現れて、このままじゃ、雅樹を盗られそうで、何とかしなきゃ、って思った。でも雅樹があまりにも真剣にゴミのことばかり考えているから、本当に盗られちゃうって感じた。だから早く告白して自分の物にしなきゃって。でも、できなかった。雅樹を抱きしめたのに拒絶されて、ああ、あたしじゃ駄目なんだなって思った」

「……珠奈」

「でも、今は違う。あのゴミと同じ条件で、雅樹好みの女の子になったんだ」

僕は珠奈の言っている意味、意図が分かるが理解できない。そもそも僕好みの女の子って、珠奈なのに……。

——ちよっとまで、ゴミっていうのは多分、ばにらさんのことで、ばにらさんと同じ条件って——

「ちよっと待ってね。やっぱり好きな人の前でも恥ずかしいから」
照れながら真知は上半身に着ている服を脱ぎ始め、ついでに肌着とブラまで脱ぎ、半裸になった。

僕は沈黙した。みとれていたと表現できるかもしれない。

真知の二つの乳房の間、僕から見て右寄りに、ぽっかりと握り拳より一回り大きいくらい穴があった。貫通はしていないがその部分の中身がドス黒くみえ、くり貫かれていることがわかった。その穴からは肺と白い肋骨も見えた。そこからの出血はもうすでに止まっているようで、血が吹き出している様子もない。そもそも吹き出るようにするには、血液を送り出すポンプの役割の臓器が必要だ。そ

れがくり貫かれているのだ。

それがない。

ない。

ないⅡ死

死Ⅱ動かない

じゃあ、目の前にいる僕の好きな人はいったい、

何？

「恥ずかしいからそんなに見ないでよ。あとで他の所も沢山見せてあげるから。だってあたしは雅樹のものなんだよ。好き勝手にしていいんだか」

珠奈の体が僕を真っ正面から抱きしめる。珠奈の胸の穴から出て黒く固まった血液が僕の服を汚した。珠奈の肌を直に触れた感触はそれなりに柔らかくすべすべしていて良かったが、温もりは一切感じられず、人は思えないほど、

冷たかった。

僕の口を真知の口で塞がれた。珠奈の唇は独自の柔らかさがあったが、

つめたかった。

僕の唇の間から唾液で濡れた珠奈の舌が進入して前歯に触れた。

だけど、

ツメタカッタ。

前歯の奥の僕の舌に触れ、弄んで、口の中を舐め回している。やはり、

T u m e t a k a t t a。

ボクハ、コンナフウニ、オボレタカッタンジャナイノカ？

「ぷはっ」

珠奈は満足したのか長い長いキスを終え、自分の唇に残る僕の唾液を舐めとり体を痙攣させながら恍惚とした表情で僕をなめ回すようにみた。だが珠奈は僕の様子がおかしいことに気づいた。

「……どう、したの？」

まさかあたしとこんなことしたくなかったの？　と言わんばかりに寂しげな表情で僕に訊いてくる。

僕は、訊いた。

「……珠奈は魔女になったの？」

珠奈は屈託のない笑顔で返した。

「うんっ！　魔女フェチの大好きな雅樹のためにわざわざサバドに心臓を渡したんだよ？　痛くて痛くて何回も失神したけど雅樹が喜んでくれると思ったから頑張れたんだよ。大好きな雅樹の為に」

僕は最後まで聞かずに訊いた。

「じゃあ、何で」

「珠奈は、燃えないの？」

「へ？」

言っでなかつたつて。

僕は能力者で、その能力は、僕が触れた魔女を、再生できなくなる――死ぬまで燃やす能力だつて。

あと、その能力で、魔女を、人を、肉親を、姉を、殺したことあるつて。

ひとくいっ! **Masaki Angle** ×××××× (前書き)

誤字脱字などありましたら指摘お願いします。

ひとくいっ！ **Masaki Angle** ×××××

僕はあの時、セックスという同じことの繰り返し行為に飽き、嫌気が差して燃やしたのだろうか？

それとも僕の中の良心という名の灼熱の聖なる炎が近親相姦という二人手を取り合って、愛し合って、騙し合って、犯した罪を燃やしたのだろうか？

はたまた僕の方がたまたまその時に僕の中に眠っていた能力が開花し、偶然が偶然を呼び、いくつもの偶然が重なって燃やしたのだろうか？

それこそ、恐竜がなぜ絶滅したのか生物がどうして生まれたのかとかみたい、いくつもの推論があって、どれもが正しいと言って、どれもが間違っていると言える、そんな、どうにでも考えられる絞り滓でしかない。そんな排他的なものをずっと考えている。

姉が魔女になり、父と母を食らい、僕が姉を性的な意味合いで食べて、それを愛と偽った次の日。

僕と姉は世界のすべてから逃げようと逃避行を企てた。

そんな無鉄砲な計画なんぞ、すぐに破綻することくらい姉の頭だったら、すぐにわかったはずだった。しかし、そのころには姉の精神はもうずたずたに壊れに壊れ、僕さえいれば、誰を食ようが雅樹さえ居てくれれば気にしないよ、いつてのけるほどボロボロに壊れ、心の支えを、たった一人の血の繋がった異性の家族の愛情を求めていた。

だから僕も一緒になって壊れた。
さらに愛したいと思ってしまった。

愛するなら愛する人と同じでなければ愛せない。

それが僕にできると信じてしまった。

その日の晩は、今度は姉から誘ってきた。

愛して、と。

全く、セックスするのに都合のいい言葉があるもんだと、今の僕ならそう言い捨てるような甘美で、甘い蜂蜜の様な台詞に、我が身を忘れさせて誘われる蝶のように食らいついた。もちろん僕はごく興奮した。

このときの僕は、当たり前のように姉を愛そうとした。

これからも、ずっと壊れた僕らはそうやって生きるんだと。

けれど、その夢は、儚く燃えた。

罰が下った。

僕が魔女になって冷たくなった姉の体に触れた瞬間、

姉の皮膚、すべてから火が上がった。

絶叫が上がった。

僕はその怪奇現象に驚いてとっさに後ろに引いた。

姉が熱いと、僕の名前と助けを叫び狂い燃えながら、熱にもがき苦しんで暴れ狂っていた。それはくるくると踊っているように見えた。

僕は必死に姉から上がった火を消そうと、必死に水をかけたり、布をばたばたさせたりして火を消そうとしたが、すべて効果は全くなかった。不思議なことに、姉から発火した火は、僕や他の物を一切燃やさずに姉の体だけをうまく焼いていったのだ。

最後に姉は、僕に抱きついた。

僕には一切燃え移ることも、皮膚が熱で焼かれることもなく、その業火は、火力だけまして、姉を体だけを上手に焼いていく。

姉は、ここで正気に戻れた。
死の瀬戸際で、僕に、言った。

「これが、罰なんだね」

僕は、罰を受けなかった。

ついに姉が倒れた。体の水分は蒸発し、人を形作っていた多くのタンパク質や脂肪はすべて炭になり、骨と骨を繋ぐ間接が燃え、もろくなった両腕が落ちて、バランスを保てなくなり、重力に負け、その場で崩れていった。

床にぶつかり、姉の形は固形物と呼べるくらい小さくなった。

姉は、夢のみたいに、砕け散った。

魔女が本当に死んだ。

同時に姉も呆気なく死んだ。

間違えた、僕が殺した。

そして、狂って、壊れた僕だけが、凶々しく生きていた。

魔女になった姉を殺して、

魔女にした姉を殺して、

姉を殺して、

殺して、

図々しく、

「うあああああああああああああああああっ! !」

泣いていた。

ひとくいっ! Houzuki Angle 9/18 17..15 (前書き)

※グロテスク、性的描写が多数（特にグロ）ありますので注意してお読みください。

頑張って毎日更新してますが、作者の限界が近いので、更新できなかったらすみません。

誤字脱字などありましたら指摘お願いします。

「くたばれ」

鬼灯はばにらの至近距離まで瞬時につめ、右手に持った金槌をばにらの左肩めがけ、振り下ろした。

「嫌ダワ、痛ソウダシ」

ばにらは振り下ろされた右手首の掴んで止めて、

「ソレニ美味シソウ」

掴んだ右腕に噛みついた。

「くっ、」

噛みつかれた鬼灯の腕の肉は、ばにらの歯がどんどんめり込んで、肉を裂き、血がにじみ出てきた。

ばにらは、嬉しそうに肉から染み出た鬼灯の血液を堪能する。骨を噛み砕き、肉ごと引きちぎろうか、そのまま神経がつながっているこの状態で咀嚼しようか、楽しそうに迷い、そして動きを止めた瞬間に、ゴツツ、と首に重い衝撃が走った。

鬼灯が残った左手にある金槌を、ばにらの首、体からの神経が集中している所、めがけて振り下ろし、首の骨を粉碎したのだ。

驚いたばにらは噛みついてた鬼灯の腕から口が離れ、砕け散った首の骨が脊髄を切断したために、脳からの信号断たれた体は、自ら立つことができず、重力に従い、その場に倒れ、受け身もとれない為、顔面からアスファルトにぶつかった。

倒れ込んだばにらの頭を鬼灯がおもいきり蹴り飛ばす。簡単にばにらの首がおかしな方向に曲がった。

ばにらはうつ伏せの状態で鬼灯を見上げていた。

その状態でニヤリと不気味に笑みを浮かべた。

「アリガトウ。オカゲデ一回死ネタワ」

「っ!？」

ばにらの首が元の位置に一瞬で戻り、回復した。

魔女は、自分の体が何らか怪我により、損傷し、生命活動を行えなくなった場合、自分の体の中に存在する物質をうまく利用して、再生と回復を行う。そして、何事もなかったように体全体を怪我を一瞬で治ってしまうのだ。

途轍もなく便利な能力だが、欠点があり、体の中の物質が足りなくなれば回復できない。例えば、腕一本切り落とされて死んだとしても、残ったから腕一本分の材料がなければ、生き返る際に腕は生えてこない。バラバラに吹き飛たり、燃やされ続けたりしても回復が出来ない。すなわち、回復が追いつかない事になったら、つまりそれが魔女の死、である。

鬼灯の両足首が両手で掴まれ、ばにらはその足を勢いをつけて自分の方へと引っ張った。

「ぐっ!!」

鬼灯はバランスを崩して尻餅をつくように倒れ、痛みに顔をしかめる。

「アハッ」

ばにらは笑って、すぐに足から手を離し、鬼灯に馬乗りになり、首を絞めようと両手を首にかけて、首を折るように締めた。ぎりぎりと首を絞める音がする。

鬼灯は振り払うように左手に持った金槌をばにらの右頬に振った。ぶつかったばにらの右頬はめり込み、陥没。口から溢れた血と何本かの根本から折れた奥歯が左方向に飛び散る。原型を止めないばにらの顔の口からは、血と唾液が混ざった混合液が溢れて鬼灯の服にジュースをこぼしたように服を赤黒く汚した。ばにらに今衝撃によって隙ができた。さらに鬼灯は金槌を振りあげ追撃した。金槌でのアッパーは、ばにらの顎を碎き、輪郭をつぶした。さらに上下の前歯が歯茎にめり込みさらに出血せ、上空に血と折れた前歯が勢いよく舞う。勢いがついて、ばにらは後ろ向きに倒れていった。

舞った血が辺りに大粒で少量の液体とカルシウムで出来た小石を降らし、斑に赤く汚す。

「はあ、はあ、ざまあみろ」

鬼灯が上半身だけ起き上がり、生き絶え絶えに罵った。

「二回目。ダカラ、ソウイウ物理的攻撃ハ効キヅライッテ、分カツ
テイルワヨネ？」

回復したばにらは、右足を鬼灯の首にかけ、あとはアスファルト
の硬い道路に頭をたたきつけた。

鬼灯は叩きつけられた瞬間に、ガツと、うめき声を上げて、痙攣
し、動かなくなった。叩きつけられた箇所から血がでて、髪を赤く
ぬめらせる。

「大丈夫ヨ？ チョットダケ脳震盪デ、眠ッテモラウカラ」

ばにらはゆっくりと上半身を上げて、頭から血を流している鬼灯
の姿をどこから食べようか見回し、自分の血と涎が混じった液を口
から垂らしながら、先に鬼灯の中につまっているものを食べようと
手を伸ばした。まず、いろいろと剥がさないと中は食べれない。服
とか、皮膚とか、肋骨とか。

だが、それぐらいでは鬼灯の意識は落ちてはくれなかった。

「……………生憎、俺は、能力せいで、意識は、飛んでもすぐ戻
るんだよ……………くそっ」

鬼灯の能力は、回復速度が異常なまでに早いというものだ。その
能力は魔女の回復能力に似ているが、実際は違うものである。鬼灯
の場合、魔女と違って一撃で死ぬくらいの大きな怪我をしたら、普
通の人と同じで死ぬのだが、切り傷、打撲、捻挫、ここでは関係の
無いものだが、インフルも風邪も驚くべき早さで治ってしまうのだ。
さっきばにらに噛まれ、くつきりと噛み痕が残っていた右腕も、す
でに治りきっている。そして気を失ってもすぐに回復し、意識を取
り戻してしまうのだ。

アスファルトに叩きつけ、とどめ刺せたと油断したばにらの両目、

めがけ、鬼灯の左手の人差し指と中指が迫った。

ばにらは、本能的に攻撃を避けることしなくても、受けた怪我はすぐに回復するからなのか、二回生き返ったので判断能力が落ちているせいなのか、見当も付かないが、反射的に瞼を閉じるだけのものとも自然で、本能的な防御だった。

鬼灯の指は、軽々とばにらの瞼の間から進入し、眼球を貫いた。
「アアアアアアアアアッ!？」

鬼灯は指を一気に引き抜く。粒状の物が一緒にこぼれ落ちた。さうらにつぶれた眼球から血と透明のゼリー状透明な液体がドロツと吐き出てくる。ばにらは顔面を手で覆い、激痛に悶え苦しんだ。これだけでは魔女の体は死ねない。

鬼灯は左足の裏で、まだのっかっているばにらの腹部を蹴飛ばした。蹴飛ばされたばにらは転がり、鬼灯から二、三メートルくらい離れた地面に這い蹲りながら、目と腹部の痛みに悶えている。

「……………畜生、嫌なこと思い出させやがって」

鬼灯はゆっくりと立ち上がり、落とした金槌を探し、見つけ、ゆっくり歩きながら、金槌を拾う。

「なあ、なんで頭、狙わなかった知っているか？ 殺すには確実な体の部位なのに」

鬼灯はゆっくりと、まだ両目が治らないばにらの元へと歩いていく。さすがの魔女でも死なない限りすぐには治らない。

「それはなあ、魔女は死んだら、怪我した箇所は治すため、足りない物を他の部位から補って治すだろ？」

ばにらは自分の首の半分を片腕でちぎろうと力を加える。そうしなければ死ねず、早くしなければ鬼灯に殺されてしまう。

「その際、その部位を形作る細胞を新しく作って再生するらしいんだ。頭割られて脳味噌吹き出して死んだら、そのなくなった脳細胞が新しく出来て再生するそうだ」

ついに、ちぎれた。ばにらは、また死んだ。そして、待ちに待った、なくなった部分、目とちぎった首が再生、修復されていく。

「そうすると吹き飛んだ脳細胞に保存されていた記憶がなくなるんだ。そりゃあ当たり前だけどな。一応、魔女にも、元は人だったんだから人権はある。だから記憶を無くすことは死と同じだ。法でも魔女の死はそう定義され、同時にタブーになっている。捕獲員が魔女を狩るときに首切り落とすのは、一番ベターかつ安全な方法だからだ。そうすれば首がなくなった魔女は復活できないし、人を襲うことなく簡単に運搬できる。あとで首と体をくつつければ、ちゃんと元通り生き返る。記憶もそのままな」

ばにらの新しい、内出血して赤く染まった目が鬼灯を探した。そして見つけた。

「俺は機関に仕えているから、反することはできないし、破れば法律によって裁かれる。だけど、それでも、反しても、破っても――

――」

鬼灯は金槌を高く振り上げていた、その姿を。

「許したくないものが俺にはあるんだよ」

鬼灯がばにらの頭に向かって下した鉄槌は、ばにらの目で捕らえた。

だが、ばにらはもう逃げられない、と悟った。

ゴスッ。

陥没した。

ひとくいっ! **T a m a n a A n g l e 9 / 18 17 :: 26 (前書き)**

おかげさまでPV5000、ユニーク500を超えました。本当にありがとうございます。これからも読んでやってください。誤字脱字などありましたら指摘お願いします。

雅樹は確かにそう言いました。

「何で珠奈は、燃えてないの？」

燃えるって何が？

私は理解できなかったので雅樹に聞き返しました。

彼は燃やせる物なんて持っていないし、何かの法則で発火し、着ている服が燃えるのかと思いましたが、化学とか物理学とかには滅法弱いので、私のしがない頭では推測すらたてられません。

「だって、珠奈は、魔女、なんでしょ？」

雅樹がそう言い、私は胸にあいた穴を誇らしげに見せつけてながら、どこをどう見ても、私が魔女じゃなかったらこんな風に生きている分けないでしょと言いました。

心臓がないのに生きているなんて、私の記憶の中では魔女くらいしか心当たりありません。現在の医学は進歩しているといっても流石に居ないでしょう。

「……………」

雅樹は今から自殺してもおかしくない程、暗い表情を浮かべています。

ここ、私は気づきました。あれ、何かおかしいと感じました。

彼が魔女に何かしらの一物を抱えていることは確かです。見れば誰だって分かります。だからって魔女が彼の好みとは限らないし、一目惚れという線も、彼がそんな面食いなわけがないことくらい分かっていましたし、単純に、本当に救いたかっただけなんじゃないかとも考えられます。結婚しているお医者さんだって、結婚相手の怪我、病気の為だけに医者をやることなんて、そんなの宝の持ち腐れですし、ましてや、お医者さんの結婚相手が、同姓の患者さんに嫉妬するなんて、お門違いにもほどがある。そんな感じで私自身が途方もない思い上がりをしているように感じました。

じゃあ、何で私は、あの魔女に嫉妬したのでしょうか？

彼があ魔女に見せた笑顔って、いわゆる、営業スマイルと言うやつじゃなかったのではないのでしょうか？ それなら一応、親しい私が見れなのは当たり前です。それに服を貸したのだって、魔女が着ている服が血で汚れていたからで、新しい服を買うにしろ、彼が女物の服に詳しくないから、魔女自身に店に行って選ばせようと、目立たない服を貸してやったんじゃないのでしょうか？

あれ？ 全部、私の一人よがりだったんじゃない？

私はその自分の頭の中に出てきた仮説を確かめるため、恐る恐る訊きました。

魔女とかそう言うものとか関係無しに、私のことが好きか、と。

雅樹は口を開きました。

「——うん」

私は頭の中で何かが、また崩壊しました。

一瞬で間違いに気づきました。

私は、馬鹿でした。

大馬鹿でした。

どうしようもなく、救いもないくらい、大馬鹿でした。

こんな私を好いていてくれるのに、私がただ愛されたい、独占されたいと、何かも悪い方向に考えて、こんな行動に出てまでして、彼を奪い取りたかったと、酔っていた自分を八つ裂きに殺したくなりしました。奪い取るものにも初めから彼は私を見ていたというのに、勘違い、被害妄想までして、彼が魔女が好きなんだから、私も魔女になればかまってくれると思って、心臓を渡してまで魔女になって、それで、彼が救いたかった人を見捨てさせて、こんなことまでして……。

ああ、死にたい。

私は泣いていました。自らの愚かさに泣きました。冷たい冷たい涙でした。

こう抱き合っているというのに、彼には私の体温も鼓動も何も伝わらないことにも気づきました。それに捕獲員に捕まったら、それこそ彼にはもう会えなくなる。触れられなくなる。もう一生、こうして居られなくなる。それくらい分かっていたはずなのに自分の軽はずみな行動を恥じました。

前に、魔女になりたい、と思う子もいるんじゃないかな、と自分はそうはならないと高を括りながら言いました。馬鹿で単細胞、頭になにも詰まっていけない私は、彼に好かれたいが為に、魔女になりたいと思いました。そして、心臓がなくなつて、魔女になつて、喜んで、後悔しました。恋する乙女は盲目とか言いますが、確かにそうだったと身にしました。

悔やんでも、当たり前前に、失ったものは、帰ってきません。

こんなんじゃない、もう駄目じゃん。

ぽっかりと空いた胸の穴にあったのは私の心だったのでしょうか？その空洞から溢れることない黒く固まった血液は、私の邪悪な感情なのでしょうか？

私の愛情は、この体の体温のように冷たく、彼の心の体温を奪っていくのでしょうか？

分かりません。分かりたくもありません。取り返しのつかないことをしてしまったことを悔やんでも仕方がないじゃん、前向きに生きろよ、とドラマの主人公に向けて、呟いたくせに、自分が体験すると、こうも後ろ向きになりたくなるのだと、思いました。

彼はずっと謔言のように呟いています。

私は泣いています。

壊してしまったものは、戻りません。

分かっています。

分かっているつもりです。

でも、でも……。

「また、悩んでいるのね？」

彼の後ろ扉が開き、あの女性が近づいてきます。ああ、あの人は

――

私は、その女性にいいました。

私の心臓を返してください、と。

女性はいいました。

「それはあなたが魔女になりたいと、私に頼んできたからしてあげたのよ？ それにクーリングオフ制度なんてある分けがないじゃない。病院で手術後にお医者さんにそんなこと言えると思う？

返す返さないの前に、あなたの心臓はもう、おいしく頂いちゃったから、もうないわよ」

私は喚き散らしながら、返して、返してと連呼しました。

女性は呆れたようにいいました。

「あなた、それは虫の良い話だとは思わないの？ それに心臓を返したとしても、あなたの体の定置に戻すことなんて、私にはできないわよ？」

私は泣き崩れました。流石にここまでわんわん泣いていると、さっきまで、嘘だと狂ったようにぶつぶつ言っていた彼が気づき、後ろを振り返ってその女性を見ました。

彼はその女性を目を見開いて、驚いていました。

「……珠奈、この人は、誰？」

彼が訊いてきたので、簡潔に、私を魔女にした人と答えました。

彼は私が発した一言で、溜飲を下げたようでした。そして、飽きれ口調で言います。

「ああ、なんで珠奈が燃えないか分かったよ。そうか、そういうことなのか、そうだよな。僕がおかしいんじゃない、狂っているわけでもない、えり好みして燃やしたわけではないんだっ！」

どんどん飽きれ口調から、怒りのはらんだ強い口調に変化ていき、

「そうですよね？」

彼は女性を睨みながら、同意を求めました。

「ええそうよ。雅樹君」

女性は微笑みました。

どうして、彼の名前を知っているの？

「そうですよね——」

「捕獲員の有佐百合子さん」

雅樹は、その女性の名前を言いました。

ひとくいっ！ **Masaki Angle 9/18 17:28 (前書き)**

誤字脱字などありましたら指摘お願いします。

僕は後ろからやってきた、珠奈の心臓を騙し取った百合子さんに向かって言った。

「なんで珠奈、彼女を騙したんですか？」

僕は、魔女になったはずの珠奈が、僕の能力で燃えない理由が分かった。

珠奈は魔女ではない。

心臓がなくても、魔女でなければ、ただの人であり、僕の能力で燃えることはない。

何かしらの能力で、心臓がなくても、その命を繋いでいるのだ。

そう、捕獲員の――僕と同じ、能力者として。

「あら、彼女が魔女になりたいと、私に頼んできたから、私の出きる限りを尽くしてあげた。それだけよ？」

百合子さんは微笑みながらい、僕は怒りを露わにしながら言った。

「そもそも捕獲員は、人を殺す能力は持ってないはずだったんじゃないですか？」

百合子はせせら笑いながら言う。

「あなたみたいな異端者イレギュラーは別として、捕獲員、すべての先天性の能力者は、人を殺す能力は持つことはないと言われてるわ。そうすると、私みたいに殺せる能力を持った――殺さずに心臓を奪うも一応殺せる能力よね? そのような先天性の能力者というのはおかしい。まあ、あなたみたいなものいるから、一概に決めつけられないけれども、私の場合は、そういうことではなくて、ちゃんと理にかなっているのよ」

「それはなんですか? 人を殺せない能力でも、使い方次第では殺せるけど、自分が人を殺せないと思っているからできないという自己暗示ですか?」

「確かにそれもそうね。能力の応用しだいでは人をも殺せる、けど知らず知らずのうちに自らの力をセーブいるため、相手を殺せない、てこともあるわ。私の知り合いにもそういう能力者の子がいるから、着目点としては良いと思うけど、私の場合は残念ながらそうじゃないのよ？ もっとシンプルなものなの」

「じゃあ、なんですか？」

もったいぶるように百合子はうふふと笑みを浮かべながら発した。

「私は捕獲員、兼、魔女なの。機関からは強奪の魔女と呼ばれているわ」

「……………え？」

捕獲員、兼、魔女？

「嘘じゃないわよ？ それに魔女なら人を殺す能力を持っていたても全然、おかしくないでしょ？ 捕獲員でも、元はただの人間なのよ。警察官も自衛隊も総理大臣も俳優も、役職を捨てれば、元は同じ人

間のようにね。人で女の子なら、誰だって魔女にされてしまう資格があるの。私はそんな貧乏くじを引いちゃったんだけどね。あと彼女の心臓を奪ったのは、私が人間として偽装するため。この前まで、他の人の心臓を奪って私の中に移植して、今までなんとか騙してたんだけど、最近になって心臓が駄目になりそうだったから、新しい心臓が欲しくてねえ。丁度よく魔女になりたいって、子供のように泣き喚いている彼女がいたから、有り難くもらったのよ。どうせ魔女になりたいなら、心臓なんて、一番いらないものでしょ？」

百合子は珠奈を憎しみを持った冷酷な目で睨みつける。

「それに自ら魔女になりたいと言っている人って、どうも好きになれないというのか、はつきりいって、大っ嫌いなよね。私は好きで魔女になったわけじゃないし、こう魔女だつてばれてしまわないように怯えながら生きているっていうのに、そんな軽率に、たかが、男に好かれたいと言う下らない理由で、魔女になりたいと懇願している日和見の女のことなんて、気持ちを共有できないし、分かったくもないわ。まだ間に合う、考えられる時間も、選択権もいくらでもあるくせに、成りたがるところに怒りを覚えるわね。もういつそ殺してしまいたいくらい」

「それなら論すことだって、できるんじゃないかっ！？」 魔女になつらこんな辛いって、自体験を語ることだって」

怒りに任せて、僕は怒鳴って反論してしまった。

百合子さんは無言で僕を見ていた。

完璧に怒りに満ちて今にも喰い殺そうとしている魔女の視線だった。

「……………流石に今のは頭に來たわね。論すくらいでどうにかなるなら、この世界はもっと平和で、戦争も詐欺も偽りも嘘もなくてありもしない、優しい世界になっているでしょうね？ そんなの有り得ないでしょ？ それに彼女みたいな奴はね、言うだけじゃあ何も変わらないのよ。怪我したり、傷ついたり、失ったり、痛い目みない限りは絶対に気づかないのよ。あなただってそうだったでし

よ？ それにあなたがその台詞を言ったとしても、説得力が全くないわ。そもそも、彼女がそうなってしまったのは、あなたのせいでしょう？ あなた自身が、直接彼女にいつてあげなければいけないのに、私まで巻き込むのはやめてほしいわ。彼女が魔女になりたいと言わなければ、私は何もしなかったのだから」

「……嘘だ」

「嘘じゃない。生きている人から心臓を奪うのも大変なのよ？ 本当は他の魔女の食べ残しから心臓を奪おうと思っていたのよ」

百合子さんは怒気をはらませながら強い口調で僕に言った。

「雅樹君の台詞に頭にきたから、ちよつと腹いせしないと気が済まないわねえ？」

楽しそうに不気味に笑い、言った。

「大好きなお姉ちゃん何やったんだっけ？」

「っ!？」

シラレテイル。

アノカコヲ。

ケツシテシラレタクナイ、アノクロレキシヲ。

「知らないとも思った？ 私はあの場所に実際に居たのよ？ その場には他に、相手の記憶を読める能力を持った捕獲員も居たの。だから、あなたから事情を聞かなかったのは、単にそつとしてあげようと気を使ったわけでもなく、聞かなくても正確な状況を知れたということなのよ。でも、大丈夫安心して、その場にいた捕獲員と機関の上部しか知らないから、漏れる心配はないわ」

ダメダッテ。

「うふふ、じゃあ、あなたの必死に守ってきた過去を暴露して虐めてあげる」

ヤメテクダサイオネガイシマスソレイガイノコドタッタラナンダ
ッテシマスダカラソレヲタマナノマエデイウノハヤメテクダサイッ
クツダッテナメマスカワリニシンゾウダッテアゲマスオモシロオカ
シクシニマスコレイガイノハズカシメナラナンダッテイイデスカラ
コレハホントウニヤメテエクダサイイヤダダメオネガイシマスカラ
ホントウニヤメテホントホントウニナンデモココデセツプクダッテ
シマスカラソノハラノナカニウデツツコンデナイゾウヒキズリダシ
テワラッテミセマスカラソノアトイキタママボクノナイゾウタバテ
モイイデスカラソレダケハヤメテクダサイカノジョニキカセナイデ
クダサイオネガイシマスヤメテクダサイヤメテイヤダホントニホン
トウニ

お願いだから、やめてください。

「全部聞いてくれたら許してあげるわ。ちゃんと聞いていなさいね？
？ その彼女も、この男がした愚かな過去を」

そうして、僕は狂って、僕の過去を大切な人に聞かれた。

うん。
死の
う。

ひとくいっ! Houzuki Angle 9/18 17:30 (前書き)

誤字脱字などありましたら指摘お願いします。

ばにらの頭に鬼灯が振り下ろした金槌が、脳細胞を守る頭蓋骨を
いとも簡単に割り、めり込み、一部脳細胞を潰した。

ばにらは不自然に頭から倒れ、割られたところから脳漿が溢れ、
道路にまき散らす。

鬼灯は西瓜割りの要領でさらに深く割った。

ばにらの頭はアスファルトに、脳細胞と赤い血液が飛び散る。

鬼灯は立ち上がり、片足でぐちゃぐちゃに頭の残りを踏みつぶす。
肉や骨は踏みつぶしてもうまくつぶれない。

残った頭蓋骨も粉々に潰す。

やっと頭の形がなくなり、今度は体へと目線をやる。

簡単には潰せそうにないなど、簡単につぶせそうな指から潰す。

右手親指から、左手の小指、両足は踝の部分をつぶした。

次は両肘、両膝、両肩、腰、背骨、肩胛骨も、骨と言う骨は木っ
端微塵に潰した。ここでいったん魔女の回復を待つ。まだ殺したり
ないからだ。だが、回復できずに死んだらしい。

魔女は死んでも生き返るが、失った箇所を新しく再生する材料が
なければ再生できない。再生できなければ、そこが魔女としての死
となる。

「おい、死ぬなよ」

鬼灯は返事を返すことのできない死んだばにら遺体に向かって怒
鳴った。

「まだやれるんだろっ！」

ばにらの体をおもいきり蹴飛ばした。

頭の上から半分がない体は、地面をごろごろと転がっていつて、
残った血と肉、脳漿をまき散らしながら、止まった。

「自慰行為は終わったかい？　その捕獲員？」

鬼灯は、急に誰かに声をかけられた。

周りには、ぐちゃぐちゃなばにらと遠くに交通の邪魔にならないように停めたバイクくらいで、敢えていうなら家が立ち並んでいる、どこにも変化はない。

鬼灯は声がした方向を向いた。つまり、

「こんばんは、捕獲員。うちの名前は真っ逆さま。魔女での名は道化の魔女っていう魔女草ストライガのしがない副リーダーさ」

真上を見た。

そこには鬼灯と対照的に地面から十メートルの高さの空中に平然と逆さに立っている白髪の魔女がにやりと笑みを浮かべていた。

「道化の魔女……、幻術系の能力を持っているのか」
真っ逆様は指をパチンとならした。

一瞬で、立ち位置が逆転し、真っ逆さまが立っていたように鬼灯が空に逆さに立ち、鬼灯が立っていたように真っ逆さまが道路に普通に立つ。鬼灯は所詮幻術だと言い聞かせるが、あまりにも感覚がリアル過ぎて頭の中が困惑する。

「この魔女は、うちら、魔女草ストライガが預かるよ」

真っ逆さまは、隣に立っている、ぐちゃぐちゃになっていない、無傷のばにらを指さした。

「おい、俺がさっきまでなぶっていたのはなんだ？」

「さあ？ 一人で妄想ヒーローショーでもしてたんじゃないの？
とっても痛々しかったけどね」

真っ逆様はケラケラと笑いだした。鬼灯は眉根を潜める。

「うちに負けたからって気にすることはないぜ？ 捕獲員。なんせうちの能力は、頭に脳味噌を持っている人間には、絶対に勝てないから」

そう言いながら真っ逆さまは、再びパチンと指を鳴らした。

「っ！？」

すると、鬼灯は、空高く、落ちていった。

高度が高くなるにつれ、だんだんと酸素が薄くなり、息が苦しくなる。

そして、肺が、鼓膜が、頭が、目が、内蔵が、内気圧と外気圧の差によって内部から体が膨れ上がって体中に激痛が増していき、

「あがつ！？」

破裂した。

さらに高くなり、木っ端微塵になった。

鬼灯の意識がブラックアウトした。

「それ、全部、あんたの妄想だけどね」

真っ逆さまは鬼灯にだけ、聞こえるように囁いた。

ひとくいっ! **S t r i g a A n g l e 9 / 1 8 1 7 :: 3 2 (前書き)**

誤字脱字などありましたら指摘お願いします。

「はははは。チョロいチョロい」

真っ逆さまは道路に気を失って倒れ込んでいる捕獲員を見てせせら笑う。

「何デ、助けテクレタノカシラ？」

隣にいたばにらが訊いた。

真っ逆さまは、ばにらと鬼灯の戦いに、誰にも気づかれずに乱入し、鬼灯にいつの間にか幻覚を見せ、鬼灯を何かと一人戦かわせ、その間、ばにらに持ってきた食べ物（豚肉）を食べさせ、失った分の細胞組織を回復させていたのだった。

真っ逆さまが頭を掻きながら考え、ばにらに言う。

「んゝ。あんたが魔女だから、かな」

「曖昧ネ。マア、礼ヲ言ツテオクワ。アリガトウ」

「どういたしまして。それとあんた、^{ストライガ}魔女草って魔女の組織にはいないか？ 機関の捕獲員から逃げて、国から魔女の、人間としての自由な権利を得るために連んでいる組織みたいなもんだ。と言うか、助けたことを貸しとして、半ば強制的に入れさせようとしているんだけどね」

ばにらはニヤリと笑みを浮かべた。

「ワタシハ、別ニ構ワナイワ。デモ、モウ一人ノワタシガ、ドウ思ウカハ、検討モツカナイワネ」

真っ逆さまの頭上にクエスチョンマークが浮かぶ。

「ん？ どうゆうーこと？ 二重人格ってやつなの？ あんた？」

ばにらが素っ気なくどこか投げやりに答える。

「ソナトコロネ。ソレガモウ一人ノワタシノ魔女トシテノ能力ヨ」

「ふーん。敵味方関係無しに襲ったりはしないよな？」

「ワタシハ、モウ一人ワタシノ命ガ危険ニ晒サラサレタトキニ出テキテ、ワタシヲ殺ソウトシテイル、危険因子ヲ殺シ、必要ナラバ食

ベル、ソンナ只ノ魔女トシテノ能力ノ一欠片ヨ。アナタガワタシヲ殺ソウトシナイ限り、ワタシニアナタヲ襲ウ理由ハ無い。ソコハ安心シテ」

本当ハ違ウンダケドネ、と真っ逆さまに聞こえないよう、小さく言った。

「そうかい。じゃあ、行く所ないなら、うちに着いてきてくれ。もう一人の魔女草ストライガのやつと合流すつから。まったく、くららのやつはどこ行ったのか……」

くららが向かった場所の大体の方向は知っているのだが、どうやってそこまで行けばいいのか、この周辺に着たばかりの真っ逆さまには分からなかった。倒れているこの捕獲員が、何時目を覚ますか知らないのです、ここから早く立ち去らなければ、面倒なことになる。

「オ言葉ニ甘エテ、アナタに着イテ行クコトニスルワ。ココニ居テモ危ナイシネ」

ばにらも同じ考えだったようで素直に真っ逆さまのあとを着いていった。

気を失い、敵討ちに失敗した鬼灯だけが虚しく取り残されたのだった。

ひとくいっ! **T a m a n a A n g l e 9 / 1 8 1 7 :: 3 7 (前書き)**

誤字脱字などありましたら指摘お願いします。

目の前で愚かな私に、百合子という、私の心臓を騙し取った魔女が、彼の過去をつらづらと、面白おかしく暴露していきます。

私は耳を塞いでできるだけ聞かない用に善処しましたが、完全には防げず、指の間から呪怨の様に頭の中に入ってきます。彼は発狂し、頭をかきむしたり、頭をそこら中に打ちつけたりしているため、傷ついた皮膚から血が流れ、苦悶の表情をした顔に流れて、赤く染めていきました。

彼の全貌を語り終えた魔女は彼に訊きました。

「実の姉とセックスしたときはどうだったの？ 気持ちよかったの？」

彼は唸りうずくまっていました。私はそんな地獄の真ん中をさまよっている彼を見ていることはできず、目を背けて泣いていました。

「懲りずにまた魔女を連れ込むなんて、どんだけ魔女フェチなのよ？ あなた、×××は冷たい方がそそのの？ ああ、そういうこと

ね。あなたは死姦が好きなのよね？ だから腐らない魔女でやりたいわけね」

彼は自分の首を絞め始めました。死にたい。死にたい。と叫びながら。

「しかも、こんな変態のあなたの為に、体を捧げてまで、尽くしてくれる彼女まで居るのに、一時の快楽に走るなんて、本当にゴミ屑よね？ 彼女にやりたいって言えば、生で中出しでも、どんな変態プレイでも、何でもしてくれたんじゃないの？」

死にたい。死にたい。死にたい。と彼は連呼しています。本当に死んでしまいたいそうでした。

私は彼をぎゅっと抱きしめ、首を絞めるのを止めさせました。

「だーから、イチャついてんじゃないわよ？ その死体。それともダッチワイフの方が良いかしら？ 彼好みのお人形さんになれた

んだから、それだけで満足しなさいよねえ」

私は彼に言いました。

お願いだから、死なないで、と涙声で言いました。

私が彼の過去を知って嫌いになるはずはないと思っていました。でも、現実はずっと重圧で、それこそ頭をがんがん地面にぶつけていた彼のように、ものすごい衝撃な内容でした。嘘だと思いたかったのですが、

彼の尋常じゃない反応からして本当にあったんだと思われ、一瞬引いてしまったところもありました。

でも逆に話してくれなかった理由も分かりました。こんな話、自分のことだと思ったら、

絶対に誰にも話したくないし、分かり合って欲しくない。それに自分が犯した罪なんだから償わなければならぬ。背負わなければならぬ。そう思うに違いありません。

腹を割ってこの話をして、万が一それで縁を切られたなら、それはそれで自分に対してのつらい罰になるでしょう。でも、それは辛すぎるから、誰にも話さずに抱え込んで隠して、一人で悩んで悔やんで、やっぱり教えない方が良く損得勘定で彼は決めたのです。そうやって平凡で温い日常を守りたかったのでしょう。守るためなら、全部壊れるよりは、ちょっとだけ疑われても仕方がないと、本当を知られたくないと怯えながら彼は生きていたのです。

彼は私との関係の為に言わなかった。それはどんなに大切にされていたか、十分に分かるものでした。

でも私には、死なないで、以外何も言えません。言える口ではないのです。彼が魔女と寝たと勘違いして嫉妬して、騙されて心臓を奪われた愚かな私が彼に対して言える言葉なんて残っていません。

すべて、自分の欲によって引き起こされた自分への罰。

愛する人を救えない。資格がない。

それが私から私への罰なのです。

「そのダッチワイフは本当に邪魔ね。そろそろ魔法が解ける頃よ

？ さっさと死になさい」

私は死ぬんだとあっさりと悟りました。

漠然と黒い世界を想像しました。

そこは暖かさも、冷たさも、明るいも、暗いも、寂しいも、幸福も、何も感じない世界であるんだろうなと妄想します。

そして、彼に逢うことも、考えることも、想うことも、できない世界に放りこまれるのでしょうか。

あたし、死ぬんだって。これは、罰なんだよね。きっと。そう呟きました。

いまさら何をほざいているだろう。勝手に嫉妬して、あまつさえ天罰を受けたというのに、彼にすがりついて助けと言わんばかりに甘えているのです。そんな自分がクズみたいで、マンガとかでよく見る主人公とヒロインを仲を引き立てる為に、書かれた嫌な女みたいじゃないか、なんて嫌だと思っただけ、離れたくない、ずっと私を掴んでいて欲しいと、頭の隅で騒ぎ、駄々捏ねている自分もいます。どんだけ傲慢な人間なんだろう、救いようがない、見捨てられても仕方がない、そんなゴミみたいだと思えてきました。

「二人とも死んでもらわないと、私が魔女だってバレちゃうのよ。困ったものね。ねえ、雅樹君。あなたが魔女に触れると、触られた魔女は燃えて死んじゃうのよねえ？　ならどうやって殺しましょうか？　発狂させて自殺に追い込むつもりだったんだけど、そのダツチワイフが立ち治らせちゃったみたいだから」

魔女は私たちに近づきながら、懷から黒光りの鉄の塊、思っていたよりも小さい拳銃を取り出しました。

この魔女は、一応、それでも捕獲員なのだから、銃を持っただけでも何もおかしくはありません。

「これなら、あなたに触れられずに殺せるわ」

小さな銃の銃口を彼の頭に向けます。後は引き金を引けば彼の生命活動は急停止します。

私は震えながらその銃口の前に立ちました。こんなゴミでも壁く

らいにはなるのです。

「邪魔よ」

私は、ここで、そんなの撃って、殺したら、それこそ、あなたがしたってバレるんじゃないですか、と声が震えながら脅しました。

魔女はせせら笑いながらいました。

「うふふふ。死体から銃で撃たれた跡が見つかってしまうなんて、そんなヘマはしないわ。だって私は強奪の魔女だもの。その跡の周りを切り取って奪えば気づかれないわ。残った死体は微塵切りにすればいいし、厄介な銃声は威嚇射撃だったって言うことにしましょう。なんせ私は魔女だと思われていないから、強奪の魔女が出たと言え、信じてもらえるわね。だって現時点で本当にこうやって、実際にいるのだから。まあ、あとは信用の問題かしら。これでも無駄に媚び売っているわけじゃないわよ」

退きなさい。と、私の額に銃口を当てました。

私は震えていました。その震えは、この死に底ないが、何に怯えているんだか。最後の最後に命をかけて、愛する彼を守ってみせてみると、自分自身に奮い立たされているように感じました。

きっとそれは嘘でしょう。

本当に怖いです。

でも、そう思えて、守れるなら、私の本望なのかもしれません。言葉で伝えられないなら、命を張って伝えるくらいしか、私には残されないのですから。

それが私の彼に対する『愛』なのですから。

私は、二発、撃つのはさすがに威嚇射撃にはならないですよ、と挑発しました。

歯噛みして悔しがるかと思いました。

でも、魔女は微笑みました。それはそれは楽しそうに――
「確かにそうかもしれないわ。でも――」

「私が、何時、死に底ないの人形を撃ち殺す、って言ったの？」

私の首が切り取られ、落ちました。

「あなたにはいくらでも触れられるのよ」

盾にすらなれませんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6899x/>

まじょがりっ！

2011年11月21日10時06分発行